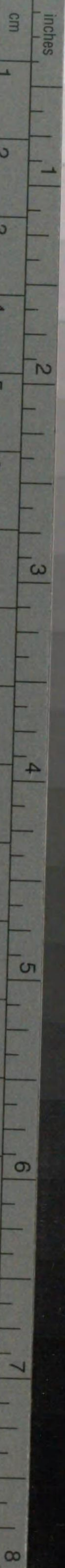


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

- A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



702

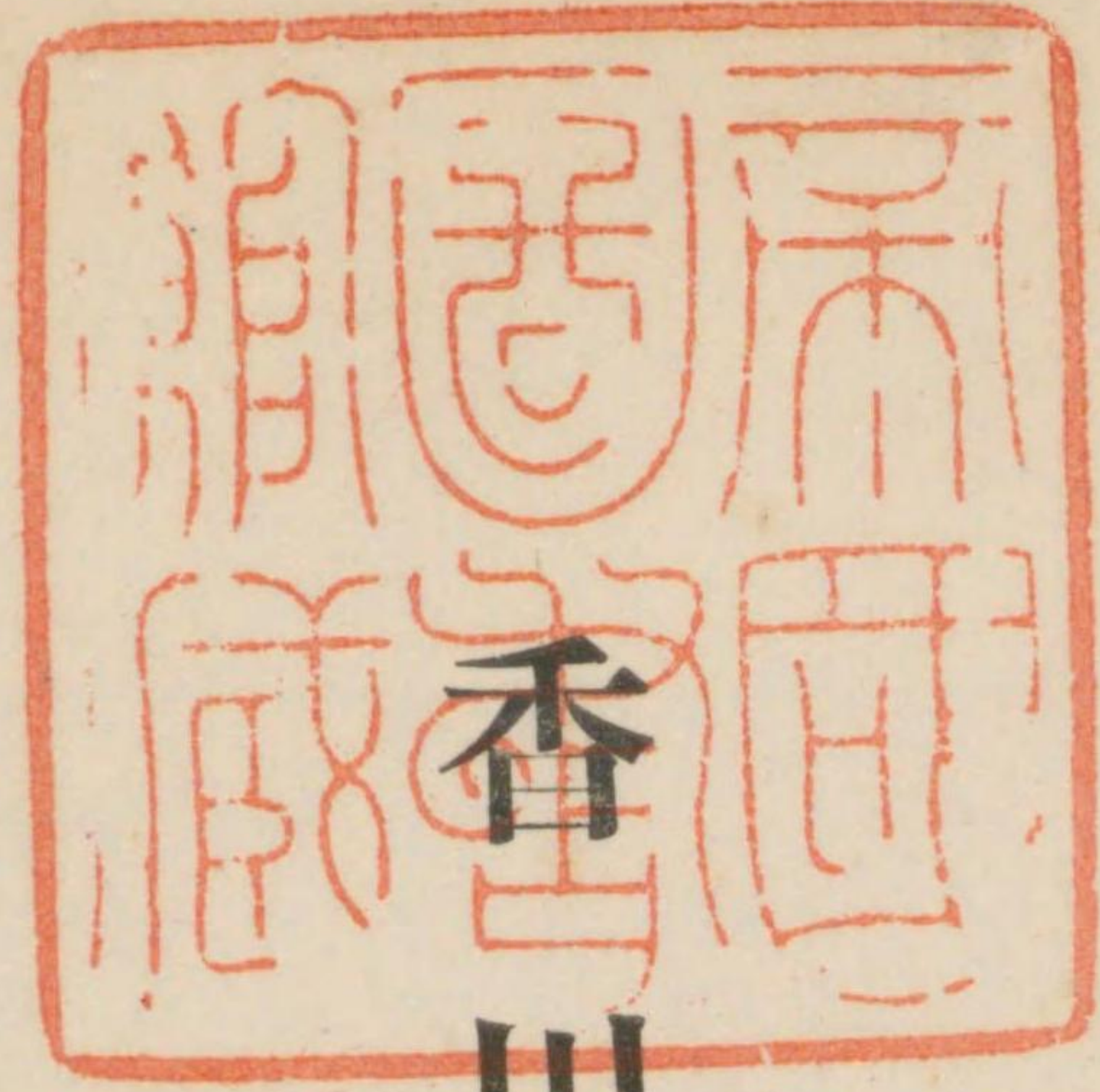
702-108



1200501582756

〇 複写

613



香川縣神社誌

上

卷



702
108

香川縣神社誌成る。これより先き昭和九年本會に於て本誌發刊を計劃し縣當局の支援を得て、爾來孜々として編纂に著手したるが、其の方針として、縣神社明細帳に登録せられたる所謂公認神社は洩れ無く之を收め、御社格御祭神御由緒御境内主なる御建物同御寶物氏子若しくは崇敬者の戸數又は人員等を記載する事とせり。而して御由緒又は御沿革の如きは限られたる紙數に於てよくこれを盡すべきにあらざれば、其の梗概を叙述する範圍を出でざりし事は遺憾とするなり。若し夫れ考證に至りては本誌の主たる目的にあらず。本誌に依つて敬神崇祖の念を涵養し、神社又は郷土研究者に寄與し若しくは神社參拜者に便益を與ふる事を得ばその望即ち足る。終りに臨んで本誌刊行に關し縣費を補助せられ、或は指導を與へられたる縣當局に對し滿腔の感謝を表し、併せて資料提供に務められたる會員諸君並に之が蒐集に對し特に盡力せられたる資料調査委員諸賢に對し深甚の謝意を表す。

昭和十三年九月

香川縣神職會長

琴 陵 光 瀨

神社名一覽

香川縣神社誌登載神社數

| 郡市別 | 國幣社 | 縣社 | 鄉社 | 村社 | 無格社 | 計 |
|-----|-----|----|----|----|-----|----|
| 高松 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 |
| 丸龜 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 |
| 大川 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 |
| 木田 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 |
| 小豆 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 |
| 香川 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 |
| 綾歌 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 |
| 仲多度 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 |
| 三豐 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 5 |
| 計 | 11 | 11 | 11 | 11 | 11 | 55 |

高松市内神社

| 登載番號 | 鎮座地 | 神社名 |
|------|-----|---------|
| 一 | 宮脇町 | 石清尾八幡神社 |
| 二 | 天神前 | 中野天滿神社 |
| 三 | 藤塚町 | 槻本神社 |
| 四 | 片原町 | 華下天滿神社 |

- 五 西濱町
- 六 天神前
- 七 宮脇町
- 八 中野町
- 九 中野町
- 一〇 中野町
- 一一 同
- 一二 藤塚町
- 一三 栗林町
- 一四 楠上町
- 一五 花宮町
- 一六 上之町
- 一七 花宮町
- 一八 栗林町
- 一九 濱ノ丁
- 二〇 西通町
- 二一 西濱町
- 二二 同

- 蜂穴神社
- 琴平神社
- 道祖神社
- 御先祖神社
- 御先祖神社
- 荒神社
- 稻荷神社
- 藤塚神社
- 神木神社
- 楠川神社
- 三社神社
- 秋葉神社
- 藤ノ木神社
- 諏訪神社
- 日和山神社
- 若王子神社
- 愛宕神社
- 西濱神社

- 二三 西濱町
- 二四 同
- 二五 外磨屋町
- 二六 内
- 二七 西濱新町
- 二八 北濱町
- 二九 東濱町
- 三〇 同
- 三一 福岡町
- 三二 同
- 三三 松島町
- 三四 同
- 三五 花園町
- 三六 同
- 三七 鹽上町
- 三八 新材木町
- 三九 南新町
- 四〇 古馬場町

- 琴平神社
- 神明神社
- 藤森神社
- 石槌神社
- 琴平神社
- 惠美須神社
- 東濱神社
- 藤木稻荷神社
- 鹽竈神社
- 鹽竈神社
- 松島神社
- 向良神社
- 荒神社
- 多賀神社
- 八坂神社
- 金刀比羅神社
- 水神
- 戸隠神社

神社名一覽

| | | | |
|----|-----|----|----|
| 四一 | 西瓦町 | 水ノ | 神 |
| 四二 | 新瓦町 | 稻荷 | 神社 |
| 四三 | 田町 | 琴平 | 神社 |
| 四四 | 東田町 | 琴平 | 神社 |
| 四五 | 鹽上町 | 琴平 | 神社 |
| 四六 | 同 | 荒 | 神社 |

丸龜市内神社

| 登載番號 | 鎮座地 | 神社名 |
|------|------|--------|
| 一 | 鹽屋村社 | 天滿天神社 |
| 二 | 上金倉同 | 八幡主神社 |
| 三 | 下金倉同 | 八幡神社 |
| 四 | 津森同 | 天神社 |
| 五 | 中府同 | 會下天滿神社 |
| 六 | 同 | 荒魂神社 |
| 七 | 同 | 荒魂神社 |
| 八 | 同 | 荒魂神社 |
| 九 | 土居 | 高木神社 |
| 一〇 | 同 | 龍神 |

大川郡内神社

| 登載番號 | 鎮座地 | 神社名 |
|------|------|-------|
| 一 | 御供所町 | 天積神社 |
| 二 | 西平山町 | 玉積神社 |
| 三 | 福島町 | 市寸島神社 |
| 四 | 富屋町 | 稻生神社 |
| 五 | 同 | 同 |
| 六 | 同 | 同 |
| 七 | 同 | 同 |
| 八 | 同 | 同 |
| 九 | 同 | 同 |
| 一〇 | 同 | 同 |
| 一一 | 同 | 同 |
| 一二 | 同 | 同 |
| 一三 | 同 | 同 |
| 一四 | 同 | 同 |
| 一五 | 同 | 同 |
| 一六 | 同 | 同 |
| 一七 | 同 | 同 |
| 一八 | 同 | 同 |
| 一九 | 同 | 同 |
| 二〇 | 同 | 同 |
| 二一 | 同 | 同 |
| 二二 | 同 | 同 |
| 二三 | 同 | 同 |
| 二四 | 同 | 同 |
| 二五 | 同 | 同 |
| 二六 | 同 | 同 |
| 二七 | 同 | 同 |
| 二八 | 同 | 同 |
| 二九 | 同 | 同 |
| 三〇 | 同 | 同 |
| 三一 | 同 | 同 |
| 三二 | 同 | 同 |
| 三三 | 同 | 同 |
| 三四 | 同 | 同 |
| 三五 | 同 | 同 |
| 三六 | 同 | 同 |
| 三七 | 同 | 同 |
| 三八 | 同 | 同 |
| 三九 | 同 | 同 |
| 四〇 | 同 | 同 |
| 四一 | 同 | 同 |
| 四二 | 同 | 同 |
| 四三 | 同 | 同 |
| 四四 | 同 | 同 |
| 四五 | 同 | 同 |
| 四六 | 同 | 同 |
| 四七 | 同 | 同 |
| 四八 | 同 | 同 |
| 四九 | 同 | 同 |
| 五〇 | 同 | 同 |
| 五一 | 同 | 同 |
| 五二 | 同 | 同 |
| 五三 | 同 | 同 |
| 五四 | 同 | 同 |
| 五五 | 同 | 同 |
| 五六 | 同 | 同 |
| 五七 | 同 | 同 |
| 五八 | 同 | 同 |
| 五九 | 同 | 同 |
| 六〇 | 同 | 同 |
| 六一 | 同 | 同 |
| 六二 | 同 | 同 |
| 六三 | 同 | 同 |
| 六四 | 同 | 同 |
| 六五 | 同 | 同 |
| 六六 | 同 | 同 |
| 六七 | 同 | 同 |
| 六八 | 同 | 同 |
| 六九 | 同 | 同 |
| 七〇 | 同 | 同 |
| 七一 | 同 | 同 |
| 七二 | 同 | 同 |
| 七三 | 同 | 同 |
| 七四 | 同 | 同 |
| 七五 | 同 | 同 |

神社名一覽

| | | | |
|----|---|------|----|
| 二二 | 同 | 戎 | 神社 |
| 二三 | 同 | 與治山 | 神社 |
| 二四 | 同 | 山 | 神社 |
| 二五 | 同 | 山 | 神社 |
| 二六 | 同 | 伊坐 | 神社 |
| 二七 | 同 | 大原 | 神社 |
| 二八 | 同 | 八坂 | 神社 |
| 二九 | 同 | 瀧 | 神社 |
| 三〇 | 同 | 天 | 神社 |
| 三一 | 同 | 嚴島 | 神社 |
| 三二 | 同 | 金刀比羅 | 神社 |
| 三三 | 同 | 蛭子 | 神社 |
| 三四 | 同 | 蛭子 | 神社 |
| 三五 | 同 | 出雲 | 神社 |
| 三六 | 同 | 八坂 | 神社 |
| 三七 | 同 | 石上 | 神社 |
| 三八 | 同 | 金刀比羅 | 神社 |
| 三九 | 同 | 松本 | 神社 |
| 四〇 | 同 | 荒 | 神社 |
| 四一 | 同 | 荒 | 神社 |
| 四二 | 同 | 荒 | 神社 |
| 四三 | 同 | 荒 | 神社 |
| 四四 | 同 | 荒 | 神社 |
| 四五 | 同 | 荒 | 神社 |
| 四六 | 同 | 荒 | 神社 |
| 四七 | 同 | 荒 | 神社 |
| 四八 | 同 | 荒 | 神社 |
| 四九 | 同 | 荒 | 神社 |
| 五〇 | 同 | 荒 | 神社 |
| 五一 | 同 | 荒 | 神社 |
| 五二 | 同 | 荒 | 神社 |
| 五三 | 同 | 荒 | 神社 |
| 五四 | 同 | 荒 | 神社 |

| | | | |
|----|---|---|----|
| 三三 | 同 | 荒 | 神社 |
| 三四 | 同 | 荒 | 神社 |
| 三五 | 同 | 荒 | 神社 |
| 三六 | 同 | 荒 | 神社 |
| 三七 | 同 | 荒 | 神社 |
| 三八 | 同 | 荒 | 神社 |
| 三九 | 同 | 荒 | 神社 |
| 四〇 | 同 | 荒 | 神社 |
| 四一 | 同 | 荒 | 神社 |
| 四二 | 同 | 荒 | 神社 |
| 四三 | 同 | 荒 | 神社 |
| 四四 | 同 | 荒 | 神社 |
| 四五 | 同 | 荒 | 神社 |
| 四六 | 同 | 荒 | 神社 |
| 四七 | 同 | 荒 | 神社 |
| 四八 | 同 | 荒 | 神社 |
| 四九 | 同 | 荒 | 神社 |
| 五〇 | 同 | 荒 | 神社 |
| 五一 | 同 | 荒 | 神社 |
| 五二 | 同 | 荒 | 神社 |
| 五三 | 同 | 荒 | 神社 |
| 五四 | 同 | 荒 | 神社 |

| | | | |
|----|---|---|----|
| 五五 | 同 | 荒 | 神社 |
| 五六 | 同 | 荒 | 神社 |
| 五七 | 同 | 荒 | 神社 |
| 五八 | 同 | 荒 | 神社 |
| 五九 | 同 | 荒 | 神社 |
| 六〇 | 同 | 荒 | 神社 |
| 六一 | 同 | 荒 | 神社 |
| 六二 | 同 | 荒 | 神社 |
| 六三 | 同 | 荒 | 神社 |
| 六四 | 同 | 荒 | 神社 |
| 六五 | 同 | 荒 | 神社 |
| 六六 | 同 | 荒 | 神社 |
| 六七 | 同 | 荒 | 神社 |
| 六八 | 同 | 荒 | 神社 |
| 六九 | 同 | 荒 | 神社 |
| 七〇 | 同 | 荒 | 神社 |
| 七一 | 同 | 荒 | 神社 |
| 七二 | 同 | 荒 | 神社 |
| 七三 | 同 | 荒 | 神社 |
| 七四 | 同 | 荒 | 神社 |
| 七五 | 同 | 荒 | 神社 |

| | | | | | | | | |
|-----|-----|--------|-----|------|--------|-----|-----|--------|
| 一五七 | 同 | 北宮八幡神社 | 三六九 | 同 | 宇間神社 | 八 | 同 | 稻荷神社 |
| 一五六 | 陶村 | 五社八幡神社 | 三六四 | 栗熊村 | 住吉神社 | 七 | 同 | 幸地神社 |
| 一五四 | 同 | 八幡神社 | 三五八 | 同 | 八幡神社 | 六 | 同 | 地比羅神社 |
| 一五三 | 昭和村 | 春日神社 | 三五五 | 富熊村 | 富原神社 | 五 | 同 | 菅原神社 |
| 一四三 | 同 | 宇佐八幡神社 | 三五二 | 法勤寺村 | 八幡神社 | 四 | 同 | 鳥洲神社 |
| 一二八 | 同 | 春日神社 | 三四八 | 同 | 坂元神社 | 三 | 同 | 鹽竈神社 |
| 一二三 | 山内村 | 日抱神社 | 三四五 | 同 | 下坂神社 | 二 | 坂出町 | 八幡神社 |
| 一〇六 | 同 | 萬燈神社 | 三四〇 | 同 | 龜山神社 | 五〇九 | 同 | 山熊神社 |
| 一〇二 | 同 | 八幡神社 | 三三五 | 同 | 三谷神社 | 四九二 | 同 | 落合神社 |
| 一〇一 | 同 | 天満神社 | 三三四 | 坂本村 | 吉岡神社 | 四七八 | 同 | 勝浦神社 |
| 九八 | 府中村 | 鼓岡神社 | 三二四 | 飯野村 | 春日神社 | 四五九 | 美合村 | 八幡神社 |
| 八六 | 同 | 西山神社 | 三〇九 | 川西村 | 猿養神社 | 四五七 | 造田村 | 梶州神社 |
| 八四 | 同 | 鴨尾神社 | 二六〇 | 粉所村 | 福宮神社 | 四二九 | 同 | 三島神社 |
| 八三 | 同 | 松尾神社 | 二三八 | 同 | 長柄神社 | 四一六 | 同 | 鳩峰八幡神社 |
| 八二 | 加茂村 | 鴨尾神社 | 二二七 | 山田村 | 松熊八幡神社 | 四一三 | 同 | 金山神社 |
| 七四 | 同 | 八銚神社 | 二一八 | 同 | 曲木神社 | 四〇七 | 同 | 大井神社 |
| 六五 | 王越村 | 喜佐波神社 | 一九九 | 西分村 | 椎尾八幡神社 | 四〇五 | 長炭村 | 八幡神社 |
| 五六 | 同 | 梅宮八幡神社 | 一八二 | 羽床村 | 松谷神社 | 三九〇 | 同 | 岡田神社 |
| 五五 | 同 | 青海神社 | 一七六 | 同 | 八坂神社 | 三八六 | 同 | 椎尾神社 |
| 五二 | 松山村 | 嚴島神社 | 一七五 | 瀧宮村 | 瀧宮神社 | 三八三 | 岡田村 | 八幡神社 |

| | | | | | | | | |
|-----|------|------|-----|------|--------|-----|------|--------|
| 二二五 | 同 | 神明神社 | 二四七 | 同 | 薄木神社 | 二七 | 宇多津町 | 宇多階神社 |
| 二二六 | 同 | 大津神社 | 二四八 | 同 | 船玉神社 | 九三 | 府中村 | 城山神社 |
| 二二七 | 同 | 貴船神社 | 二四九 | 同 | 瀧津神社 | 一七二 | 瀧宮村 | 天満神社 |
| 二二八 | 同 | 貴船神社 | 二五〇 | 同 | 山王神社 | 三一 | 飯野村 | 飯野神社 |
| 二二九 | 同 | 貴船神社 | 二五一 | 同 | 小槌神社 | 四三 | 林田村 | 總社 |
| 二三〇 | 同 | 貴船神社 | 二五二 | 同 | 鹽竈神社 | 五〇 | 松山村 | 神谷神社 |
| 二三一 | 同 | 貴船神社 | 二五三 | 同 | 瀧津神社 | 一〇九 | 端岡村 | 總社 |
| 二三二 | 同 | 貴船神社 | 二五五 | 雌雄島村 | 住吉神社 | 一一五 | 同 | 楠尾神社 |
| 二三三 | 同 | 貴船神社 | 二五六 | 同 | 豐玉依姫神社 | 一五二 | 同 | 八幡神社 |
| 二三四 | 同 | 貴船神社 | 二五七 | 同 | 荒多神社 | 一五五 | 昭和村 | 八幡神社 |
| 二三五 | 同 | 貴船神社 | 二五九 | 同 | 加茂神社 | 一七八 | 陶宮村 | 八幡神社 |
| 二三六 | 同 | 貴船神社 | 二六〇 | 同 | 住吉神社 | 二五八 | 同 | 御山八幡神社 |
| 二三七 | 同 | 貴船神社 | 二六二 | 直島村 | 貴船神社 | 二八二 | 川津村 | 川上神社 |
| 二三八 | 同 | 貴船神社 | 二六三 | 同 | 護王神社 | 二九六 | 同 | 春日神社 |
| 二四〇 | 下笠居村 | 貴船神社 | 二六四 | 同 | 稻荷神社 | 三〇二 | 土器村 | 八幡神社 |
| 二四一 | 同 | 貴船神社 | 二六五 | 同 | 天皇神社 | 三五〇 | 法勤寺村 | 八幡神社 |
| 二四二 | 同 | 貴船神社 | 二六六 | 同 | 住吉神社 | 三七一 | 岡田村 | 八幡神社 |
| 二四三 | 同 | 貴船神社 | 二六六 | 同 | 住吉神社 | 四三九 | 美合村 | 八幡神社 |
| 二四四 | 同 | 貴船神社 | 二六六 | 同 | 住吉神社 | 四五八 | 坂出町 | 八幡神社 |
| 二四六 | 同 | 貴船神社 | 二六六 | 同 | 住吉神社 | 四七 | 林田村 | 八幡神社 |

綾歌郡内神社

(以上上巻)

二三五 同
二三六 同
二四〇 同
二四一 同
二四二 同
二四三 同
二四四 同
二四五 同
二四六 同
二四七 同
二四八 同
二四九 同
二五〇 同
二五一 同
二五二 同
二五三 同
二五四 同
二五五 同
二五六 同
二五七 同

神社名一覽

王^ミ子^コ神^{カミ}社^ヤ 二五九 枋所村
鞍^カ掛^カ神^{カミ}社^ヤ 二六一 同
萩^{ハギ}神^{カミ}社^ヤ 二六二 同
光^{ミチ}道^{ミチ}神^{カミ}社^ヤ 二六三 同
山^{ヤマ}久^{キウ}神^{カミ}社^ヤ 二六四 同
山^{ヤマ}谷^ヤ神^{カミ}社^ヤ 二六五 同
黒^{クロ}山^{ヤマ}神^{カミ}社^ヤ 二六六 同
切^キ山^{ヤマ}神^{カミ}社^ヤ 二六七 同
地^チ神^{カミ}社^ヤ 二六八 同
住^ジ吉^{キチ}神^{カミ}社^ヤ 二六九 同
住^ジ吉^{キチ}神^{カミ}社^ヤ 二七〇 同
四^シ步^フ神^{カミ}社^ヤ 二七一 同
地^チ神^{カミ}社^ヤ 二七二 同
地^チ神^{カミ}社^ヤ 二七三 同
俊^{トシ}則^ノ神^{カミ}社^ヤ 二七四 同
日^ヒ吉^{キチ}神^{カミ}社^ヤ 二七五 同
正^{テイ}末^{マツ}神^{カミ}社^ヤ 二七六 同
栗^{クリ}原^{ハラ}神^{カミ}社^ヤ 二七七 同
耳^{ミミ}飛^{トビ}神^{カミ}社^ヤ 二七八 同
遠^{トホ}郷^{キョウ}神^{カミ}社^ヤ 二七九 同
山^{ヤマ}上^ノ神^{カミ}社^ヤ 二八〇 同

新^ニ名^ナ神^{カミ}社^ヤ 二八一 川津村
和^ワ田^タ神^{カミ}社^ヤ 二八三 同
相^{ソウ}津^{ジン}神^{カミ}社^ヤ 二八四 同
上^ウ王^{オウ}神^{カミ}社^ヤ 二八五 同
大^{ダイ}空^{クウ}神^{カミ}社^ヤ 二八六 同
貞^{テイ}重^{ジュウ}神^{カミ}社^ヤ 二八七 同
永^{エイ}富^フ神^{カミ}社^ヤ 二八八 同
川^{カハ}上^ノ神^{カミ}社^ヤ 二八九 同
竹^{タケ}本^ノ神^{カミ}社^ヤ 二九〇 同
本^{ホン}谷^ヤ神^{カミ}社^ヤ 二九一 同
白^{シロ}鬚^{シヅメ}神^{カミ}社^ヤ 二九二 同
小^コ野^ノ西^{セイ}神^{カミ}社^ヤ 二九三 同
小^コ野^ノ東^{トウ}神^{カミ}社^ヤ 二九四 同
北^{キタ}山^{ヤマ}神^{カミ}社^ヤ 二九五 同
西^{セイ}宮^{ミヤ}神^{カミ}社^ヤ 二九六 同
峰^{ミネ}内^ノ神^{カミ}社^ヤ 二九七 同
赤^{アカ}松^{マツ}神^{カミ}社^ヤ 二九八 同
相^{ソウ}口^{クチ}神^{カミ}社^ヤ 二九九 同
八^{ヤチ}幡^{フタ}神^{カミ}社^ヤ 三〇〇 同
赤^{アカ}羽^ハ神^{カミ}社^ヤ 三〇一 同
船^{フネ}頭^{カブ}神^{カミ}社^ヤ 三〇二 同
土器村

朽^ク木^キ神^{カミ}社^ヤ 二八二 同
金^{カネ}山^{ヤマ}神^{カミ}社^ヤ 二八三 同
天^{テン}皇^{ミコ}神^{カミ}社^ヤ 二八四 同
龍^{リウ}王^{オウ}神^{カミ}社^ヤ 二八五 同
東^{トウ}荒^{アラ}神^{カミ}社^ヤ 二八六 同
池^{イケ}ノ神^{カミ}社^ヤ 二八七 同
岡^{オカ}宮^{ミヤ}神^{カミ}社^ヤ 二八八 同
浦^{ウラ}神^{カミ}社^ヤ 二八九 同
大^{ダイ}荒^{アラ}神^{カミ}社^ヤ 二九〇 同
黒^{クロ}岩^{イハ}天^{テン}神^{カミ}社^ヤ 二九一 同
山^{ヤマ}王^{オウ}神^{カミ}社^ヤ 二九二 同
田^タ井^イ荒^{アラ}神^{カミ}社^ヤ 二九三 同
田^タ井^イ荒^{アラ}神^{カミ}社^ヤ 二九四 同
中^{ナカ}ノ荒^{アラ}神^{カミ}社^ヤ 二九五 同
菅^{スガ}原^{ハラ}神^{カミ}社^ヤ 二九六 同
馬^{ウマ}鉾^{ホウ}神^{カミ}社^ヤ 二九七 同
千^チ五^イ百^{ヒャク}神^{カミ}社^ヤ 二九八 同
荒^{アラ}魂^{マタ}神^{カミ}社^ヤ 二九九 同
拾^{シウ}二^ニ神^{カミ}社^ヤ 三〇〇 同
荒^{アラ}神^{カミ}社^ヤ 三〇一 同
荒^{アラ}神^{カミ}社^ヤ 三〇二 同

一六四 同
一六五 同
一六六 同
一六七 同
一六八 同
一六九 同
一七〇 同
一七一 同
一七三 瀧宮村
一七四 同
一七七 同
一七九 同
一八〇 同
一八一 同
一八三 羽床村
一八四 同
一八五 同
一八六 同
一八七 羽床上村
一八八 同
一八九 同

神社名一覽

月^{ツキ}見^ミ神^{カミ}社^ヤ 一九〇 同
國^{クニ}津^ツ神^{カミ}社^ヤ 一九一 同
赤^{アカ}天^{テン}神^{カミ}社^ヤ 一九二 同
東^{トウ}原^{ハラ}神^{カミ}社^ヤ 一九三 同
春^{ハル}日^ヒ神^{カミ}社^ヤ 一九四 同
荒^{アラ}神^{カミ}社^ヤ 一九五 同
三^{サン}吉^{キチ}神^{カミ}社^ヤ 一九六 同
讚^{サン}留^{リウ}神^{カミ}社^ヤ 一九七 同
三^{サン}穗^ホ神^{カミ}社^ヤ 一九八 同
孔^{クウ}聖^{セイ}神^{カミ}社^ヤ 一九九 同
池^{イケ}宮^{ミヤ}神^{カミ}社^ヤ 二〇〇 同
依^ヨ百^{ヒャク}神^{カミ}社^ヤ 二〇一 同
白^{シロ}石^{イシ}神^{カミ}社^ヤ 二〇二 同
松^{マツ}惠^ヱ神^{カミ}社^ヤ 二〇三 同
脇^{ワキ}神^{カミ}社^ヤ 二〇四 同
白^{シロ}梅^{ウメ}神^{カミ}社^ヤ 二〇五 同
奥^{オク}谷^ヤ神^{カミ}社^ヤ 二〇六 同
高^{タカ}見^ミ神^{カミ}社^ヤ 二〇七 同
物^{モノ}見^ミ神^{カミ}社^ヤ 二〇八 同
山^{ヤマ}神^{カミ}社^ヤ 二〇九 同
大^{ダイ}塚^{ツツ}神^{カミ}社^ヤ 二一〇 同
西^{セイ}分^{ブン}村

阿^ア佐^サ神^{カミ}社^ヤ 二二二 同
城^{シロ}山^{ヤマ}神^{カミ}社^ヤ 二二三 同
田^タ村^{ムラ}神^{カミ}社^ヤ 二二四 同
横^{ヨコ}關^{カン}神^{カミ}社^ヤ 二二五 同
八^{ヤチ}坂^{サカ}神^{カミ}社^ヤ 二二六 同
池^{イケ}谷^ヤ神^{カミ}社^ヤ 二二七 同
長^{チヤウ}谷^ヤ神^{カミ}社^ヤ 二二八 同
葛^{カク}卷^{マキ}神^{カミ}社^ヤ 二二九 同
兜^{カブト}神^{カミ}社^ヤ 二三〇 同
高^{タカ}鉾^{ホウ}神^{カミ}社^ヤ 二三一 同
大^{ダイ}相^{ソウ}神^{カミ}社^ヤ 二三二 同
浦^{ウラ}河^{カハ}神^{カミ}社^ヤ 二三三 同
吉^{キチ}森^{モリ}神^{カミ}社^ヤ 二三四 同
大^{ダイ}崩^{クラヒ}神^{カミ}社^ヤ 二三五 同
福^{フク}神^{カミ}社^ヤ 二三六 同
山^{ヤマ}神^{カミ}社^ヤ 二三七 同
宮^{ミヤ}神^{カミ}社^ヤ 二三八 同
常^{ジョウ}清^{セイ}神^{カミ}社^ヤ 二三九 同
平^{ヘイ}山^{ヤマ}神^{カミ}社^ヤ 二四〇 同
大^{ダイ}西^{セイ}神^{カミ}社^ヤ 二四一 同
山^{ヤマ}神^{カミ}社^ヤ 二四二 同

大^{ダイ}將^{シヤウ}軍^{クン}神^{カミ}社^ヤ 二二二 同
楠^{クヌ}神^{カミ}社^ヤ 二二三 同
岩^{イハ}角^{カク}神^{カミ}社^ヤ 二二四 同
松^{マツ}本^{ホン}神^{カミ}社^ヤ 二二五 同
高^{タカ}尾^ビ神^{カミ}社^ヤ 二二六 同
牟^ム禮^{レイ}神^{カミ}社^ヤ 二二七 同
栗^リ地^ヂ賀^カ原^{ハラ}神^{カミ}社^ヤ 二二八 同
炭^{タン}ケ^ケ内^{ノウ}神^{カミ}社^ヤ 二二九 同
藤^{フジ}川^{カハ}神^{カミ}社^ヤ 二三〇 同
上^ウ岡^{オカ}神^{カミ}社^ヤ 二三一 同
落^{ラク}合^{カヒ}神^{カミ}社^ヤ 二三二 同
平^{ヘイ}見^ミ神^{カミ}社^ヤ 二三三 同
猪^{イノ}尾^ビ神^{カミ}社^ヤ 二三四 同
杵^キ築^{キキ}神^{カミ}社^ヤ 二三五 同
天^{テン}滿^{マン}神^{カミ}社^ヤ 二三六 同
餅^{モチ}宮^{ミヤ}神^{カミ}社^ヤ 二三七 同
山^{ヤマ}王^{オウ}神^{カミ}社^ヤ 二三八 同
藤^{フジ}木^キ神^{カミ}社^ヤ 二三九 同
武^ブ内^{ノウ}神^{カミ}社^ヤ 二四〇 同
櫻^{オウ}本^{ホン}神^{カミ}社^ヤ 二四一 同
城^{シロ}山^{ヤマ}神^{カミ}社^ヤ 二四二 同

殿神、配祀神は合祀祭神の條に入れてない。合祀神社と被合祀神社と同一祭神の場合は之を記載しなかつた。明細帳では合祀になつてゐる神社で事實は合祀せられてゐるかどうかと思はれる神社、或は合祀又は移轉せられてはゐるが手續が残つてゐる神社もある様であるが今は觸れない事にした。

無格社で他の神社の境外攝末社となつてゐる神社が甚だ多いが、本書は明細帳を主體として編纂したので之を由緒の項に記載して置いた。

一 由緒中には史實と矛盾せるものを相當ふくんでゐるが甚だしきものゝ外は之を載せ、口碑、傳説をも加へてある。頁數の都合により割愛するの已むなきに至つたものも多數ある。

一 村社以上の神社で列格年次の記載してない神社は多く明細帳作製以前の列格である。

一 参考史籍は由緒の末尾に記載し、讚岐三代物語、讚岐國官社考證、讚岐生駒記、讚岐國名勝圖會、古讚岐名勝圖繪等は夫々讚岐の字を省略して掲げた。繁を厭ふ爲めである。

一 例祭日を二日以上に亘つて記載したのは資料に依るもので、概ね二日間のもの翌日、三日間の中の日を以て正祭としてゐる。但し少數の例外はある。無格社の祭日には年二回或は三回に亘つて執行され何れを例祭と定め難いものが多い。

一 特殊神事は祭祀令による以外の神事でも一般的に行はれてゐるものは省略した。又一地方に於て行はれる神事はその市郡の概説に之を記載してある。

一 無格社の祭日以下の記載方は頁數の都合によるもので決して他意あるものでない。

一 寶物は縣廳備付の寶物臺帳により、國寶及び之に準すべきものは稍々詳しく、其の他は品名點數に止めた。寶物臺帳に登載せられてゐない什寶類で由緒と密接な關係を有するものは由緒の項に述べてある。

一 氏子の外に崇敬者を有する神社は多數に及ぶが崇敬者數は省略した。無格社にして往古より氏子を有する神社も相當あるが今は明細帳に従つてある。

一 明細帳は公簿なるを以て力めて之を尊重し、社號、祭神、境内坪數、合祀關係等皆明細帳に従つてある。

一 本誌の記事中に誤謬杜撰の點があれば他日之を更正したい。幸に大方の指教を俟つ。

香川縣神社誌上卷目次

神社名一覽……………卷頭

第一編 概 說

第一章 國號と國魂神……………一

第二章 地勢と神社……………二

第三章 歴史、傳説と神社……………三

○素盞鳴尊○手置帆負命○大國主命○豊玉姬命と鸕鷀草葺不合尊○速秋津姫神○阿波忌部氏○倭迹々日百襲姬命
○日本武尊○神櫛王、武彥王と讚留靈王○酒部黑鷹○大伴武日、吉備武彦○讚岐海部と宗像神○神功皇后○應神
天皇○武内宿禰○和田姬命○中臣宮處氏靜子臣○鷲住王○佛教の興隆○菅原道真○延喜式内社と國史所載社○一
宮、二宮、三宮、總社○天慶の亂○崇徳天皇○讚岐の藤原氏○莊園○屋島の役○護良親王、宗良親王○南北朝○
細川氏被官○長曾我部氏の侵略○讚岐豪族の滅亡○生駒氏○青山大藏大輔、一柳丹後守、松平美作守、加藤出羽
守○山崎氏○松平氏○京極氏○神佛分離と社號改稱○社領上地○社格制定○神饌幣帛料供進指定○神社の合併

第四章 慣習、風俗と神社……………一八

第二編 神 社……………二七

第一章 高 松 市……………二六

第一節 高松市概説……………二六

目次

第二章

高松市内神社

第二章

丸龜市

第一節

丸龜市概説

第二節

丸龜市内神社

第三章

大川郡

第一節

大川郡概説

第二節

大川郡内神社

一、引

田町

二、白

鳥本町

三、三

本松町

四、長

尾町

五、志

度町

六、津

田町

七、相

生村

八、小

海村

九、福

榮村

一〇、白

鳥村

一一、譽

水村

第四章

木田郡

第一節

木田郡概説

第二節

木田郡内神社

一、平

井町

二、川

島町

三、屋

島町

第六章 香川郡

目次

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------------|
| 一六、豊島村 | 一五、四海村 | 一四、北浦村 | 一三、大部村 | 一二、福田村 | 一一、坂手村 | 一〇、苗羽村 | 九、安田村 | 八、西三村 | 七、三都村 | 六、二生村 | 五、大鐸村 | 四、淵崎村 | 三、池田町 | 二、草壁町 | 一、土庄町 | 第二節 小豆郡内神社 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 三三〇 | 三二九 | 三二八 | 三二七 | 三二六 | 三二五 | 三二四 | 三二三 | 三二二 | 三二一 | 三二〇 | 三一九 | 三一八 | 三一七 | 三一六 | 三一五 | 二九一 |

第五章 小豆郡

第一節 小豆郡概説

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|---------|--------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|
| 一九、西植田村 | 一八、東植田村 | 一七、十河村 | 一六、三谷村 | 一五、林谷村 | 一四、木太村 | 一三、川添村 | 一二、前田村 | 一一、古高松村 | 一〇、庵治村 | 九、牟禮村 | 八、井戸村 | 七、下高岡村 | 六、氷上村 | 五、田中村 | 四、奥鹿村 |
| | | | | | | | | | | | | | | | |
| 二六九 | 二六八 | 二六三 | 二六二 | 二六一 | 二六〇 | 二五九 | 二五八 | 二五七 | 二五六 | 二五五 | 二五四 | 二五三 | 二五二 | 二五一 | 二四〇 |

目次

| | | | | |
|-----|---|----|---|----|
| 一七、 | 檀 | 紙 | 村 | 四四 |
| 一八、 | 弦 | 打 | 村 | 四八 |
| 一九、 | 上 | 筮居 | 村 | 四四 |
| 二〇、 | 下 | 筮居 | 村 | 四九 |
| 二一、 | 雌 | 雄 | 村 | 四五 |
| 二二、 | 直 | 島 | 村 | 四六 |

| | | |
|-----|--------|-----|
| 第一節 | 香川郡概說 | 三四〇 |
| 第二節 | 香川郡内神社 | 三四二 |
| 一、 | 佛生山町 | 三四二 |
| 二、 | 香西町 | 三四六 |
| 三、 | 太田村 | 三五二 |
| 四、 | 鷺田村 | 三五七 |
| 五、 | 一宮村 | 三五三 |
| 六、 | 多肥村 | 三五八 |
| 七、 | 大野村 | 三六一 |
| 八、 | 淺野村 | 三六六 |
| 九、 | 川東村 | 三六〇 |
| 一〇、 | 安原村 | 三六五 |
| 一一、 | 鹽江村 | 三九二 |
| 一二、 | 安原上西村 | 三九七 |
| 一三、 | 池西村 | 三九九 |
| 一四、 | 由佐村 | 四〇一 |
| 一五、 | 川岡村 | 四〇六 |
| 一六、 | 圓座村 | 四〇九 |



編

概

說



第一章 國號と國魂神

讃岐の國號は早く古事記の諸冉二神國土を生みませる條に見えてゐる。讃岐と稱する所以に付ては素より異説が多いがその主なるものを擧げてみると、手置帆負命（讃岐忌部の祖神）の子孫當國に住し矛竿を造る事を業とし、毎年朝廷へ矛竿を献納せしより起る名にて竿調さやぢの國の約つひまれるものとする説、讃岐は其の地東西に長く南北狭きより狹貫さやと云ふとする説、阿波國の粟、吉備國の黍、小豆島の小豆と同じく穀物に關する名前でさぬきは眞麥であるとする説等である。西讃府

志は、島沼凝の約めにて（志末の約左、古利の約岐）瀬戸内海の鹽飽島は潮泡凝の約、同島内の佐柳島は讃岐と同義語ならむと云つてゐる。國魂神は古事記に『讃岐國謂飯依比古』とあつて現今綾歌郡縣社飯神社に祀られ、同社は延喜式内神社である。小豆郡は古くは讃岐國に屬してゐなかつた。その國魂神は古事記に『大野手比賣』とあつて、此の神を祀る神社は星が峰に阿豆伎神社があるが明細帳に脱漏してゐるのは遺憾である。

第二章 地勢と神社

讃岐は東西に長く南北に狭く、南は阿讃山脈を負ひ北は瀬戸内海に面してゐるので雨量少く、河川は多く北流して短かくしかも急流である。たまたま大水あるも概ね一日の中に流れ盡して河川は何時も乾涸してゐる。従つて往古より稍々もすれば旱害を蒙り國民は困窮した。當國に著しく灌漑用溜池

の多いのもこの故で、就中仲多度郡滿濃池は著名である。これらの故を以てか水に關する神々を祭つた神社が頗る多い。六國史の中に散見する讃岐の饑饉は、文武天皇元年・大寶元年・慶雲元年・同三年・和銅六年・天平十九年・天平寶字四年・同八年等で、江戸時代の旱魃にても、寛永三年・同二十

年・承應三年・寛文八年・元祿十二年・寶永三年・享保六年・同十年・延享四年・寛延元年・明和三年・天明五年・寛政二年・文化三年等頻々と旱害に悩まされてゐる。かういふ次第で水に關する神社は非常に多いが、中でも大川郡縣社水主神社・木田郡川島町村社清水神社・香川郡安原村童洞神社・綾歌郡縣社城山神社・美合村郷社大川神社・村社勝浦神社・栗熊村村社宇間神社・仲多度郡神野村郷社大井八幡神

社・村社神野神社・象郷村村社石井神社・垂水村村社垂水神社・七箇村尾瀬神社・三豊郡財田村溪道神社・莊内村三崎神社等有名である。南部は多く山岳地帯である爲に山神は一部落毎に奉齋せられてゐる有様で、其の數は夥しいものであるが概ね小社である。海邊には住吉神社・惠比須神社・鹽竈神社が奉齋せられ、地神社も亦至る所に祀られてゐる。

第三章 歴史、傳説と神社

素盞鳴尊

小豆郡には素盞鳴尊の御來航を傳へ、同地の牧畜業は尊にその端を發すると云ふ。四海村八坂神社は尊を祀り、同村冠者神社は尊御來航の時の篙師を祀つたものと云ひ、現祭神は手名椎・足名椎の二神である。八坂神社は初め尊の御登攀あらせられしといふ大丸の地に鎮座ありしも延暦三年勅命によつて官牛を長嶋に移し、官牛放牧の遺趾へ遷座したものであると云ふ。

手置帆負命

手置帆負命は讃岐忌部の祖神である。神代の頃その子孫當國に來住し矛竿を造つて朝廷に奉つた。今この神を祀る神社に三豊郡笠田村村社忌部神社・村社宇賀神社がある。大川郡引田町郷社譽田神社は忌部宿禰正國の創祀で、正國は舊大内郡の戸主であつた。同郡長尾町多和神社（延喜式内社といふ）も此の命を奉齋してゐる。

大國主命

大國主命は仲多度郡琴平の地を本據とせられ、中國・四國・九州等を御經營あらせられたことを國幣中社金刀比羅宮が傳へ、同社は大物主神の御名を以て奉齋してゐる。

豊玉姫命と鷓鴣草葺不合尊

小豆郡豊島村及び木田郡屋島町に鷓鴣草葺不合尊御降誕のことを傳へ、豊島村には豊玉神社があるがこれは非公認神社である。木田郡屋島町鷓鴣草葺不合尊を祀り、之に關聯して井戸村郷社和爾賀波神社・下高岡村郷社鰐河神社に豊玉姫命が鰐魚に化して流を遡り鎮座せられた事を傳へてゐる。右の二社の内何れかは延喜式内神社である。又香川郡直島村の村社豊玉姫神社・豊玉依姫神社等この事を傳へてゐる。

速秋津姫神

大川郡志度町郷社多和神社の延長舊記には速秋津姫神の御來航を載せてある。

日本武尊

日本武尊伊勢國能褒野に薨じ給ひ、御神靈飛んで河内國舊市邑に到り更に飛んで天に上り給ふと傳へられてゐる。讃岐では白鶴に化し舊市邑より飛んで讃岐國三里松原に止ると傳へ、大川郡縣社白鳥神社はこの尊を奉齋してゐる。鶴羽村鶴羽神社は白鶴の羽を休めし所と云ふ。當國ではこの事の故を以て往昔より鶴を神鳥となし國禁として之が捕獲を禁じ明治維新に及んだ。尙弟橋姫は讃岐の人穂積氏忍山宿禰の女で、仲多度郡縣社大麻神社の祠官となりし穂積忍山彦根の妹と傳へてゐる。

神櫛王、武彀王と讚留靈公

神櫛王は景行天皇の皇子で讚岐國造の祖であり、武彀王は日本武尊の王子で讚岐綾君の祖であることは古事記、日本書紀に載せられてゐる。讚岐特有の傳説に讚留靈王といふのがあり、景行天皇二十三年南海の悪魚を征し留つて讚岐國を守り給ふたことを讚留靈記、讚留靈公胤記が傳へてゐる。而してこの讚留靈王は頗る異論の多いもので、或は大碓命、或は

阿波忌部氏

阿波忌部氏は讚岐忌部氏と協力して讚岐を開拓した。この開拓は西讃より東讃に及んだものと云はれてゐる。これに關する神社に三豊郡縣社粟井神社があり延喜式内名神大社である。同社の境内神社飛羅伎神社・與禮神社も亦有名である。仲多度郡縣社大麻神社も同様で延喜式内社である。三豊郡麻村社麻部神社は大麻神社に隣り忌部氏關係の神社である。中讃に於ける忌部氏の遺蹟の多く傳はらないのは、其後地方占據の勢力に消長があつた爲であらうか。

倭迹々日百襲姫命

孝靈天皇の皇女倭迹々日百襲姫命の當國に來られた事は國史の記すものはないが、大川郡縣社水主神社・香川郡國幣中社田村神社が之を傳へ、兩社共延喜式内神社で田村神社は明神大社である。尙香川郡佛生山町村社百相神社も命の御來遊を傳へてゐる。大川郡地方には百襲姫命の舊蹟と稱するものが多數残されてゐる。

日本武尊、或は神櫛王、或は武彀王とせられてゐる。讚岐の神社は神櫛王、讚留靈王、武彀王とは頗る密接な關係を有してゐるのである。神櫛王を祀る神社は綾歌郡縣社城山神社・仲多度郡象郷村郷社榊神社等最も著名で、何れも延喜式内神社で城山神社は名神大社である。そして何れも悪魚征討を以て神櫛王としてゐる。その他仲多度郡内の縣社大麻神社・與北村社皇美屋社・象郷村社大歳神社・高篠村社富隈神社の社傳も悪魚征討を神櫛王としてゐる。又これを武彀王とするものには綾歌郡陶村郷社八幡宮・富熊村社八幡神社・岡田村社岡田神社等がある。讚留靈王については當國史家の古くより論争する所で容易に決し難い問題である。神櫛王の陵墓は城山と櫛梨と木田郡牟禮の王墓と三説あり、讚留靈王の陵墓は綾歌郡法勤寺村にあつて讚留靈王神社がある。又同郡陶村の猿王の地も靈王の陵墓と稱されてゐる。而して神櫛王の孫須賣保禮命は讚岐國造に任ぜられ、その子孫は多く東讃に繁殖した。寒川・三木・山田三郡の戸主であつた讚岐氏は王の子孫で、後の寒川・高松・植田・三木・十河・三谷・神内・山田・由良の諸氏は皆其の後裔と云ふ。綾氏は多く西讃に發展し綾大領貞宣、三野大領綾高隼等があり三野氏、詫間氏等その後裔と云ふ、貞宣の子孫は後の讚岐藤氏である。

尙讚留靈王並に綾氏關係の神社には、綾歌郡栗熊村社宇閑神社(延喜式内と云ふ)・宇多津町縣社宇夫階神社(國史現在社)・坂出町横潮神社・三豊郡縣社大水上神社(延喜式内社)・莊内村三崎神社等著名である。

酒部 黒麿

神櫛王、武彥王に關聯して又異説のあるものに酒部黒麿がある。綾歌郡栗熊村社宇閑神社の傳によると、武彥王四世の孫綾眞玉の子益甲黒丸なるものを酒を醸して允恭天皇に奉り姓酒部を賜ふ云々とあり、同郡造田村郷社天川神社の舊記には、讚岐國造の始祖神櫛王の遠裔益甲黒麿那珂郡神野郷に住しその女よく酒を醸す、之を孝謙天皇に奉りて姓酒部を賜ふ云々とありて、神野郷即ち後の眞野郷の矢原氏家記に、神櫛王三十五世の孫酒部黒麿とあるのに一致する。この天川神社舊記、矢原家記等は讚岐國官社考證にも引用せられてゐる。因に天川神社は國史現在社である。

大伴武日、吉備武彦

仲多度郡與北村村社皇美屋社は神櫛王に隨從して來た大伴

神功皇后

神功皇后三韓御征討の御歸途當國に御上陸あらせられたといふ傳説が仲多度郡白方村郷社熊手八幡神社・多度津町榜立八幡神社・四箇村宿地神社・與島村村社八幡神社に傳へられてゐる。小豆郡の蕪崎・見目・屋形崎等の地名も亦皇后の御寄島によるものと四海村村社八幡神社の由緒に傳へられてゐる。

應神天皇

天皇御即位の二十二年淡路島より吉備國に幸し給ひ更に小豆島に御遊幸遊ばされた。小豆島五社八幡宮はこの故を以て天皇の御遺蹟に奉齋せられたものである。香川郡直島村には天皇御即位の二年直島に御來島の事を傳へてゐる。

武内宿禰

武内宿禰は讚岐に最も深い關係を有する。讚岐通史によると、宿禰の子孫の本縣に繁榮したものを三豊郡に木臣(紀氏)・

武日を祀ると傳へてゐる。三代實錄に『貞觀三年十一月十一日 書博士正六位下佐伯直豐雄欸云 先祖大伴健日連公景行天皇御世隨倭武命平定東國功勳蓋世賜讚岐國以爲私宅』とあつてその子孫倭故連は允恭天皇の時國造に任ぜられた。その後裔佐伯氏からは有名な弘法大師が出てゐる。大伴氏が讚岐へ來たのは日本武尊が東夷を征せられ捕虜を讚岐に置いた(三豊郡五郷村海老濟と云ふ)長官として來たものであるとも云ふ。その子孫は西讚に繁榮した。

吉備武彦も亦神櫛王の惡魚征討に従屬の將と云ひ、仲多度郡高篠村村社富隈神社に祀られてゐる。

讚岐海部と宗像神

讚岐海部(鹽飽海賊)は甚だ古くより瀬戸内海の諸島に蟠居し海上交通に重大な役割を演じてゐる。古くは神武天皇の御東征、神功皇后の三韓御征伐、天慶の亂、源平二氏の争戰より、南北朝の對立、八幡船、豊臣秀吉の朝鮮征伐、西南戰役にまで活躍した。この海部は宗像神を中心としてゐたもので當國多數の宗像神はこの海部と關係あるものと云はれてゐる。

坂本臣、綾歌郡に都奴臣・坂本臣・蘇我臣、香川郡に川邊臣、木田郡に坂本臣・布師臣・林臣、大川郡に木臣・坂本臣が擧げられてゐる。木臣から出た刈田氏に平安朝の中頃刈田種繼及びその子安雄・氏雄・今雄がある。三豊郡粟井村にはその古跡があり、同村なる刈田神(縣社粟井神社境内にあり)は同氏との關係深い神社で舊豊田郡は古く刈田郡と云ひこの神の神領であつたと云ふ。同郡大野原村の應神社は縣下最大の古墳たる椀貸塚の上に鎮座あり、延喜式内於神社はこの社であるとも傳へてゐる。

坂本臣からは岡田氏が出てゐる。大川郡志度町岡田神社は同氏關係の神社であらう。讚岐の郷名にはこの氏族の名と同一のものが各郡にある。

和田姫命

景行天皇の皇女和田姫命、神櫛王と共に當國に下り三豊郡の姫郷に住し、紀伊村村社千尋神社は命の創建と傳へ、同社に合祀せられた木下大明神は命を祀つてあると傳へてゐる。

中臣宮處氏靜子臣

中臣宮處氏は山田（木田郡前田村）の縣主で應神天皇の朝より數代此の處に住し、前田村は古く宮處郷と云ひ倭名鈔にも宮處郷とある。同村郷社八幡神社は靜子臣の創建と傳へられる。

鷲住王

履中天皇の御世御世御世別王の御子鷲住王は天皇の召に應ぜず攝津住吉より阿波に來り更に當國綾歌郡富熊村に來られた。鷲住王の妹太姫郎女・高鶴郎女は天皇の嬪であつたが、天皇に乞ひて鷲住王を讃岐國造とせられたと傳へてゐる。高木氏は王の裔孫で強力の人を出してゐる。今坂本村社坂元神社は王を祀り、同村一王子神社は王の御子秋津根王を祀つてゐる。

佛教の興隆

平安朝に入つてから佛教の興隆目ざましく、中にも仲多度

てあり、孔子像は縣社天滿神社の寶物となつてゐる。

延喜式内社と國史所載社

當國の延喜式内社は二十四社で大社三社、小社二十一社である。その分布は〔大川郡六社〕水主神社・布勢神社・多和神社・志太張神社・神前神社・大養彦神社。〔木田郡一社〕和爾賀波神社。〔香川郡一社〕田村神社。〔綾歌郡五社〕城山神社・鴨神社・神谷神社・飯神社・宇閉神社。〔仲多度郡四社〕櫛無神社・神野神社・大麻神社・雲氣神社。〔三豊郡七社〕粟井神社・高屋神社・山田神社・於神社・黒嶋神社・加摩良神社・大水上神社で、粟井・田村・城山の三社は名神大で他は小社である。國史所載社では三代實錄に梶州神・天川神・宇夫志奈神・賀富良津神・高家神・大水神・松井神・船山神・萬濃神。日本紀略に氏太神（氏大神）・刈田神・連岳神・國榮神・飯天神。符宣抄に天津高結槻本地祇が見えてゐる。之等の神社はその當時の有力なる部族によつて奉齋せられたものであるが、今その部族は明かでないものが多い。式内社も現今何れの神社なりや異説多く、國史所載社は數社を除く外は全く不明の状態であるが、それらしいといはれて

郡には弘法大師につゞいて高僧が輩出し、盛に寺院を建立した。さうして神社に別當寺を置き、神社の祭典其の他は追々社僧、別當の手に移つて行つた。この時代に移轉遷座等の行はれた神社も相當數に上る様である。

菅原道眞

讃岐の國司の中最も神社に密接な關係を有する者は菅原道眞公である。公は前後五箇年在任しその仁政は普く國內をうるほした。最も有名なのは城山神社の雨乞で今尚瀧宮跡が残されてゐる。綾歌郡縣社天滿神社はその官舎跡に創祀せられたもので、高松市郷社中野天滿神社・村社華下天滿神社・丸龜市村社會下天滿神社・大川郡小田村天滿神社・木田郡牟禮村社松井神社・香川郡圓座村社天滿神社・綾歌郡府中村社天滿神社・加茂村菅原神社・瀧宮村松惠社・川津村黒岩天滿神社・仲多度郡南村社天滿神社・三豊郡一谷村社天神社・財田大野村社天滿神社・常磐村菅原神社等は何れも公の遺趾に建てられ若しくは遺品を以て奉齋したものと傳へられてゐる。其の他公を祀れる神社は本縣に甚だ多い。又綾歌郡瀧宮村の孔聖神社は公が釋典を行はれた所で孔子を祀つ

るる神社については各郡概説に略述して置いた。

一宮、二宮、三宮、總社

平安朝の中頃京都に於て神社に等級を附けたのが地方に及び一宮、二宮、三宮等の稱が起り中には九宮にまで及んだ。一宮は其の國の代表社として尊崇せられたものである。讃岐にあつては一宮は國幣中社田村神社、二宮は三豊郡二宮村縣社大水上神社、三宮は大川郡志度町郷社多和神社となつてゐる。

總社は一宮と共に地方神社の中樞であつたが、一宮の如く國內の最も尊貴なる神社と云ふ譯ではなく、國司の便宜により國司廳に近き神社を選んで國內諸神を其處に勸請したものである。平安朝の制、國司は國內の諸神を巡拜し班幣するの儀があつたが、歴拜の繁を省く爲め總社の制が出来たもので、綾歌郡林田村郷社總社神社が之である。尚林田村には村社總倉神社があるが、これは當國の貢物を官倉に貯置したその官倉の守護神である。

天慶の亂

天慶二年平將門の叛くや藤原純友は伊豫より之に呼應した。これより前承平二年備前の海賊が蜂起し、承平五年朝廷に於かせられては石清水外十二社に海賊平定の祈願をせられ、大川郡水主神社は之に預りて天慶三年正五位下を授けられてゐる。承平六年純友は伊豫日振島に據つて官物私財を劫略し、一旦降伏したのであるが、將門の叛くと共に又叛したのである。純友討伐の爲め來國した近江の人藤田四郎入道宗遍は三豊郡大見村に留り郷社日枝神社を創建したと傳へてゐる。同郡和田村社神田神社は怨靈を鎮める爲め一時平將門を祀つてゐたと云ひ、莊内村三崎神社は純友の弟權介純之及び純友討伐に西下した小野好古等祈願をなし武具を奉納した事を傳へてゐる。上高瀬村村産巢日神社は將門の子將軍太郎良門この地に來住し下總の妙見神を迎へたと云ひ、良門と共に來住したものを音田の六人衆と云つてゐる。同社の境内には將門の怨靈鎮撫の神社があるといふ。

崇徳天皇

保元の亂後崇徳天皇は讃岐國に御遷幸ありて御陵は綾歌郡

松山村白峰に現存してゐる。天皇の御遷幸には、先づ香川郡直島村に遷られ次に綾歌郡松山に遷られ給ふた説と、松山より直島に遷り、更に府中村鼓岡に遷られ給ふた説とある。天皇に御關係の神社は國幣中社金刀比羅宮・綾歌郡坂出町縣社白峰宮(野澤井宮と云ふ)・松山村村社高家神社(血の宮と云ふ)・同村村社青海神社(煙の宮と云ふ)・府中村村社鼓岡神社(木丸殿と云ふ)・香川郡直島村天皇神社等その主なるものである。

讃岐の藤原氏

中御門中納言藤原家成が讃岐守に任ぜられたのは保安元年と云ふ。これ讃岐藤原氏の鼻祖である。家成は綾大領貞宣の女を入れ藤太夫章隆を生んだ。これより綾氏(武毅王の後裔)と藤原氏とは混同せられた形となつてゐる。章隆の子孫は分れて福家・香西・羽床・新庄・本庄の諸氏となつた。當國に春日神社が多く、その多くが大社であるのは藤原一族の勢力の強大であつたことを想はせるのである。香西資光は屋島の役源氏に與し西讃七郡を領し、香西左近將監資村は承久の亂北條氏に黨し阿野・香川二郡に封ぜられたと云ふ。香西町郷

社宇佐神社は資村の創建で、この地方には香西氏關係の神社が多い。

莊園

莊園は大化改新の頃より漸次發達し奈良朝に至つて急に増加した。宇多天皇の御宇小豆郡は敦實親王の領有となり、延長四年小豆島五社八幡宮の創建には敦實親王が専ら力を致されたのである。同郡肥土庄は石清水八幡宮の神領であつた。

諸書に見えたる當國の社領關係を上げると

皇大神宮領 笠居御厨(香川郡)
祇園 領 林田内潮入新開(綾歌郡)・萱原(綾歌郡)・大野(三豊郡)

春日 領 川津莊(綾歌郡)

日吉 領 買田(仲多度郡)・杵田莊(三豊郡)

石清水領 肥土庄(小豆郡)・本山莊(三豊郡又は木田郡)・草木庄(三豊郡)・山本庄(三豊郡又は綾歌郡)

○賀茂 領 津多島御厨(三豊郡)

がある。生駒家分限帳によると二百五十石伊勢領、百二十石

屋島の役

元暦二年(壽永四年)源義経は屋島に據れる平家を攻め、平氏は此所に敗れ終に長門壇浦で滅亡した。この役に讃岐は源氏に應じたのである。この戦に關する神社には木田郡屋島町壇浦神社があつて安徳天皇を奉齋し、仲多度郡本島村村社徳玉神社も亦天皇を奉齋してゐる。三豊郡縣社大水上神社には源平二氏の願狀があり異論の多いものであるが又しかく有名である。又同社には平家奉納の武器等を寶物として藏し、境内には平家四將を祀つた神社もある。

この外香川郡安原村村社平尾神社、三豊郡觀音寺町縣社琴

彈神社にも屋島合戦のことを傳へ、三豊郡五郷村有木の村社三部神社には平有盛奉納の太刀があり、靈異ありしことを生駒記が載せてゐる。

この役によつて源氏の勢力は國內に充滿し、當國に八幡神社の頗る多いのは貞觀以後八幡神崇敬の行はれた關係によること勿論であるが、之等源氏の勢力が蔓延したのも深い關係を有するといはれてゐる。

護良親王、宗良親王

元弘の變に際し大塔宮護良親王は紀伊熊野より遁れて大川郡に潜行せられ與田山の地に入られ、里人佐伯季國之を奉じて虎丸城に據つたことを福榮村社與田神社が傳へ、佐伯季國は同村所主神社に祭られてをり、此の附近は親王に隨從の臣を祀つたと云ふ神社が數社ある。

護良親王の御弟宗良親王は當國に御配流となり三豊郡詫間村に着かせられ、同村郷社浪打八幡神社の社僧がつれづれの御相手をしたと傳へられ、更に同郡勝間村に御移りあり兩村及び比地二村にその御遺蹟が残つてゐる。親王は後綾歌郡松山に遷らせられた。

南 北 朝

足利尊氏が叛くに及んで讃岐では細川定禪が之に應じ、守護船木頼重を破つて勢強大となり京都に攻入つた。尊氏西走の後延元元年東上するや定禪又之に加はつた。此の時讃岐の吉野朝方には綾歌郡長尾城に中院源少將があり、同郡の羽床氏、木田郡の十河氏・三木氏・三谷氏、小豆郡の佐々木氏等があり、脇屋義助の伊豫に來るに及んで漸く強大となつたが、義助間もなく病歿して又振はず、終に細川頼春の統一する所となつた。脇屋義助の臣安藤村重及びその弟村久は三豊郡に來り、兄村重は比地二村村社春日神社を、弟村久は上高瀬村郷社新田神社を創建した。又大川郡丹生東山の地には脇屋義治、篠塚伊賀守の來住したことを傳へてゐる。

細川清氏が吉野朝に歸した時前記讃岐の吉野朝方の諸氏之に應じ、其の勢強大となつたのであるが、貞治元年清氏は白峰に頼之と戦うて敗死し、當國は悉く頼之の平定する所となつた。頼之は香川郡由佐村に居城岡館を營み四國を平定した。讃岐國の史書が多く北朝の元號を用ゐてゐるのはこれが爲めで、頼之・頼元・滿元・持之・勝元・政元等永く當國に勢威を振つたのである。政元子なく、澄之・高國・澄元の三子を

養ひしより細川氏は内訌を生じ三好氏が勢力を振ふに至つた。

細川頼之は人物識見共に卓越せる人で又敬神の念厚く、當國の神社で頼之の崇敬をうけたものは頗る多い。今頼之に關係の神社を擧げると國幣中社田村神社・高松市縣社石清水八幡神社・香川郡縣社冠纓神社・大野村社石清水八幡神社・木田郡西植田村郷社藤尾八幡神社・綾歌郡林田村郷社總社神社・土器村郷社田潮八幡神社・三豊郡仁尾町郷社賀茂神社等で其の他尙多數に及んでゐる。殊に香川郡にはその居城岡館があつたので頼之崇敬の神社が多く、岡館の四方權現、八方荒神等有名であるが今その神社が判明しないものが多い。

細川氏被官

安富氏・香西氏・奈良氏・香川氏の四氏は細川四天王と稱され當國を分領した。當時に於ける各郡の領主を擧げると
寒川氏||大内郡・寒川郡・小豆郡
安富氏||三木郡・寒川郡
三木氏||三木郡
植田氏・三谷氏・神内氏・十河氏||山田郡

歴史、傳説と神社

香西氏||香川郡・阿野郡
藤原氏・橋氏・奈良氏||鶴足郡・那珂郡
香川氏・詫間氏||多度郡・三野郡・豊田郡
長尾氏||豊田郡・三野郡・多度郡・那珂郡・鶴足郡・阿野郡

右の外香川郡に由佐氏、阿野郡に羽床氏等がゐる。以上は大體細川頼之の頃より天正年間に至る約二百年間の消長で今之を詳にし得ない。應仁の亂後細川氏の内訌起るに及んで阿波の三好氏は十河氏と結んで盛に當國に侵入したのである。讃岐通史によると應仁の亂頃の讃岐の分治の表に

寒川氏領||小豆郡・大内郡・寒川郡
直||三木郡
安富氏領
植田氏領||山田郡
香西氏領||香東郡・香西郡・綾北條郡・綾南條郡
香川氏領
奈良氏領||鶴足郡・那珂郡
直||多度郡・三野郡・豊田郡

とあつて、安富・香川二氏が最も強大であつたことを示してゐる。

以上の諸氏は夫々その領内の神社と密接な關係があるので列擧して置く。

長曾我部氏の侵略

細川氏の衰ふるに及んで阿波の三好氏は屢々讃岐を侵略して當國の諸將と兵を交へたが、當時當國の諸將或は大内氏に服し、或は織田氏を頼み、又互に交戦して遂に長曾我部元親の侵略を蒙つた。永祿・元龜・天正の間、當國は實に戰亂の巷と化したのである。長曾我部元親は天正六年西讃に攻め入つたのを初めとし數度出陣して當國を蠶食し、天正十一年に至つて遂に全讃を平定するに至つた。當國の社寺は多くこの時の兵火に罹り、社殿舊記什寶を焼失したと云つてゐる。元親の戰略は威嚇と和睦にあつたらしく、放火は威嚇には相當効果のあつたものと思はれる。威嚇して和睦し、本領安堵の上それを驅つて先手として侵略をつゞけたのであらう。徳島縣下に於ても同様であると聞くが、里民が産土神社を八幡神社であると云へば焼かなかつたとの事を當國でも云つてゐる。しかし八幡神社で兵火にかつたものもある。

讃岐豪族の滅亡

永祿・元龜・天正の間當國の豪族は殆んど滅亡した。天正

や分明でないものも數社ある。

青山大藏大輔、一柳丹後守、 松平美作守、加藤出羽守

生駒家没落の寛永十七年青山大藏大輔幸成は城受取の爲め當國に來り國中を巡歴して同十八年十月まで國政を司り、一柳丹後守直重は、寛永十七年九月より同十九年四月まで大内・寒川・三木・山田・香東の五郡を預り、松平美作守定房は同期間香西・南條・北條・鶴足の四郡を預り治めた。又加藤出羽守泰興は寛永十七年より同十八年七月まで那珂・多度・三野・豊田の四郡を預つてゐた。

山崎氏

寛永十八年九月山崎甲斐守家治西讃五萬三千石(多度郡・三野郡・豊田郡。那珂郡の中地方・中府・鹽屋・津森・今津・田村・山北・金倉・櫛無・佐文・西七ヶ村。鶴足郡の中土居。)を領して丸龜に居城し、倭家・治頼に至る明暦三年まで十七年間西讃を領した。山崎氏絶家の後、萬治元年京極氏が

十三年豊臣秀吉が四國を平定するに至つて長曾我部氏に屬した者は悉くその城邑を沒收されて没落し、仙石權兵衛秀久當國に封ぜられし時、獨り十河氏のみ山田郡に於て二萬石を給せられたが、仙石氏に従つて島津氏と戦ひ、安富、羽床の諸氏と共に戰死して讃岐の豪族は殆んど後を絶つに至つた。仙石氏亦この時罪を得、高野山に逃れ尾藤甚左衛門當國を領したが、天正十五年豊臣秀吉の島津氏追討に従ひ罪を得て讃岐を沒收せられ、生駒雅樂頭親正之に代つた。

生駒氏

天正十五年生駒雅樂頭親正(一名近規)當國に受封して引田城に入り、高松城を築いて之に據り、一正・正俊・高俊を経て寛永十七年に至る五十餘年間當國を治めた。生駒家分限帳に表はれた當國神社の社領は金刀比羅宮の三百三十石を筆頭に、小は仲多度郡南村素盞神社の八斗に至る四十數社が見えてゐる。神社の社領は古くより國主、領主の寄進があり戰國時代と雖も各々の領主はその領内の神社に神領、社領を寄進し來つたもので、生駒氏亦先規に従うて之を寄進し、或は又新に寄進したものである。四十數社の内には現今何れの神社なり

西讃を領するまでは多羅尾久右衛門・下曾根三十郎等がその闕所を治めた。

松平氏

生駒家没落の後寛永十九年松平頼重東讃十二萬石に封ぜられ高松に藩府を置き、頼常・頼豊・頼桓・頼恭・頼眞・頼起・頼儀・頼恕・頼胤・頼聰を経て明治維新に至つた。松平氏は神社行政に最も意を用ゐ、金刀比羅宮の祀田三百三十石と、白鳥神社の祀田二百石とを幕府に乞うて朱印地とし、田村神社の兩部習合を廢し、寛文年間には一村一社の制を定めて小祠を合併し、又屢領内神社の由緒を調査せられてゐる。

京極氏

萬治元年京極高和は山崎氏の後をうけて丸龜城に入り西讃五萬六十七石と播磨國にて一萬石を領し、高豊・高或・高矩・高中・高朝・朗徹を経て明治維新に及んだ。元祿七年京極高和はその子高通を多度津に分封し、多度・

三野二郡の中壹萬石を領せしめた。これ即ち多度津藩で、高慶・高文・高賢・高琢を経て明治維新に至つた。此の間右領域内の神社は専ら京極氏の保護と崇敬をうけたのである。

神佛分離と社號改稱

明治元年神佛分離の令を發せられ、佛像を以て神體となすこと、社前に佛具の類を置くことを禁ぜられ、又社僧を廢し、社僧は還俗して神職となることを許した。

明治三年十一月には社號の改稱が行はれた。今その一例を三豊郡史によつて載せると

| | |
|--------|------------|
| (舊 號) | (改 稱) |
| 祇園社 | 須賀神社 |
| 王子權現 | 高津神社 |
| 辨天社 | 嚴島神社—市杵島神社 |
| 龍王社 | 雨龍神社 |
| 妙見社 | 産巢日神社 |
| 皇子權現社 | 神櫛神社 |
| 十二社權現社 | 木熊野神社 |
| 牛頭天皇社 | 進男神社 |

る。

社領上地

明治四年正月太政官布告に「諸國社寺由緒ノ有無ニ不拘朱印地除地從前之通被下置候處各藩々籍奉還之末社寺ノミ土地人民私有ノ姿ニ相成不相等ノ事ニ付今度社寺領現在ノ境内ヲ除クノ外一般上知被 仰付云々」と見え、之によつて往古からの神領と雖も境内を除く外は上地せられたのである。

社格制定

明治四年五月の太政官布告により官社、諸社の制が定められ、官國幣社、府縣社、郷社、村社の社格が制定せられた。官國幣社は官社、府縣郷村社は諸社である。無格社は公認せられた神社で官社府縣郷村社の社格の無いものである。同年七月の太政官達に定められた郷社定期によると、一戸籍区内に一社とし、最も盛大なる神社を郷社としその外の神社は郷社の所屬としたが、當時郷社所屬の神社も事實は獨立神社として發達し、明治二十七年の府縣社以下神社神職に關する官

歴史、傳説と神社

| | |
|--------|-----------------|
| 藏王權現社 | 頂懸神社 |
| 毘沙門社 | 勝佐備神社—勝進神社—速日神社 |
| 荒神社 | 大神魂神社 |
| 青龍權現社 | 鷺井神社 |
| 山王權現社 | 日枝神社 |
| 龜山權現社 | 龜山神社 |
| 石堂權現社 | 石室神社 |
| 熊野權現社 | 熊野神社 |
| 八王子權現社 | 八柱神社 |
| 大權現社 | 國修神社 |
| 五所權現社 | 五柱神社 |
| 金毘羅權現 | 琴平神社 |
| 九頭神社 | 久斯神社 |
| 幸神社 | 塞神社 |
| 小森明神社 | 水分神社 |
| 龍川社 | 龍田神社 |
| 庚申社 | 猿田彦神社 |
| 神功皇后社 | 帶比賣神社 |
| 太神宮 | 五十鈴神社 |

である。なほこの際祭神を改められた神社もあるやうである。なほこの際祭神を改められた神社もあるやうである。制は全く獨立神社として職制が定められた。

神饌幣帛料供進指定

明治三十九年四月勅令第九十六號を以て府縣社以下神社の神饌幣帛料供進に關する勅令が公布せられ、翌四十年一月一日より之を施行せられた。本縣に於ては明治四十年三月二十二日縣社大川郡白鳥神社外八社が指定せられ、同年九月二十一日郷社四十五社、同十月二十四日村社九十八社及び郷社一社が指定せられた。その後逐年指定せられて現在は二百三十餘社に及び、無指定郷村社は現在のところ百餘社である。

神社の合併

明治三十九年八月、神社宗教兩局長の依命通牒の趣旨に基づき、本縣に於ても亦多數神社の合併が行はれた。明治三十八年末に於て本縣の神社数は三千四百九十六社であつたが、同四十三年六月末には三千百二十二社となり、爾來頻に合併せられて大にその數を減じ、本書登載の神社数は二千四百七十三社で約一千社の合併が行はれ、之に脱漏編入と同時に合併

せられたる神社を加へると夥しい數に上つてゐる。他府縣に於ては村社以上の神社で合併せられた神社も多數あるが、本縣に於ては村社數社が合祀せられたのみで他は悉く無格社の

第四章 慣習、風俗と神社

縣下に於ける慣習、風俗等は近府縣各地と多く異なる所はない様である。民間に行はれる行事のうち神社に關するものを西讃府志・仲多度郡史・小豆郡誌・大川郡誌等によつて記載すると左の通りで、これ等のうちには既に廢れてその形式のみを残すものもある。

年 始 陰曆にて正月朔日を元日と稱し、三日までを三箇日とて之を年始の祝日とす。元日は未明吉方ユキに向ひ若水を汲みて盥嗽し、天地神明を拜し氏神に參詣し靈舎に拜禮す。……三日は鷄鳴を聞く頃氏神に參し、毘沙門祠に詣て福徳を祈る。(仲多度郡史)

元日ハ未明ニ起出デ惠方ニ向ヒ若水ヲ汲ミ……終日事ヲ爲サズ神社ニ參拜スルヲ常トス。(大川郡誌)

御門弓 室本(三豊郡高室村)アタリノ村人正月七日御

タル祈禱札ヲ村境ニ掲ゲ且ツ全部員ノ宴會ヲ開ク。近來ハ其宴會ヲ廢スル向多シト云。(小豆郡誌)

社 日 社日は立春及立秋後五回目の戌ツチノの日なり。現行曆にては三、九兩月春、秋分日より近き日を取れり。此の日土の神を祭る舊慣あり。土は萬物を養ひ五穀を生ずるが故なり。従ふて春は此の日より播種し、秋は社日より穀を刈り始むるに吉なりとす。されば農家は社日講とて米錢を集めて饌酒を地神に供して祭儀を擧げ、終りて宴を當家に開きて歡飲す。此の日田畑を耕さざる風習あり。(仲多度郡史)

社日ハ春秋ノ彼岸頃ニアリ此ノ日農家ハ地神祭ト稱シ天照大神其他五靈ヲ祭レル碑前ニ參拜シ地神講ト稱シテ神酒ヲ饗應スルノ習アリ。此ノ日ハ耕地ニ入ルヲ禁ジ業ヲ休ム。(大川郡誌)

地方によりては社日祭を神社に於て行ふ所もある。

水口祭 八十八夜頃稻種ヲ蒔カントスル時苗代ノ水口ニテ保食神ヲ祭り樹枝ヲ挿シ燒米ヲ供ス……(大川郡誌)

燒 米 春稻種ヲ下ス時水口祭ト苗代ノ水口ニ保食神ノ鹽ヲ立、蒔餘リタル粃ヲ熬リハタキテ供フ、是ヲ棚燒米ト云……(西讃府志)

端 午 五月五日菖蒲ニ蓬ソヘテ屋ヤヲ葺……又室本

合併である。而して之等合併神社に明細帳と不突合の點あり、神社の實數は本書の二千四百七十三社よりも二三減少するものと思はれる。

門弓トテ、ツトメテ氏神ノ社ニ集リ、左右ニ方ヲワカチ、各一人ヅ、白張ヲ着ケ、七矢半トテ左右互ニ一矢ヅ、放チテ的ヲ射ル、合セ七十五矢、射終リテ其神ニ供ヘマツリシ御飯ナドヲ集ル人々ニ分ツ、尙ココノ外ニモ浦邊ノ村ニハ此ワザスル處カタガタアリ、其サマ聊ヅ、カハレリ。(西讃府志)

高室村村社皇太子神社にては七日日祭とて當社を奉齋せし一族の者の奉仕する射弓の祭典ありて、正月七日當番の大人十二名參社し、此日の夜半海中に飛び込み身を清めて式にうつり、曉前までに千矢を通す。

百 手 (西讃府志・仲多度郡史)(仲多度・三豊二郡概説に述ぶ)

村祈禱 期日定マラズ正月申ニ行フ。部落民ハ氏神又ハ寺院ニ詣テ五穀成就部内安全ヲ祈リ神官又ハ寺院ヨリ請受

村、比地大村(共に三豊郡)ナドノアタリニハ牛畜ル家毎ニ麥藁モチ牛ノ形ヲ作り、菖蒲ノ根ヲ角トシ、枇杷ノ葉ヲ耳トシテ野津古ノ祠ニ奉リ、牛ノ爲ニ災ヲ攘ハンコトヲ祈ル。(西讃府志)

請 取 六月朔日に請取とて翌年厄年に當るもの、早朝金刀比羅宮及氏神へ參拜し又宅神を祭り、當人を正座として家内祝ひを爲す。(仲多度郡史)

六月朔日、明年厄ノ年ニ遇モノ請取トテ神祭リナドシテウチイハフ、サテ明年正月晦日厄祓ヒト云コトスルナリ、是等何國ニモスルコト、モ聞ユ。(西讃府志)

半夏生 ……此の日農家は業を休み小麦團子を製して神佛に供へ……又半夏祭とて氏神に新麥を供へ日待などする所あり。(仲多度郡史)

組 廻 六月七日一部落總出ニテ大峰山上大權現ノ守軸ヲ竿頭ニ掲ゲ毎戸ヲ廻リ終リニ其ノ地ノ荒神社ニテ之ヲ收ム。蓋シ惡魔ヲ拂フノ意ナルベシ。(小豆郡誌)

御前祭 六月十三日に行ふ。御前とて猿田彦神を祭る。天孫降臨の時御前ミマキを攘ふて嚮導し奉りし神なれば神恩に報ひ前途の守護を祈る義なり。……此の祭今郡内にては稀なるが如し。(仲多度郡史)

御前祭 六月十三日處ニヨリ其處ノ氏神ニ麥ヲ持テ參ル。(西讃府志)

夏祭 莊内ノ浦人夏祭トテ六月中比麥醴ヲ釀リ處々ノ荒神ヲ祭リ神樂ナド奏シ、サテ其年ノ頭人ヨリ麥醴ヲ其處々ノ家毎ニ贈ル。(西讃府志)

夏祭は多くの神社にて行はれ市立ありて賑ふ。秋の大祭に準じて盛大なる神事を行ふ神社もある。

土用講 處ニヨリ土用講トテ六月ノ土用中ニ村人其處ノ氏宮ニ集ヒ、春ノ百手ノ如ク大ニ宴ヲ設ク。(西讃府志)

蟲送 六月ノ中ニスルナリ、一村ノ人苗ノ虫付タルヲ拔トリ、處ノ氏神ノ社ニ打集ヒ太鼓、鉦螺ナド鳴シ、イツモ定リタル處アリテ其處ニ送ル、其處ニモ又定リタル處マデ送ル、後遂ニ海ニ送り流ス、處ニヨリ扇ヲ以テ村中ノ田ヲアフラグリアリクモアリ。(西讃府志)

六月除草を終る頃蟲送りとて村内の蝗の付たる稻を抜き、氏神に持寄り太鼓、鉦、螺など鳴して各村順送し終には海又は里遠き山原等に棄つるなり。中には扇にて田面を扇ぎ歩くなどせり……今は殆ど其の祭事を行ふに過ぎざるもの多し。(仲多度郡史)

瀧宮踏舞 (西讃府志)(綾歌郡瀧宮村縣社天満神社、村

其宮ニ作り花ナド飾リタリ。是ヲ七八人シテモチタツ、初ノ一輪ニ花受トテ七八歳ノ童子凡四十人バカリ花笠ヲカヅキ、扇ヲモチサマム、粧ヒテ廻リ立、其外ノ第二輪ニ小踊トテ十二歳ヨリ十五歳バカリノ童子麻衣ノ振袖ヲ着女帯ヲ結び垂、管笠ノ簷ニ赤キ絹ツケタルカヅキテ扇ヲモテル四十人バカリ廻リ立、其外ノ第三輪ニ警護トテ二十歳ヨリ三十歳バカリナル男六七十バカリ羽織ヲ着、刀ヲ帯ビ大キナル團扇ヲ持テメグリ立、其第二輪ト第三輪トノ間ニ太鼓打四人鉦ウチ二人出音頭四人居ルナリ、太鼓打鉦打共ニ陣笠ヲカヅキ半臂ノ裾ニ鈴付タル着テ草鞋ヲ穿脚絆ヲ絆ヒ太鼓ヲ胸ニ結付兩手ニ桴ヲ持テ回節ノマ、ニ其輪郭ヲ走り廻リツ、打鳴ス、音頭ハ大キナル團扇ニ金銀ノ紙ニテ縁トリタルヲ以テ其カタヘニ竝立、先音頭ナルモノ初句ヲ謡ヒ出ス、付音頭第二句ヨリ聲ヲ合ハセテ共ニウタフ、サテ踊ヲ初メントスル時、先番板トテ踏舞ノ次第書付タル板ヲ場ニ立、次ニ追拂トテ長刀持タル男二人進ミ出テ其場ヲ開ク、次ニ修験者三人入蝶ヲ吹、花受小踊警護イヅレモ手引一人ヅ、ソヒタリ、中ニモ花受ナルハ兜ヲカヅキ上下ヲ着團扇モテリ、此時手引ノ者先入りテ各其列ヲ定ム、踊終リテ修験者出蝶ヲ吹テ退キ出、先ヅ八幡宮次ニ植鹽、次ニ渙醜、次ニ役場ト凡六所一日ニナスト云。

慣習、風俗と神社

社瀧宮神社の條に述ぶ

綾子踏舞 佐文村(仲多度郡十郷村)ニ早ノ時此ノ踏舞ヲスレバ必驗アリトテ、龍王ト氏社トニテスルナリ。下知一人アリ、上下ヲ着花笠カヅキ、大ナル團扇モテリ、踊子六人、十歳アマリノ童子ヲ女子ノ姿ニ作り、白キ麻衣ヲキセ赤キ帯ヲ結ビタレ花笠ヲカヅケ扇モチタリ、又踊ノ歌ウタフ者四人菅笠ヲキテ上下ツケタリ、又菅笠ノ縁ニ赤青ノ紙ヲ切テ付タルカヅキ、袴ヲツケ木綿付タル榊持タル二人、又花笠キテ鼓笛鉦ナドナラス者各一人……サテ歌ウタフ者歌書キタル本ヲヒラキ、聲ヲソロヘテウタフ、例ノ下知進ミ出團扇ヲヒラメカシテ踊ル、踊子三人ヅ、二行ニ並ビ下知ガ團扇ノマ、ニ扇ヲ打フリテ踊ル、鼓笛鉦ナド持タル者其カタヘ並立テ曲節ヲナス……其初ナルヲ水踊、次ナルヲ四國、次ナルヲ綾子、次ナルヲ小鼓、次ナルヲ花籠、次ナルヲ鳥籠、次ナルヲ邂逅、次ナルヲ六調子、次ナルヲ京絹、次ナルヲ摺飽船、次ナルヲ忍、次ナルヲ歸り踊ナド、十二段ニワカテリ。(西讃府志)

豊後、小原木 大野村(三豊郡財田大野村)ノ人雨ヲ祈ルニ踊ヲナス、村人上組下組ト二ツニワカレ、上ナルヲ豊後、下ナルヲ小原木ト號ク、其サマ第一輪、第二輪、第三輪ト輪廓ヲ作り、第一輪ノ中ニ傘筒トテ大ナル傘ノ上ニ宮ヲ置

(西讃府志)

屋形、雨花

姫濱、和田(共に三豊郡)ナドニモ雨乞ノ踏舞アリ、姫濱ナルヲ屋形トイヒ、和田ナルヲ雨花ト云、踊ノサマハカハリタルコトナケレド歌ハ同ジカラズ。(西讃府志)

八朔

八月朔日、此月ハ氏神ノ祭典月ナルヲ以テ當日ハ業ヲ廢シ氏神ニ參詣シ且祭典ノ準備ヲ爲ス。(小豆郡誌)

左義長

室本村ノ人八月十五日ノ朝牛ヲ牽テ野津古ノ祠ニ詣テ、方三尺ノ藁小屋ヲ作り火ヲカケテ是ヲ焼、ソヲ左義長ト云、サテ其焼タル灰ヲ紙ニ包ミテ持カヘリ牛屋ノ口ニ納メ置牛ノ病ヲ去ルト云。(西讃府志)

松殿、注連下

三野、豊田(三豊郡)ノアタリ、村ニヨリ秋ノ祭ニ其年ノ頭人祭ヨリ六七日前ツカタ、淨池ヲ撰ビ松殿トテ枝七車ナル松ノ木ヲ立、前ニ棚ヲ設ケ幣帛ヲ立神靈ヲ齋ヒ祭リ神酒神供ナド奉リ、頭人ノモノ打集ヒテ是ヲ祭り終テ宴ヲ爲ス、注連下トモイヘリ。(西讃府志)

秋の氏神祭に方り、例祭七八日乃至一ヶ月前注連下しとて祭禮頭家の内外を清め宅前井戸等に齋竹を建て、注連繩を引き、木綿を垂れ清祓を行ふ。往時は淨地に松樹を立て棚を造り幣を置きて神靈を奉齋せしより松殿の名ありしなり。今も齋舎を造り神供を備へなどして頭家の事終ふるまで汚穢の者

をいらしめず。祭事の浄潔を期するなり。此の日神職を招き
事終らば酒宴を開く、之を頭家の初寄りとも云ふ。

菊節句(重陽) ……此の日神佛に菊花を備へ、多くは
業を休み菊酒を飲みて一家慶祝するあり。又九日祭と稱して
秋の大祭を行ふ所多かりしが、祭日は必ず陽曆を以てするこ
ととなり、今は小祭を行ふに過ぎず。(仲多度郡史)

馬士謡 萩原、中姫(三豊郡萩原村、大野原村)ナドノ
村人、八月ノ祭リニ駄荷ヲ飾リタル馬ヲ引テ神輿ニ從フ、サ
テ馬士謡トテ昔ヨリ謡ヒ來レリ、曲節モ定アリテ、くりあ
げ、六藏ナドイヘル名アリ。(西讃府志)

一ツ物 琴彈八幡宮ノ祭リニサルベキ童子ヲ選ビ、祭
ノ前ツ方ヨリ重ク齋ナサシメ、祭ノ日鳥ノ尾サシタル笠ヲ
キセ、コレガ額ト笠トニハノ字ヲ書、馬ニ乗テ神輿ノ前ニタ
、シム、是ヲ一ツ物ト云、又笠岡村(三豊郡笠岡村)ノ祭リニ
村人五郎八ト云者、其家ノ巽ノ方ニ廣サ三間長サ五間バカリ
ノ堀アリ、其中ニ塚アリ、其塚ニ生タル茅ヲ一ツ物トテ持來
リ神輿ニ從フ。又能岡八幡宮ノ祭ニモ彼五郎八是ヲ持行ト
云。(西讃府志)

氏神祭典 神社ニヨリ一定セサレドモ九月ヨリ十月(陰

デヤマズ、又狂戯、棚輿、棚車ナドノ類ハ諸國ニアルコトナ
ガラコ、ニモ處々ニアリ。(西讃府志)

獅子舞 地方神社の祭典に獅子舞を奏するは古き風習
にして秋祭には必ず之を行ふ。獅子は伎樂の一にて高麗より
傳來し、始め佛會のみに用ひたり。攝津國原田神社の祭に木
造の獅子頭を奉る式あり、神使の鹿家に入れば吉なりとて獅
子頭を冠り鹿を追ひ舞戯せしより起れり……今郡内にて行
はるゝは、獅子頭(其の面貌を張抜き毛を植う、毛皮を張れ
る毛獅子、頭角ある雄獅子などあり)に、牡丹に唐獅子など
模様染の布衣(毛獅子には總體毛を刺せり)を胴とし、芋を
尻尾とせるを二人胴布の前後に入り踊舞す。其の人を獅子遣
と云ふ。大太鼓、地太鼓(半胴のは半太鼓と云ふ)あり。太
鼓打とて多くは小兒、友染の衣に袴を着け花笠を冠り禰をか
けて大太鼓を打つ、此の外笛、手拍子、鉦を以て舞曲を助
く。其の音曲の高低、獅子舞の緩急等節度ありて、五段、十
二通り、曲遣ひ、或は何村流など稱し、其巧拙によりて興味
に厚薄あり。又本獅子、御供獅子など稱し、各組の當家を定
め、祭禮前大抵七八日乃至十數日間、毎夜集合して皆練習す
るを獅子習と云ふ。而して祭禮當日は氏子中の獅子組より
轆、吹貫などを押立て、導き太鼓を打ながら長刀振り、鼻高

曆ニテハ八九月中)ニカケテ氏神祭典アリ、氏子ハ衣服ヲ新
調スルモノ多ク、出稼者モ大抵郷里ニ省シテ氏神ニ詣ツルヲ
常トス……神輿ノ渡御ニハ獅子・奴・太鼓台等ノ行列ニテ
最モ壯觀ヲ極ム。(大川郡誌)

八月十一日ヨリ十六日マデノ間ニ於テ郷村社ノ祭典アリ、
一年中ノ大祭ニシテ在島ノ老若男女ハ勿論遠ク郡外ニアルモ
ノモ此ノ祭典ニ會スルヲ無上ノ歡樂トシテ特ニ歸郷スルモノ
多シ。祭典ノ準備トシテ八月ニ入レバ被服ノ新調、太鼓ノ練習
ヲナシ祭日切迫スレバ神輿奉持者ハ齋戒沐浴シテ神社内ニ寢
食シテ心ヲ清潔ニ保持ス。祭禮渡御ノ行列ニハ大轆ノ曲藝太
鼓台ノ扛舁アリ、高張提燈・槍・長刀・其ノ他ノ神具並ニ神輿
相連リ神官巫女氏子惣代等之ニ從ヒ壯觀ヲ極ム。(小豆郡誌)

獅子 八月九月ノ頃村々ノ祭ニ獅子ノ舞トテ、狡
ノ頭ヲ作り之ニ衣ヲ付、前後二人彼衣ヲカヅキテ舞ヲ爲ス、
太鼓、笛、鉦ナド鳴シ其曲節ヲナセリ、凡太鼓二三三人笛鉦各
一人ナリ、イヅレモ八歳ヨリ十二歳バカリノ童子ヲシテ是
ヲ役メシム。コヲ祭前十日バカリヨリ習ハシ祭ノ日ハ氏社ヲ
始メ小祠ニ至ルマデ是ヲ奏ス。處ニヨリ其曲節聊ツ、カハレ
リ。又何流ナド、テ名モアルナリ、又城下ノ市人ハ十二三歳
ノ兒女三絃ヲ鼓テ町ノ中ヲ何處トナク遊ビアリキテ夜深ルマ

先驅して來り、大抵社前に位置を定めて數組一時に演奏する
こと數回互に優劣を競ひ遲速を争ふの風あり。其の盛なるこ
と田舎祭の第一たり。又神輿渡御あるには、前供或は後供と
て之に加はり、御旅所にて演奏し、還御の時社前に演ずるを
舞込みと云ふ。……(仲多度郡史)

里神樂 例祭に附屬の神事に里神樂あり多くは西讃地
方に行はれる。

里神樂は一に讃岐神樂と稱し地方によつて聊かその趣を異
にするが、先づ庭燎囃子(み山にはあられ降るらしと山なる
まさ木のかつら色つきにけりと唱ふ、上句は齋主の發聲にか
ゝり、下句は神職一同齋唱す)によつて松明に火を入れるに
初まり、神寄せ(四方拜ともいふ。あまつ神くにつやしるを
いはひてぞわがあしはらの國は治まると唱ふ)あり、幣の舞、
神の舞、岩戸の舞(うづめの舞とも云ふ)、杖の舞、笹の舞、
劍の舞、弓の舞、しま(素蓋鳴尊と五十猛命との韓國渡海の
狀を爲す)、杓の舞(猩々舞と云ふ)、してん、矛の舞等あり。
副神樂とて一般氏子等の願出により奏する舞は岩戸の舞の後
各舞の間に於て奏せられる。音曲は笛、太鼓、手拍子等であ
る。地方によつては笹の舞、してん、矛の舞のうちその一つ
或は二つが省かれてゐる所もある。概ね例祭日の前日の日没

以降に行はれ、氏子一同の参拜ありて夜ふけるまで行はれる。又夏季祭典にこの神樂が奏せられる所もある。

紐落 十一月十五日ニシテ子女生レテ三歳ニ至レバ着衣ノ紐ヲ取り帶ヲ結バセ氏神ニ参詣シテ其ノ成長ヲ祈ル、之ヲ紐落シト云フ。(小豆郡誌)

乙子の朔日 十二月一日ニシテ最終ノ月朔ナリ。家業ヲ廢シ神社ニ詣テ一日ノ歡ヲ盡ス。(小豆郡誌)

除夜 十二月三十一日ニテ……年越參ト稱シテ氏神其他福ノ神ノ社殿ニ参籠シテ徹夜スルモノアリ。(大川郡誌)

年越參 年越參りは十二月三十一日及び陰曆十二月末日、節分の三回に亘りて行はるゝ所もある。又神社によりては節分祭を執行する所もある。

忌明 男兒ハ生レテ三十日、女兒ハ三十三日目ヲ忌明ト稱シ、盛裝セシメタル産兒ヲ伴ヒテ氏神ニ参拜シ、親戚近隣ニ廻禮シテ内祝ヲナス。近時ハ殆ド氏神参拜ノミニ止ムルモノ、如シ。(大川郡誌)

生後男は二十日、女は三十三日を以て忌明とし、盛裝して氏神に参拜し……(仲多度郡史)

百日參 生後百日ニシテ母兒衣服ヲ裝ヒ氏神ニ参詣スルヲ云フ。(小豆郡誌)

年賀 男ノ四十二歳ヲ初老ト稱シ、女ノ三十三歳ト共ニ一生中ノ厄年トテ厄祓ノ爲ニ……神佛ニ詣テ又僧侶、神職ヲ聘シテ厄祓讀經ヲ爲シ……其ノ年ハ成ルベク神社佛閣ニ参詣シ萬事ニ慎重ノ態度ヲ取り謹慎的ニ處世ヲナス……(大川郡誌)

寄講 郡内にては町村便宜に従ふて、十家、二十家或は數十家を組みて事を爲すを講と稱す。先づ神講と稱して伊勢、出雲、石槌山、劍山等へ参拜するあり……凡四月に抽籤して參者を定め、一定の米麥、金錢を醸出するを掛錢と稱し、當籤者之を持ち講員を代表して参詣す。(仲多度郡史)

諸講 各部落ニ於テ數戸又ハ數十戸集リテ講ヲ結ビ……毎年一回講員ノ抽籤ヲ以テ伊勢参宮ヲナス等有益ノ會合アリ、其ノ種別ニハお寄講、伊勢講、金毘羅講……等甚ダ多シ。(大川郡誌)

小豆郡の諸講亦大川郡に異ならず。

荒神講 組々ノ小祠ニ御酒ヲ供へ、十家或ハ二十家相集ヒテ宴ヲナス、是ヲ荒神講ト云、穂初穂トテ處ニヨリ春ノ百手ノ如ク夏秋二度麥稻ノ初穂ヲ氏神又ハ宅神ナドニ奉リテ宴ヲ爲ス。(西讃府志)

誕生祝 生後滿一年を経て子女の誕生日に行ふ祝なり。今郡内に於ては此の日餅を搗きて宅神靈舎に供へ、氏神に参拜して内祝を爲す。(仲多度郡史)

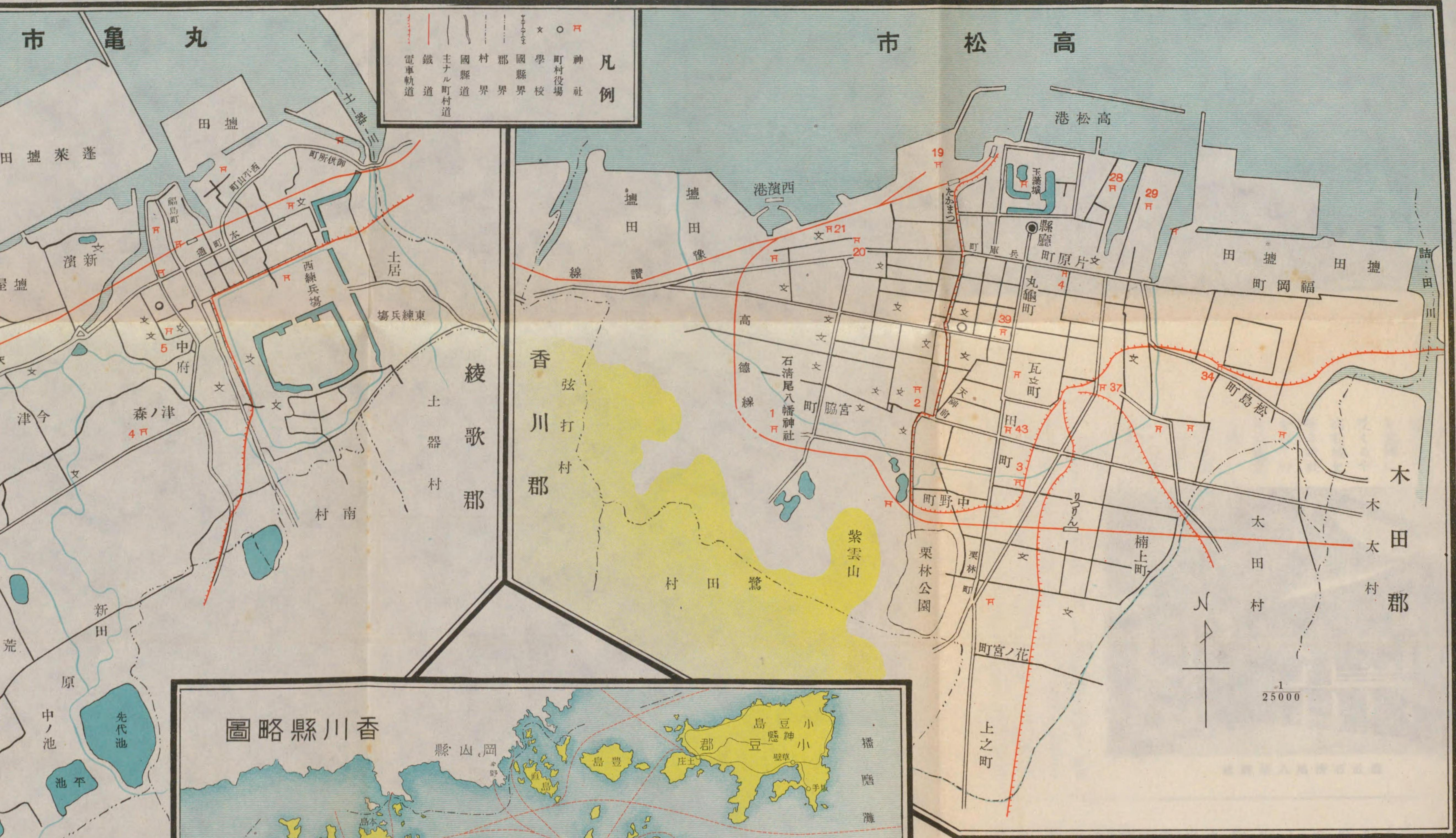
生後一年ニシテ誕生日ニ至レバ祝餅又ハ赤飯ヲ配リ、兒ハ氏神ニ参拜セシメテ其ノ生長ヲ祈ル。之ヲ誕生祝トイフ。

生後一年ニシテ……兒女ハ氏神ニ参詣シテ其ノ成長ヲ祈ル。(小豆郡誌)

厄祓 陰陽道より出でし年忌を云ふ。……男子は二十五歳と四十二歳、女子は十九歳と三十三歳を通例とし不慮の災ありと云ふ。……就中男は四十二歳、女は三十三歳を以て大厄とす。……今郡内に於ては其の前年既に請取とて神を祭り、一家常に庶事を慎み、その年至らば多くは正月中日を選びて神を祭り災を祓ふて宴飲し、厄年の人は深夜禮裝して産土神社に参拜し、歸途十字路などにて其の履ける紙緒草履を脱ぎ揃へ、小刀を以て緒を斷ち、年錢(鳥目を用ひしも今は大根を代用し年の數を刺す)と共に投じて歸途に就く、必ず供人を附するも途中語らば凶なりとて人に遭ふも言を發せずして歸り、更に宴を盛にし日待とて夜を明すを通例とす。(仲多度郡史)

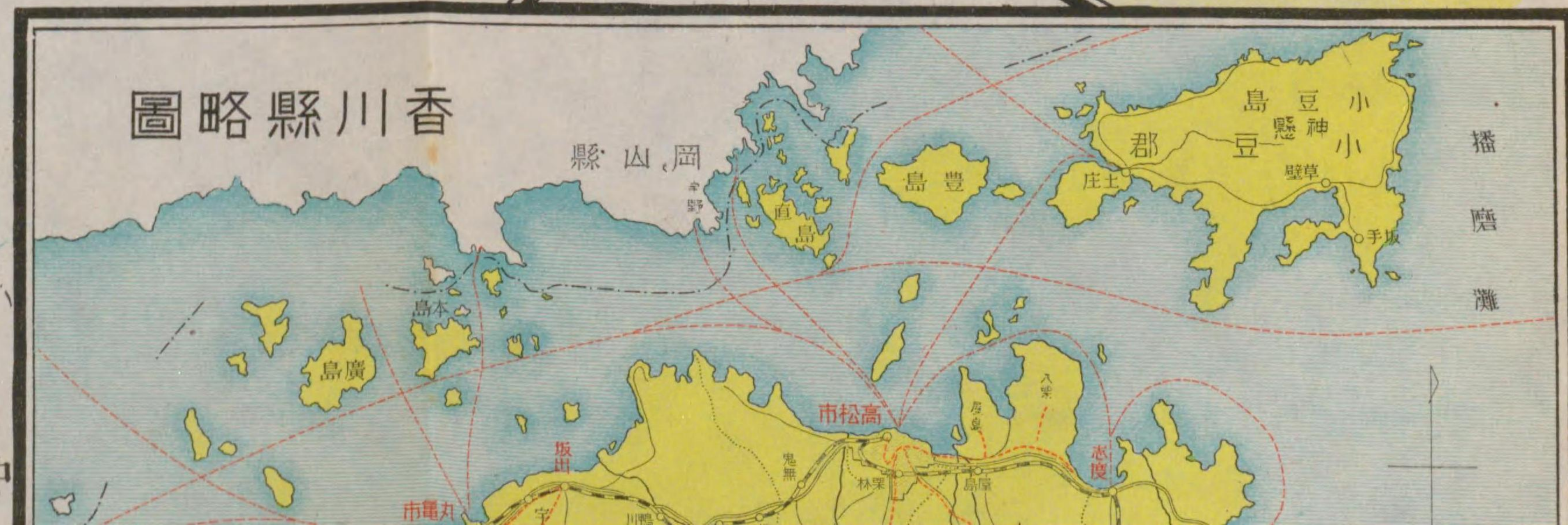
以上は各郡市共ほゞ共通のものにして右の外日待祭、月待祭等の行はれてゐる神社もある。家庭内に於て行はれる神事で直接神社と關係のないものは省略した。

第二編
神
社



凡例

| | |
|---|--------|
| ○ | 神社 |
| ● | 町役場 |
| ○ | 学校 |
| — | 国界 |
| — | 郡界 |
| — | 村界 |
| — | 国道 |
| — | 主ナル町村道 |
| — | 鐵道 |
| — | 電車軌道 |



丸龜市

高松市

蓬萊壺田

新濱

津森

新田

中ノ池

先代池

仲多度

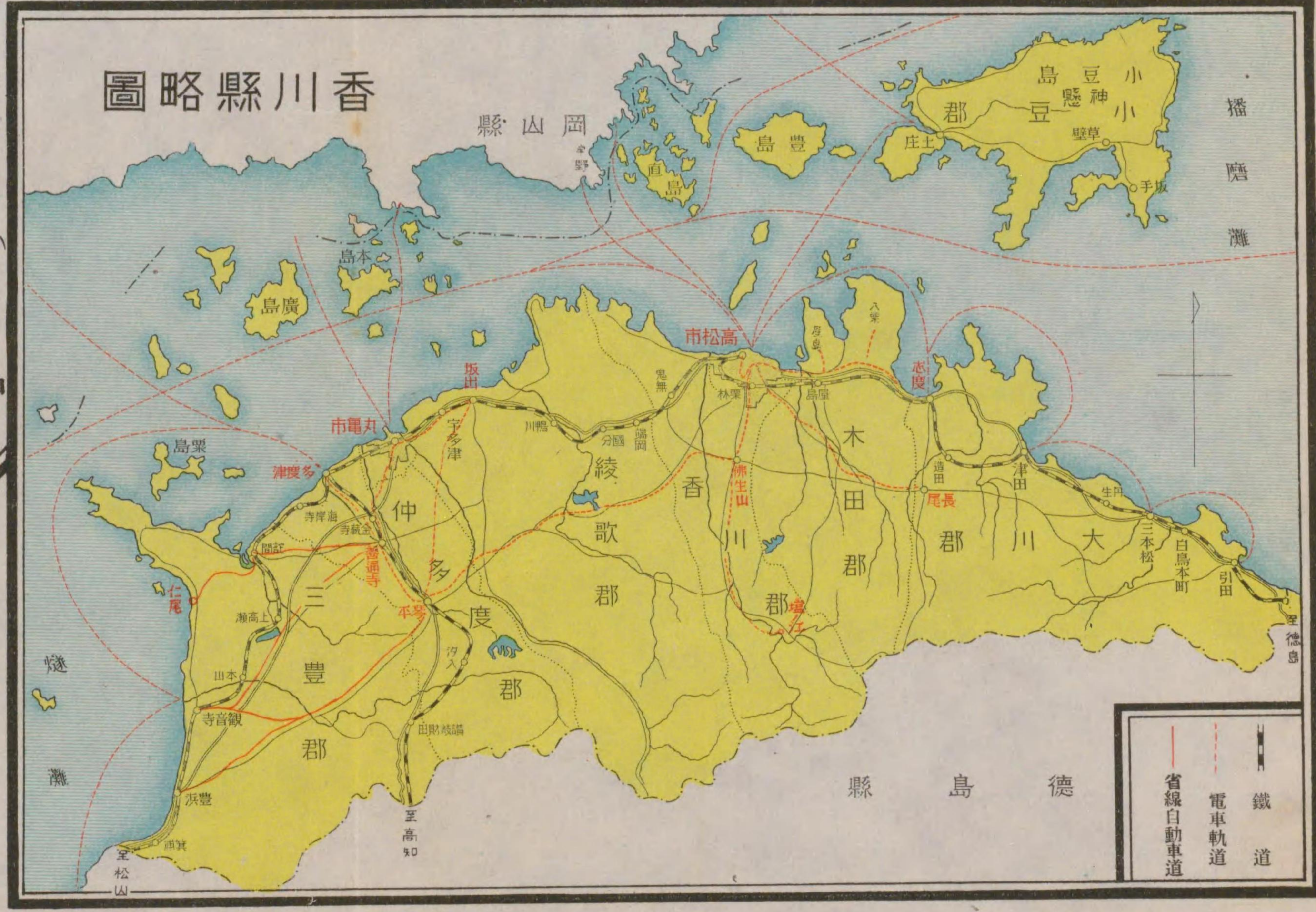
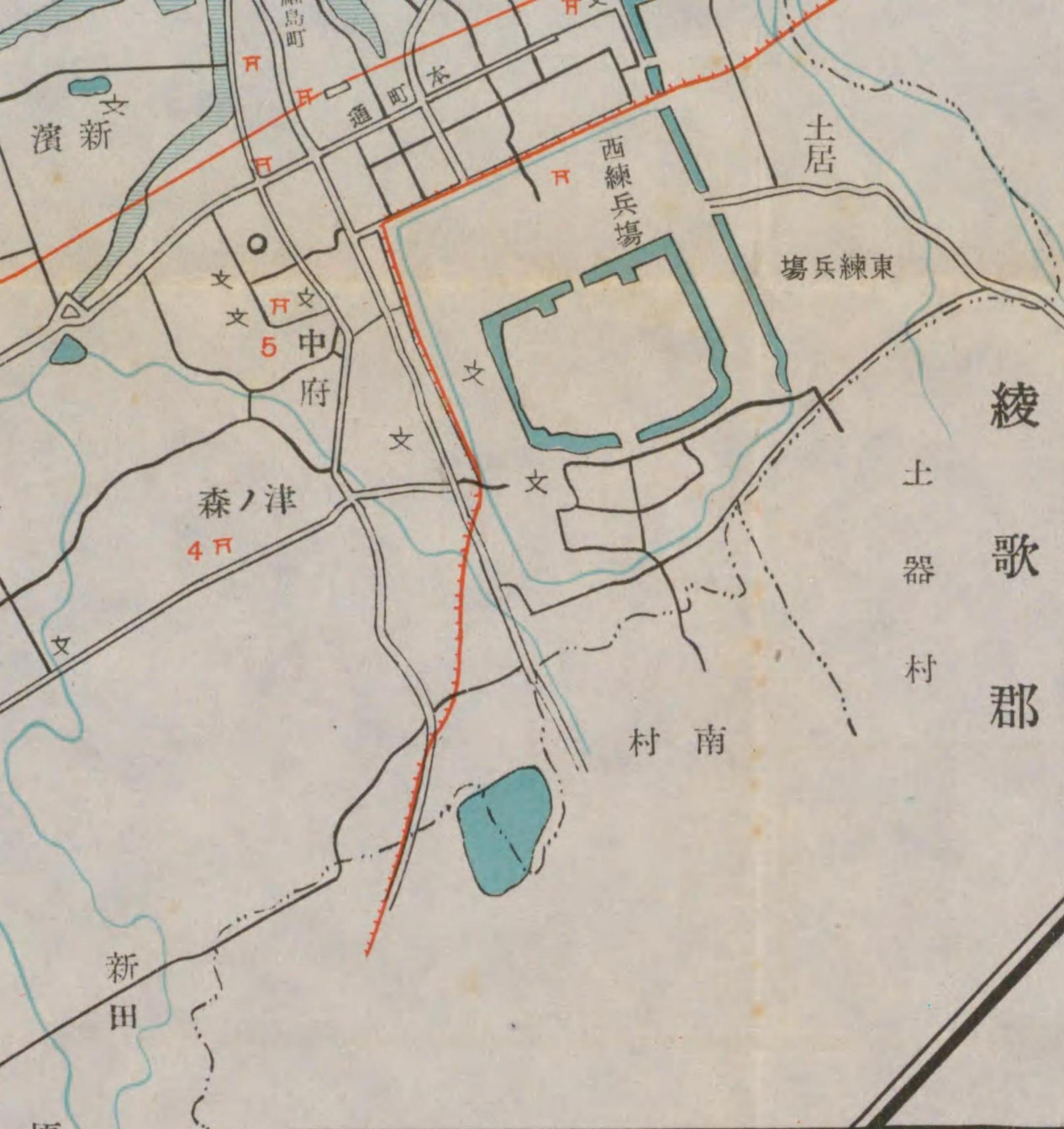
綾歌郡

香川郡

木田郡

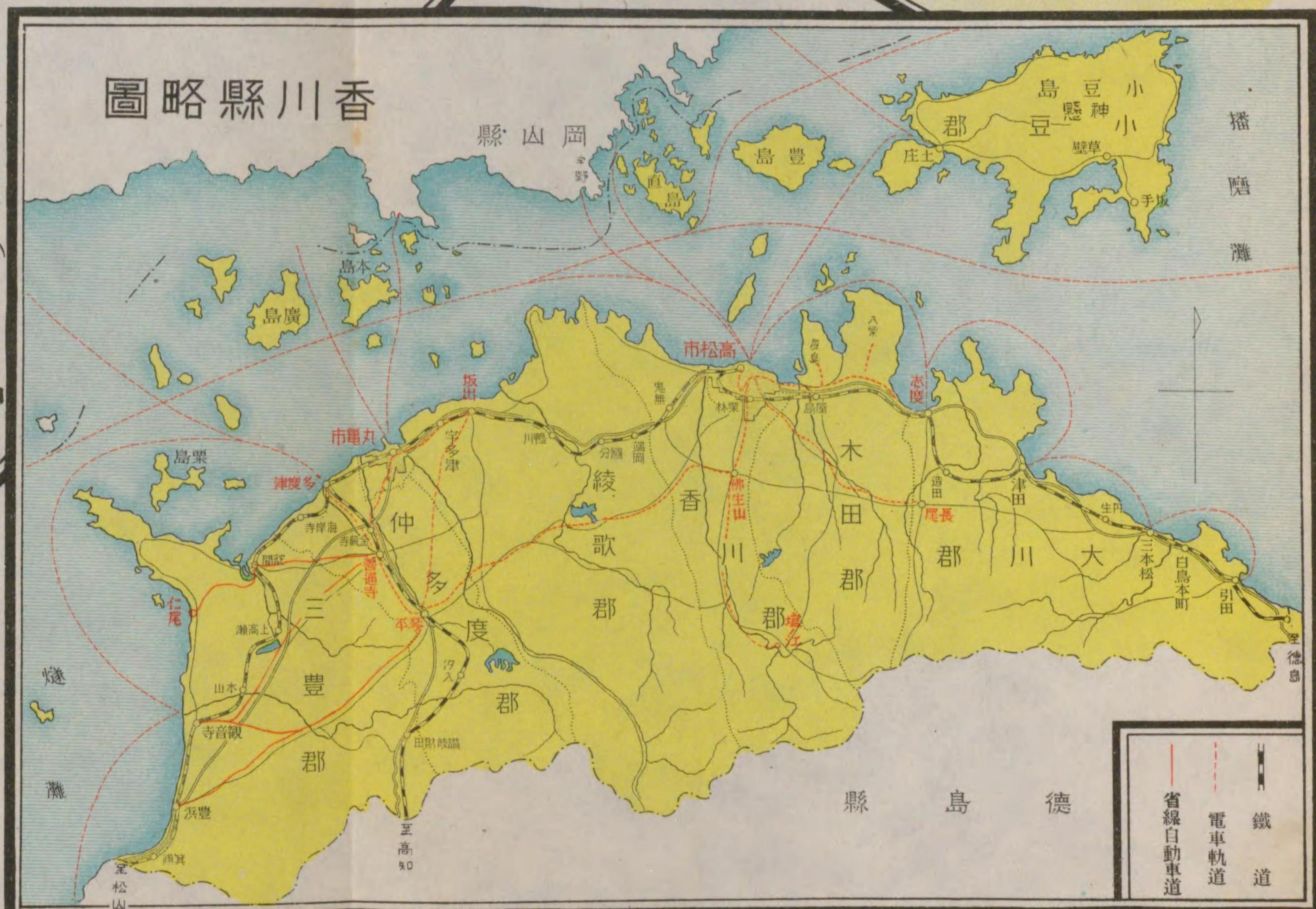
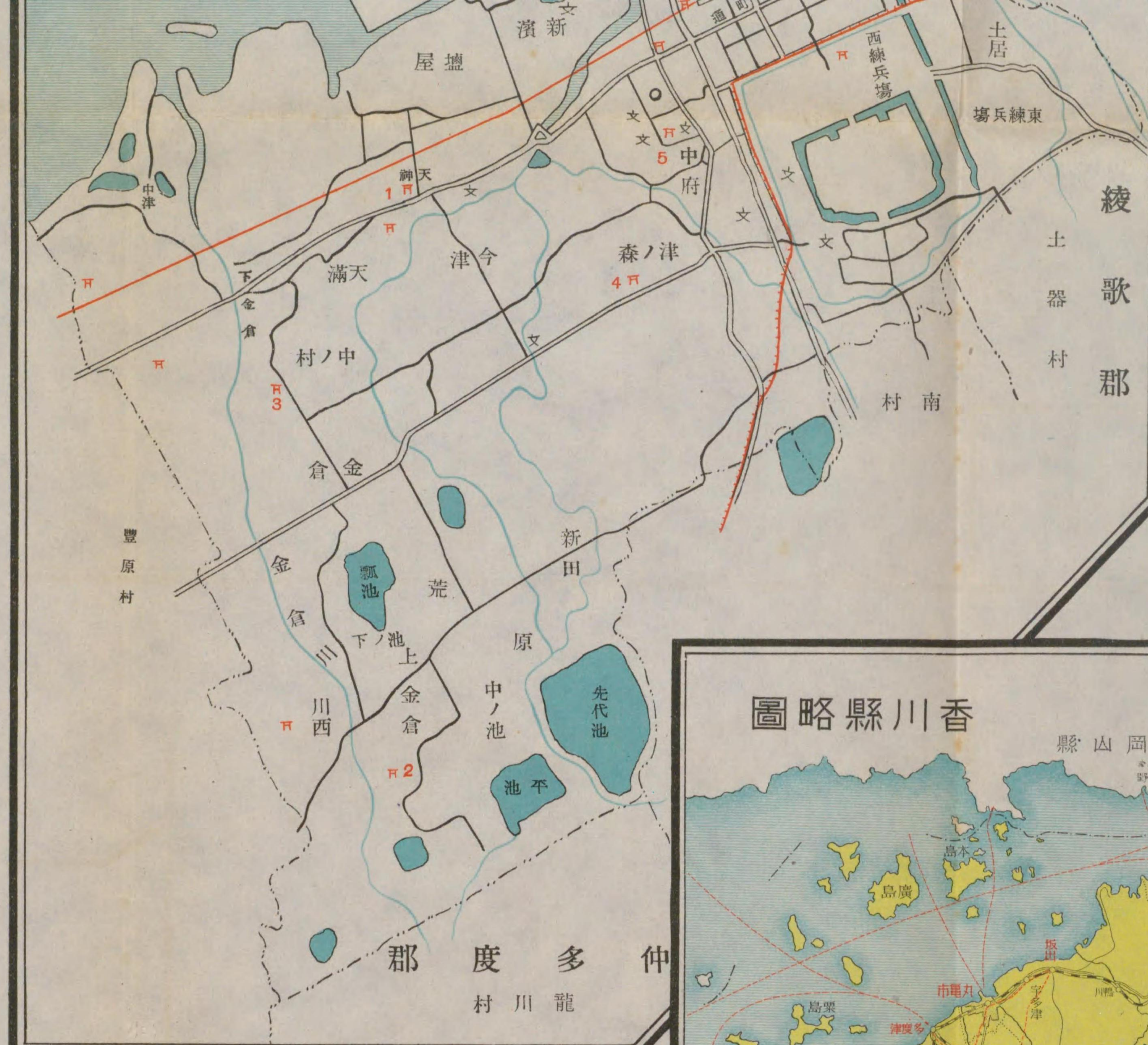
太田村

1/25000



き疫病除とて之を喰ふ風習がある。其の他に春市立祭があつ

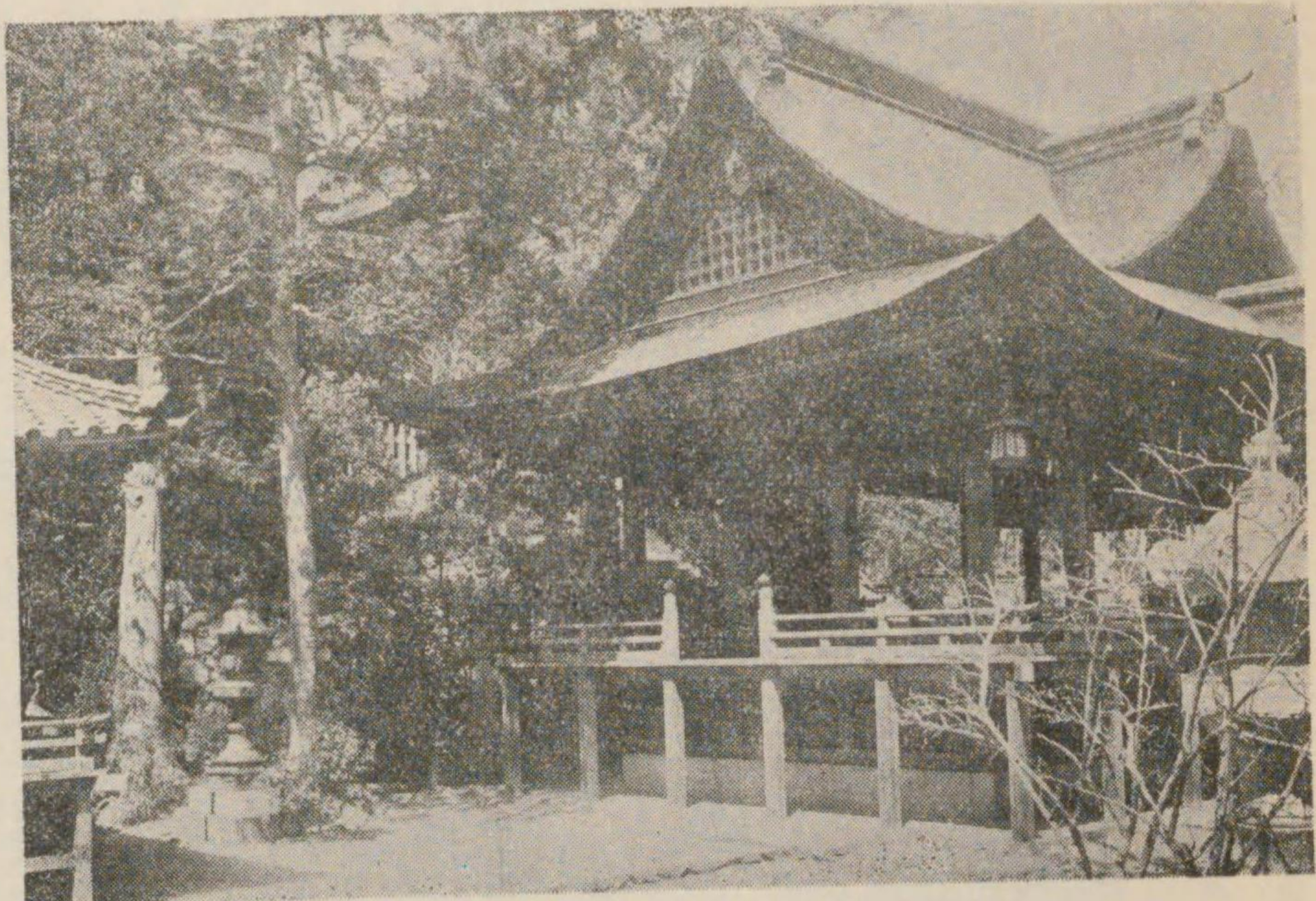
依つて社殿を擴築し祭榜を建てて武具を奉納す。且毎年四月三日の祭禮を定む。世に之を右馬頭市と稱せり。蓋し頼之の





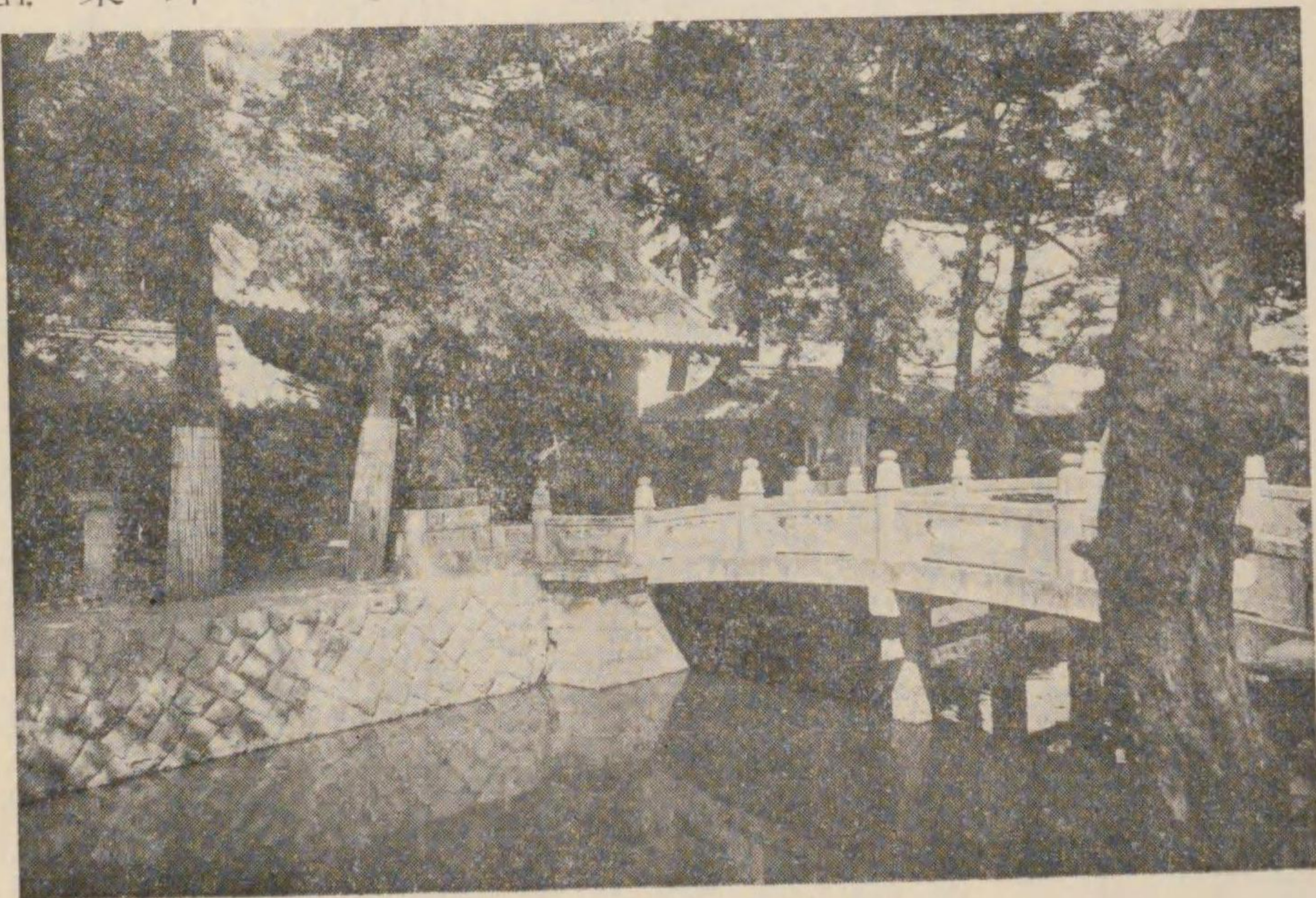
官右馬頭なるが爲なり。生駒近規封を當國に受くるや高松城を築き當社を以て府城の鎮護と崇め、更に社殿神域を大にし社領二十四石一斗七升を寄進せり。爾來高松の産土神として愈々隆昌に赴き、松平頼重に及び更に之が興隆に努め（山上より現地に遷座せりとも云ふ）其の社領は二百二十石六斗五升に及びり。藩主松平家歴代の崇敬厚く寶永二年には松平頼重又社殿を修造せ

高松市



社神幡八尾清石社縣

り。玉藻集に「延喜十八寶曆八幡麻呂降臨于香川郡龜尾山上……而國君信之卜神廟於山崎號石清尾八幡宮」蓋因石清水龜尾山兩地名而併以取焉寛文六丙午年松平讃岐守頼重公修造之社領二百二十石六斗餘寄附矣……神地宏麗ニシテ別當神主供僧社家民屋相交」とあり。又三代物語には「高松一府之鎮及近邑宮脇中ノ村上ノ村東濱西濱福岡皆社祀之阿彌陀院中川主税並奉守之」社領二百六石五斗二升供僧六院樂人九人禰宜



門神隨社神幡八尾清石

八人巫四人皆英公之所「置」と載せたり。社殿は鶴岡八幡宮に摸し、八月十五日の例祭には放生會をも行ひたり。

明治五年十一月十四日縣社に列せられ、同四十年三月二十

二日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。昭和九年四月五日

閑院宮載仁親王殿下御參拜、同年五月二十二日梨本宮守正

王殿下の御參拜ありたり。當社は高松全市の産土神にし

て全市民の崇敬する所、例祭の神幸には數艘の飾船、踊、

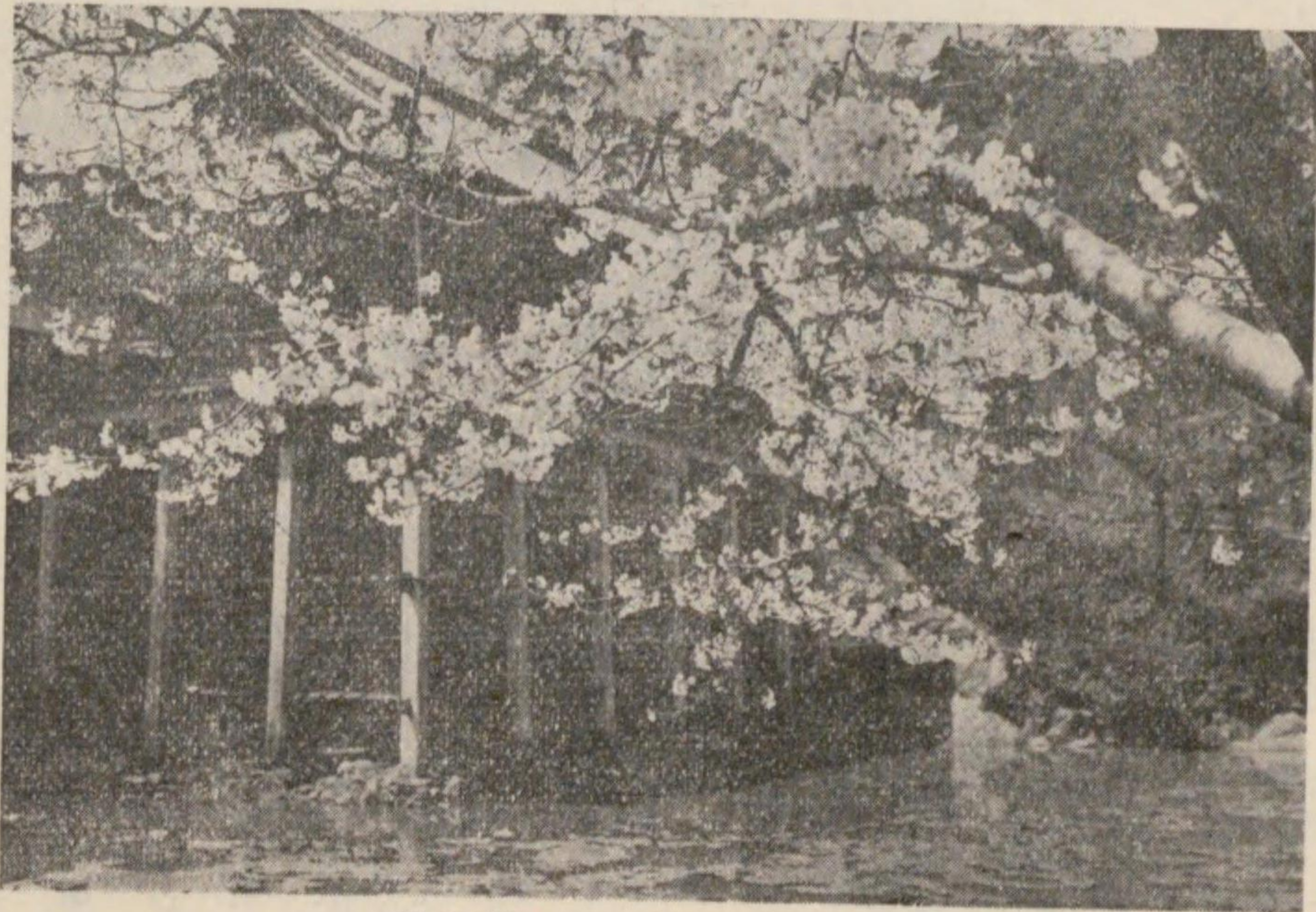
囃子等馬場筋に參集して神幸に加はり甚だ殷賑を極む。(玉

藻集 三代物語 全讚史 名勝圖會 讚州府志 生駒記

高松市史 高松藩記) 例祭日 十月十四日十五日

特殊神事

春市立祭 五月二日三日、農道具、植木市ありて殷盛なり。貞治年間細川頼之戰勝報賽の爲め社殿を造營



石清尾八幡神社繪馬殿

し、毎年四月三日を以て報賽祭を行ひ兼ねて市立をなせしに起因す。世俗右馬頭市と稱したり。後五月二日三日に變

更す。

御田植祭 七月二日(半夏生)

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 神樂殿

隨神門 神庫 神饌殿 額殿 御馬堂

社務所 廻廊 祓所 御手洗所 南神門

北神門 休憩所

寶物 細川頼之制札 花形馬面外六點細川

頼之 舞樂帳外四點松平頼 三十六歌仙額

奉納 外六點松平頼 細川清氏征矢外四點松平頼

棟札 寛永二年 武器、樂器、扁額等三十餘點

境内坪數 壹萬二千〇〇五坪

氏子區域及戸數 高松市及太田村大字下福岡

壹萬五千戸

境内神社 神明神社(天照大神)祀底筒男命

中筒男命 表筒男命 藤原鎌足公(明治四十年)

宮脇字西北代神明神社を合祀す。

若宮神社 (仁德天皇)

高良神社 (建内宿禰)

女婿福家氏之を城下の來迎院に安置せしが、來迎院退轉して高松の愛行院に移り、程なく僧增忍來迎院を高松に復興

して行徳院と云ひ神影をこゝに移せしが、僧海室之を弘憲寺に移し、僧增仔頼重の懇望にまかせて之を奉りしを頼重

當社に納めたり。古名勝圖繪に「上人は中野天神と云ふ寛

永十五年生駒高俊朝臣今の地に移せり」とありて又「天神

自筆之影壹幅中野天神社令寄進之者也 寛文十二年九月二

十五日 左近衛少將源頼重」とあり。爾來高松藩の崇敬厚

く松平頼豊祭田を増進して百石となし社號を中野天滿神社

と改む。(中ノ村の中と北野の野を以て中野と云ふ) 當社

は石清尾八幡神社と共に藩主四社參詣の一社たり。大正五

年七月十日郷社に列せられ、同時に神饌幣帛料供進神社に

指定せらる。(玉藻集 三代物語 古名勝圖繪 讚州府志

高松市史 高松藩記)

全讚史に「中野天滿宮 在中野 初邦君節公好申樂一伎

於江都一作伎輩有嫉其能者謀妨其伎一時中間神像入

公夢告之而無妨矣於是公歸國之後營祠於中野以遷

中間神影而崇信之所言大天神是也鶴林寺主其祭小

西千本爲祝司」

菅神鑑水畫像記に「仁和四年春菅公以朝議大夫來守是

(二) 郷社 中野天滿神社

高松市天神前

祭神 菅原道真公

由緒 創祀の年月詳ならず。初め中ノ村(現今の中野町稻

荷神社鎮座地)に鎮座ありて中野天神と稱せられ、京都北

野天滿宮より勸請せりと云ふ。一に大天神と稱せらる。生

駒一正現今の地に遷座せりと云ひ、元祿年間松平頼常現

地に遷し社殿を造營せりと云ふ。現鎮座地は雜賀氏の城

跡なりと。松平頼重厚く尊崇し天和年中祭田十石を寄進

し、又菅公水鑑神影を奉納せり。水鑑神影は菅公筑紫へ左

遷の砌葛西郷牛が鼻に御假泊ありし時馳せ参じたる泰久利

に賜ふ所の物とも、平賀の漁人某に賜ひしものとも云ふ。

初め香西左近將監資村の勝賀城に奉齋せられ、次で資村の

邦葛西郷有平賀某者家貧以取魚爲業也世以孝行聞於國菅公嘉焉賞之以粟國風爲之一變在事四年而去延喜元年遇讒而謫千筑舟行過讚戕風起惡洪濤連山於是泊於葛西郷牛鼻浦三日矣舊臣平雅俱泰久利及龍燈院空澄聞之懼弗及乘遽而至吏嚴不得近也三子者涕泣固請曰願私一見而相去別也乃許之漁人平賀亦遙望而拜之管公使人問之嚮孝子也乃召見之漁人稽首而言曰臣狃西海事願助舟人告其路固請從之吏弗許迺伏地號咷不絕聲管公亦感泣默然良久迺自執筆以臨船鑿海水而寫其真掩涕以賜曰不得見我見之如見我焉所謂水鑑神影是也賜秦子亦如之謂之綱敷天神後香西左近將監資村承久之亂有功以鎌倉之命補香川守居勝賀城漁人之後曰平賀權平仕香西氏遂以神影爲獻資村大喜立神祠乎城中所謂天神郭是也資村有兄曰藤太夫資幸爲福家城主其子福家三郎資俊娶香西氏女資俊素崇信管神欲獲此像也久矣其妻爲之數請於其父既得之享祀甚敬福家氏帥師於隣國戰未畢矣適城中火起室人使人馳告於軍資俊愕然投桴曰傷神乎不問他使者曰火延神廟及其表楮而神影儼然獨存資俊聳然嘆異大喜曰神影既完器用財賄糞

例祭日 七月二十五日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神樂殿 神庫 神門 社務所 (目下社殿改築中)

寶物 鑿水畫像記 菅公像外六十九點

境内坪數 二千二百八十四坪七合三勺

氏子区域及戸數 天神前 南龜井町 中新町 餌差町 田町 四番丁より十番丁に至る 千八百五十戸

境内神社 筆神社 (菅原道真公) 口碑によれば生駒氏築城の當時此の處郷東川筋の大淵なりしにこの淵を埋めむとして占によつて一字一石の法華經を埋め其の上に板に天神の御影を寫して置き漸く埋め終へ其の上に小祠を建てしものと云ふ。(高松市史)

琴平神社 (大物主命 崇徳天皇 宇迦之御魂神 東照大神 合野見宿禰命 豊受姫命) 大正三年境内神社野見神社、稻荷神社を合祀す。

松尾神社 (大山咋神) 京都松尾神社より迎へしものにして釀造の神なりと云ふ。(古今名勝圖繪)

(三) 村 槻 本 神 社 高松市藤塚町

祭神 高御結神 天御中主神 神御結神
由緒 創建年代詳ならず。或は孝安天皇御宇の鎮座とも云ふ。符宣抄に『太政官符神祇官正六位上槻本地祇坐讚岐

土耳我何愛焉及至自師承命匠裝潢之焦迹猶存焉廼謀於群臣曰置之於城中恐漬之不遷諸外寬地城下有寺焉曰來迎院州之巨利也爽塏最宜於立祠於是大興作使其僧主祭祀給以田園數頃矣其後干戈相尋福家氏既亡寺亦廢於火無力於興復築草堂于實相坊墟僅覆神影無朝夕之奉至於殆廢後有僧忍法師西讚人也住此有年矣一旦奉神影歸其口於故丘輒益潤矣於是又來僑居于高松愛行院傍借鐘度於彼寺以爲食以神影爲質久之不能償遂爲愛行院物也增忍愈憤以勤苦得衣食所得毫末其苦無量積兩累復來迎院於高松更曰行德院有僧海室者自愛行院移轉於弘憲寺神影亦奉而藏于弘憲寺州舊有菅神廟在城之西南曰中村天神英公欲獲此像安之也久矣弘憲寺有任迺獻諸公公大喜賜有任穀五十斛既而自加手焉題其背以數字安諸此神廟矣至節公愈益崇敬改舊貫大之講學習射乎其側猶有志未果也惜哉蓋州之文化菅神之餘澤而節公之遺風也及惠公給中間郷田數頃供祭祀共入一百石……元文三戊午重陽日梅松山鶴林寺主勅傳法阿闍梨權大僧都法眼龍田記

國今奉授正五位下延喜二十年二月十五日下午」とあるは

當社なりと言へり。中古森本大明神と稱せられ、文久四年

の神祇官よりの朱印狀に正一位森本大明神とあり。古くは

笠原郷の總鎮守たりしも、細川頼之石清尾八幡神社を再興

して氏神とせしより當社は自然衰微の運命をたどれり。

別當行泉寺の記録によれば、讚岐二十四社の隨一にて庄内

の鎮守たりしが頼之石清尾八幡宮中興以來衰微して東濱村

瓦焼(瓦町)の南に小社として残りしを寛文七年御檢地の節

往古より御除地の旨申立上ノ村森本免に替地を被下享保年

中失火の爲め棟札等焼失云々と記されあり。玉藻集に『往

昔東濱中野兩村之在中間方百間計其城外諸木繁茂シテ其

神社宏麗也ト年歴修造絶テ云々」とあり。鎮座地又數度の

變遷あり且郷東川の洪水に流され漸次衰ふるに至れり。一

説に當社は槻本公の後裔坂田氏の創祀せしものに非ずやと

云ひ、坂田郷は古くは現在よりも餘程北寄なりきと云ふ。

明治十一年十一月二十三日槻本神社と復稱し、明治十三年

十二月十七日村社に列せられ、昭和二年社殿を改築す。

(玉藻集 三代物語 官社考證 古名勝圖繪 讚州府志 香川縣史 高松市史)

例祭日 九月二日三日

特殊神事 尙武祭 陰曆五月五日 生駒氏當國に封ぜらるゝや尙武の氣風を鼓吹し菖蒲祭を行ふ。この風多く西讃に残りしが今衰ふ。昭和八年之を復興す。行事は一般氏子より武者人形を奉納し且菖蒲の花を添へて神事を行ふ。

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 五十一坪
氏子區域及戸數 藤塚町 五百餘戸

(四) 社 華下天滿神社 高松市片原町

祭神 菅原道真公

由緒 延喜三年(紀元一五六三)の創祀と傳へらる。菅公讃岐守となりて笠原莊に着船あり愛行院に宿す。住僧増主學識ありて公に知られ、公在任中再三此の寺に遊ばれしが寛平二年任滿ちて當國を去らるゝに當り自畫像を増主に贈りて別離を惜まる。公筑紫に薨ぜられし報傳はるや里民その徳を慕ひ愛行院の境内に社を建て、公を祀り中黒社と稱す。生駒近規高松築城に際し河水止まらずして工事捗らざりしが、靈夢ありて圓石二十五個を奉納して其の驗を蒙り築城成れり。依て城の鎮守神として社殿を北向に改築し

祭田一石二斗を福光邑に於て寄進せり。爾來城守天神又は北向古天神と稱せらる。松平氏高松藩主となりて又崇敬厚く屢々參拜あり、三代頼豐社殿を造營す。明治維新の際更に境内を擴張し社殿を修築し神域大に整ふ。大正三年村社に列せられ、同年十一月神饌幣帛料供進神社に指定さる。(三代物語 名勝圖會 讚州府志 生駒分限帳 高松市史) 全讚史に『野方天滿宮 在片側坊 菅神爲此國刺史香西平賀有漁人事親至孝神聞之與穀以得孝養後延喜元年讒譎於筑紫船遇風濤泊香西牛鼻洲三日矣漁人乃至請謁吏嚴不聽之漁人乃伏地號泣神聞之即鑿海水寫其影而賜之綱敷眞影也漁人之裔仕于香西氏以神影獻之香西氏大喜立祠干城中奉之謂之天神郭城中嘗災延及祠其裝悉焚唯影之存即命匠裝之後傳福家氏福家氏建寺奉之曰來迎院後移干府城今之愛行院是也所言小天神也神領一石二斗生駒侯捨及 昭代神影烟墨殆見矣 節公寫其影以副之今所拜多是也』 高松藩士西川藤左衛門久邦靈夢の事、江戸の大賈松川屋五郎左衛門靈驗を蒙りしこと等三代物語、名勝圖會に詳なり。又元祿十年宮村經弼の中黒菅神廟記あり、讚州府志に載せたり。

例祭日 九月二十四日二十五日

特殊神事 寶船授與祭 節分當日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 寶藏 社務所 神門

寶物 緣起書 菅公綱敷像外五十餘點

境内坪數 三百四十五坪四合七勺

氏子區域及戸數 片原町 兵庫町 丸龜町 百間町

大工町 桶屋町 野方町 今新町 八百五十戸

境内神社 稻荷神社 (豊受比賣神 天照大神 大國主神 合宇迦之御靈神 稚産靈神) 明治四十一年境内神社

琴平神社 (大物主神 崇德天皇 大山咋命 建雷槌神 經津主神 事代主神)

淡島神社 (少彦名命)

(五) 蜂 穴 神社 高松市西濱新町摺鉢谷

祭神 大山祇命

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。由緒詳ならず。傳ふる所によれば貞治元年細川頼之伊豫の河野氏と戦ひし時神夢あり、戦勝凱旋の後石清尾山麓に伊豫三島明神を勸

高松市



社 神 穴 蜂



請して奉齋せりと云ふ。其の後社殿火災に罹り明治四十三年改築せり。

祭日 九月三日四日 主なる建造物 本殿 拜殿 社務所

境内坪數 二十四坪 崇敬者人員 約千五百人

(六) 琴 平 神社 高松市天神前

祭神 大物主神 崇德天皇

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。由緒詳ならず。

三五

古くは金比羅大権現と稱したり。明治三十四年六月現鎮座地に移轉す。(同町内移轉)

祭日 十月十日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神饌殿 社務所
境内坪數 六十一坪九合 崇敬者人員 約五百人

(七) 道祖神社 高松市宮脇町馬場

祭神 猿田彦命

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。寛文六年十一月十日松平頼重の創祀にして、松平家江戸道中の守護神として崇敬せられ毎歲一回の參詣あり。松平氏四社參詣の一社たり。明治三十三年社殿を改築す。

祭日 七月十一日十二日 主なる建造物 本殿 拜殿

社務所 境内坪數 七十八坪 崇敬者人員 約一千人

(八) 御先神社 高松市中野町

祭神 猿田彦命 天宇受賣命

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。創祀詳ならずと雖

も、往古より紫雲山の鎮守神として奉齋せられたりと傳ふ。松平頼重高松城鎮護の神として崇敬し代々の藩主參拜又は代拜差遣の事ありしも、鎮座地參拜に不便なるを以て御分靈を石清尾八幡神社の御旅所に奉齋し、爾來當社を古宮と云ふに至れりと。(高松市史)

祭日 七月十一日十二日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 十三坪 崇敬者人員 約一千人

(九) 御先神社 高松市中新町

祭神 猿田彦命 天鈿女命

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。創祀詳ならず。町内に塗師屋多くこれ等の人等によつて奉祀せられしものならむと云ふ。

祭日 六月十二日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 四十二坪 崇敬者人員 約千五百人

(一〇) 荒神社 高松市中野町

祭神 稚産靈神

境内坪數 百七十五坪 崇敬者人員 約四千人

(一一) 藤塚神社 高松市藤塚町本町

祭神 稚産靈神(一に曰宇迦御魂神)

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。創祀詳ならず。傳ふる所によれば生駒氏時代の創立にして徳善寺の南隣藤塚と稱する所に奉齋せられしを、明治三年頃現地に遷座せりと云ふ。藤塚町の名はこれによつて起れり。(三代物語高松市史)

祭日 六月十三日十四日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 二十二坪 崇敬者人員 約五百人

(一二) 神木神社 高松市栗林町

祭神 稚産靈神 豊受姫神

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。寛政二年の古地圖に『若宮』とあり。

祭日 九月六日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 九十五坪 崇敬者人員 約千五百人

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。由緒詳ならず。寛政二年の古地圖には中野町澁柿地蔵の東裏に鎮座ありしこと見ゆ。明治三年頃現今の地(中野町稻荷神社境内)に遷座せり。

祭日 春秋社日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 三坪 崇敬者人員 約四千人

(一三) 稻荷神社 高松市中野町

祭神 宇迦御魂神 伊邪那美神 邇邇藝命

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。寛保三年七月二十六日高松藩主松平頼恭の創建にして石清尾八幡神社境内に鎮座せしが、延享元年十二月二十六日中野天満神社舊鎮座地に遷座し藩主より社領十五石を寄進せらる。代々藩主の崇敬厚く屢參拜あり。三代物語に『今公寛保三年始立三之八幡宮側延享元年十二月遷今地社領四石七合置社人及巫』、高松藩記に『稻荷社十五石』とあり。昭和九年社殿を改築す。

祭日 五月十五日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 寶庫 社務所

(一四) 楠川神社 高松市楠上町

祭神 稚産靈神

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。創建不詳。古老の傳ふる所は香川郡一宮村より奉遷せりと。大正十五年社殿を改築す。

大正十二年同町森荒神社(稚産靈神)を合祀す。

祭日 十月三日四日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
境内坪數 二十一坪 崇敬者人員 約二百五十人

(一五) 三社神社 高松市花宮町

祭神 天照大神 天兒屋根命 應神天皇

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。傳ふる所によれば昔此の地より東一帯は香西氏の部將唐人彈正の所領にして、父祖數代上村城(琴平電車栗林停留所南西約一町)に住し唐渡氏(彈正姓を唐渡と云ふ)の鎮守神として天兒屋根命、應神天皇の二神を奉齋せしが、明治十三年七月現今の地に奉齋せられありし天照大御神の社殿に合祀せられしものなりと云ふ。

祭日 九月二十七日二十八日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 三十五坪 崇敬者人員 約一千人

(一六) 秋葉神社 高松市上之町

祭神 火産靈神 合祀祭神 稚産靈神

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。創祀詳ならず。遠州秋葉權現より勸請せしものと傳ふ。明治三十三年社殿を改築す。大正二年境内神社戸祭神社を合祀す。戸祭神社は古くは戸祭出水の地に鎮座ありて高松藩士戸祭氏の鎮守神たりしと。

祭日 陰曆一月一日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 五坪 崇敬者人員 約三百五十人

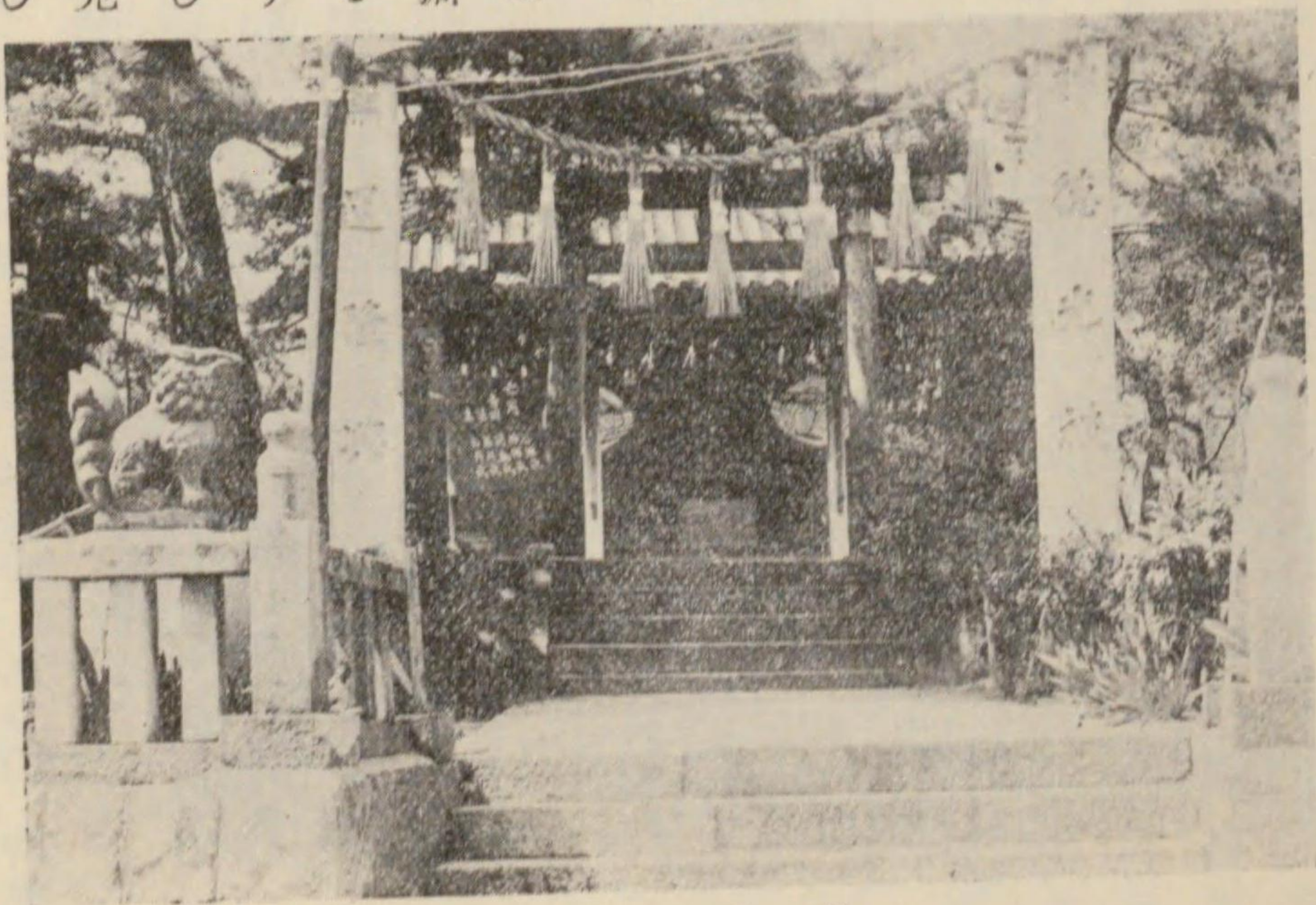
(一七) 藤ノ木神社 高松市花宮町

祭神 稚産靈神

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。創祀不詳。古くは香川郡上ノ村字深田(楠上町)に鎮座せしが、明治十三年七月二十三日現地に遷座の上社殿を改築す。

命 菅原道真公

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。當社はもと松平家の私社たり



日和山神社

(一八) 諏訪神社 高松市栗林町

祭神 建御名方神 大物主神 崇徳天皇

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。享保十四年(紀元二三八九)の創祀にして社記木札に『奉勸請諏訪大明神政頼明神 根津明神 武運長久祈處 享保十四己酉四月始勸請於上邑妙見安置之境內 高橋與左衛門 寶曆九己卯夏六月移于今之地 鷹匠中』とあり。更に明治十二年三月に至り三十間ばかり北方の現地に遷座、大正十五年五月改築あり。神像の臺裏に武田玄守神と刻しありて、即ち信州諏訪より勸請せられしものなりと云ふ。

祭日 七月十七日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 四十坪 崇敬者人員 約五百人

(一九) 日和山神社 高松市濱ノ丁堀川 (御船藏)

祭神 表筒男命 底筒男命 中筒男命 大物主命 大山咋

ふ。(讃州府志 古名勝圖繪)

祭日 七月九日十日
主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 神饌所 神庫 社務所
境内坪數 四百四十七坪 崇敬者人員 約六千九百人

(二〇) 若一王子神社

高松市西通町

祭神 菟道稚郎子命

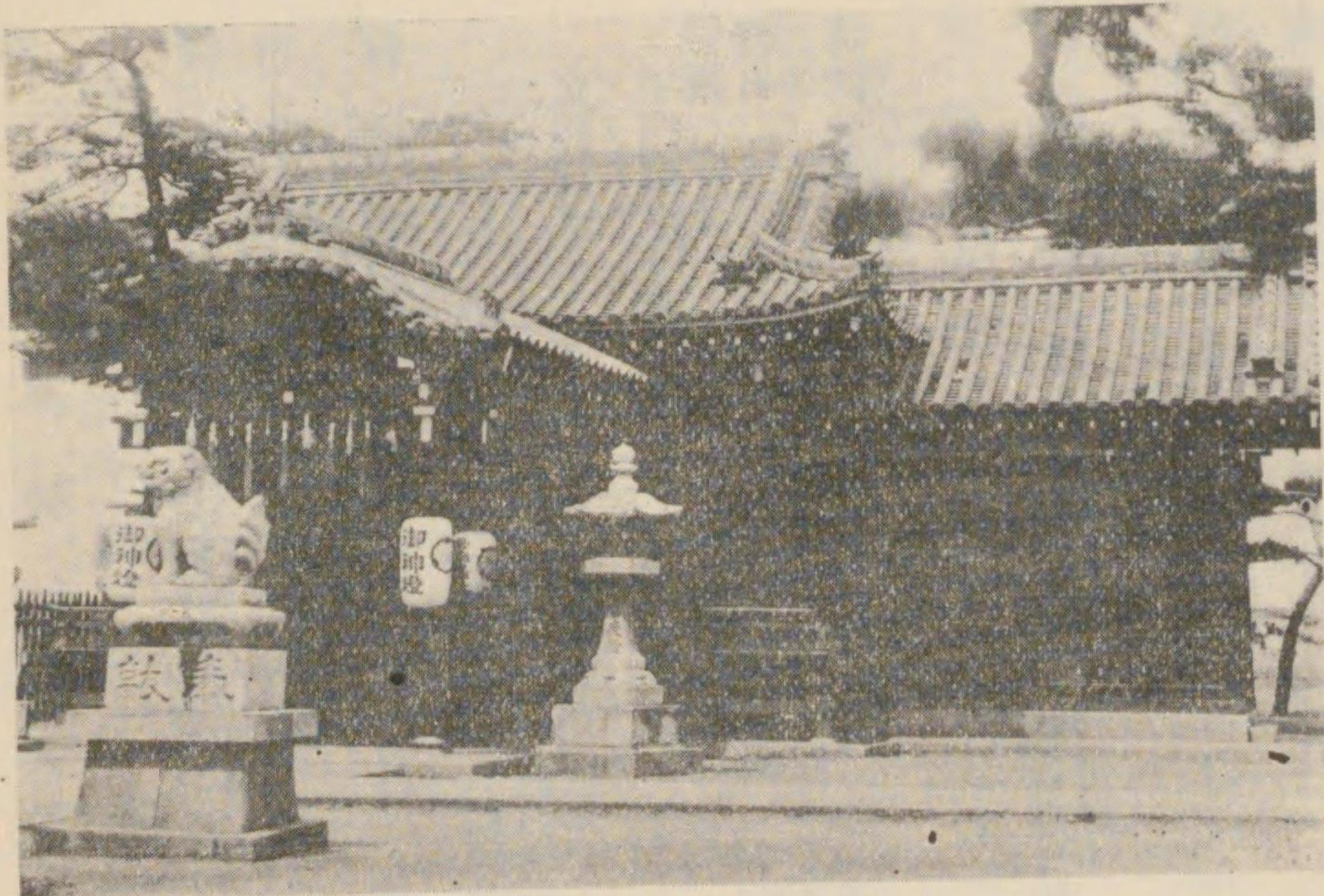
由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。 建治元年(紀元一九三五)新羅三郎義光五男岡田冠者義親より九代の裔岡田丹後守重宗、現西通町なる陣中に紀州熊野の若一王子社より勸請奉齋せし所と云ふ。 文安二年岡田丹後守清家再興、天文元年同清忠再興、元龜元年同清高再興、慶長元年同宗忠再興すと云ふ。 濱ノ丁蓮華寺別當たり。 岡田氏は當地笠原郷の地頭たりし人なり。 傳説に當社廣前に男女の童子集り遊べば此の神其の中に交る。 童子ら互に顔を見合せば必ず一人知らぬ童子交れり。 然れども遂にその面貌を記憶する者なしと。(名勝圖會 香川縣史 全讃史)

玉藻集に『皇子權現 西濱ノ邑在廣野 天正中神社攝ニ市中 中興岡田丹後守源清高再興棟札アリ』

讃州府志に『岡田丹後源清高 居香川郡阪田郷 弘安中建ニ』

る者多し。 境内に柳樹ありて有名なりしが今はその枯株のみ存す。(三代物語 玉藻集 名勝圖會 全讃史 讃州府志)

讃州府志に『岡田丹後源清高 居香川郡阪田郷 弘安中



愛宕神社

建 笠原西
濱愛宕祠
祭日 七月二十三日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 御饌所 神門
寶庫 社務所
寶物 木像、扁額其他
境内坪數 千三百九十四坪 三合四勺

笠原西濱愛宕祠修復王子權現
祭日 九月十六日十七日 特殊神事 庭燎祭 冬至
主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 神輿殿 南神門 西神門 神饌殿 神馬堂 神庫 社務所
寶物 鎮座記 境内坪數 三百六十九坪四合三勺
崇敬者人員 約五千人
境内神社 琴平神社(大物主命 崇徳天皇)
多賀神社(伊邪那岐命)

(二一) 愛宕神社

高松市西濱町

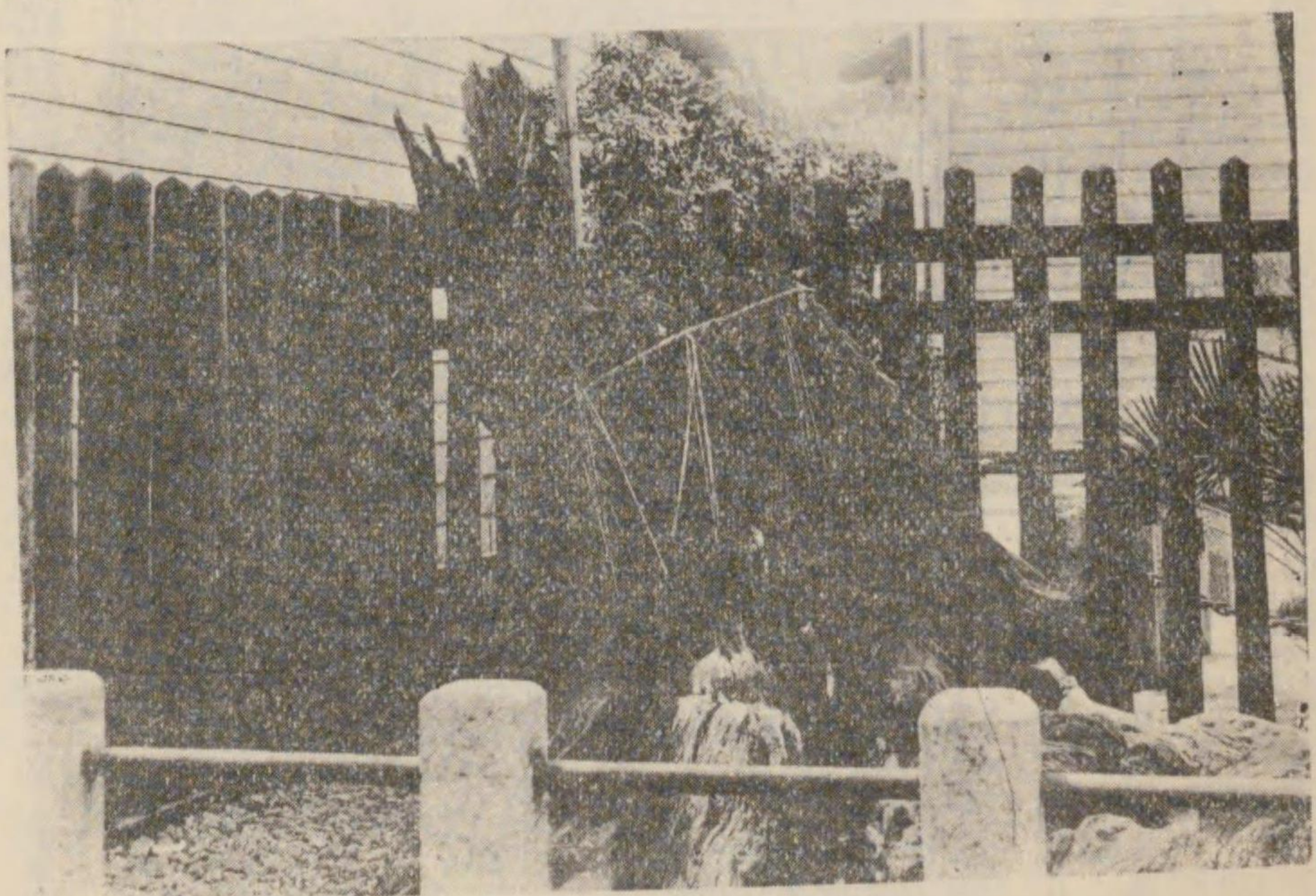
祭神 火産靈神(一に曰 火産靈神 伊邪那美神)

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。 建治元年(紀元一九三五)五月二十四日笠原郷西濱城主岡田丹後守清高の創建にして、弓箭神として陣中に奉齋せしが、後絲熱濱松林中の景勝地に鎮座せる住吉社の傍に遷座し、近郷住民鎮火尙武の神として崇敬せり。 文安年間岡田丹後守宗高神域を擴張し社殿を修築す。 元龜元年社殿の改築あり。 國守生駒家當社を祈願所とし寛永十六年社領百二十石を寄進せりと云ふ。 松平頼重亦厚く崇敬し藩中の武士燈籠等を奉納す

崇敬者人員 約一萬一千三百人

境内神社 住吉神社

(表筒男命 中筒男命 底筒男命 合大物主 命 崇徳 天皇 素 盞之男 命)
創祀不詳 市街の西北にあり 潮留の宮として藩主崇敬厚かりきと云ふ。 昭和四年境内神社八坂神社、琴平神社を合祀す。



愛宕神社の枯木

(二三) 西濱神社 高松市西濱町川口

祭神 大物主命 事代主命 (一に曰 大地主命 天照大神 事代主神 水波能賣神)

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。寛文元年(紀元二二二二)の創祀といふ。玉藻集、三代物語等に蛭子宮、蛭兒社西濱にありと見え、西濱蛭子と稱せらる。明治四十三年西濱本町通南側より現地に遷座せり。

祭日 九月九日十日 主なる建造物 本殿 拜殿 社務所
境内敷坪 十五坪 崇敬者人員 約四千五百人

(二三) 琴平神社 高松市西濱町雜魚場(大濱)

祭神 大物主命 崇徳天皇
由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社

祭日 九月九日十日
主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 社務所
境内坪敷 二十九坪六合五勺
崇敬者人員 約三千二百五十人

(二四) 神明神社 高松市西濱町伊勢宿

祭神 天照大神 水波能賣命
由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社

祭日 七月六日七日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪敷 四坪 崇敬者人員 約七百五十人

(二五) 藤森神社 高松市外磨屋町今井戸

祭神 興津彦命 興津姫命

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。創祀詳ならず。往古は境内に藤蔓茂れるを以て藤森の稱あり。又境内に井水ありて今井戸の名あり。當社所藏の村上金右衛門家記に『生駒壹岐守様御代之節宇多津村より高松外磨屋町へ罷越住居仕候……前記居宅裏に鎮守御座候不思議に人々信仰致候に付西手へ突出し……追々繁昌相成申候』とあり。寶延四年(寛延)五月改築を行ひ、明治二十年再建せらる。(名勝圖會 三代物語 高松市史)
玉藻集に『藤森荒神 啓迪不知天正年中迄ハ神社庄内ノ野 外田畑ノ中ニアリ今ハ市店磨屋町ニ攝ス』

境内坪敷 十五坪 崇敬者人員 約五百人

(二八) 惠美須神社 高松市北濱町

祭神 事代主命 大己貴命 (一に曰 天照大神)

(二六) 石槌神社 高松市内町三ノ門

祭神 石土比古命 大物主命
由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。創祀不詳。伊豫國石槌神社より勸請せりと云ふ。

祭日 七月一日 主なる建造物 本殿 拜殿 境内
坪敷 三十坪四合八勺 崇敬者人員 約四百二十五人

(二七) 琴平神社 高松市西濱新町新開

祭神 大物主命 崇徳天皇
由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。由緒詳ならず。現社地は豫讃線鐵道敷設の當時移轉せしものにして、それ以前は今の線路の北部に鎮座ありたり。
祭日 十月九日十日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿



社神須美惠

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。仁和三年國守菅原道眞の創祀と傳ふ。天明六年北濱材木町年寄倉屋敷彌三郎調べの當社御由緒記(細川賴春の臣秋山土佐守泰忠の記録、一柳丹後守直重の寺社奉行所記録、御由緒記、年中行

事御用帳による)によれば、仁和三年二月菅原道真篁原庄石清尾山上に、瀬戸内海群島及び篁原庄の守護神として奉齋、天照大神、事代主神を祀り、細川頼春及頼之當國の大守となりて崇敬厚かりしが、長曾我部氏の兵火に罹り僅にその祠のみ残りしに、生駒近規高松築城の爲黒田如水と宮脇山に登りてその神祠を見、鬼門の鎮守として城の東北隅に遷座せり。寛永年中暴風ありて海中に顛落せしを、生駒高俊恐懼直ちに漁夫に命じて探索し再び奉齋せり、爾來内町(玉藻城外濠内)中の氏神として崇敬厚く、寛永十九年松平頼重大守となるに及び大にその祭事を興し、松平頼常又二回に互りて社地六百坪を寄進せりと云ふ。(名勝圖會)

祭日 陰曆六月十日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 社務所 御手洗舎
境内坪數 三百九十五坪八勺 崇敬者人員 約七千五百人
境内神社 住吉神社(少童命) 松尾神 猿田彦命 金刀比羅神)

(二九) 東濱神社 高松市東濱町

祭神 事代主命 大己貴命

體之なり。又夫人よりは辯才天像を奉納せしが、此像は明治初年撤せられたり。享和初年難波助六等丸の内の土を運びて海を埋め、埋立地の淨地をとして社殿を建て遷座し奉れり。棟札に『奉再建議岐香川郡篁原庄東濱惠美須御社一

宇 享和三癸亥年二月二十日 相殿事代主命大己貴命一杵島姫命云々』とあり。當社は國主生駒家及び松平家一門の崇敬厚く、松平頼起家傳の木造獅子一對の寄進あり。後松平頼恕焼物獅子を以て之に代ふ。安政元年十一月五日大震ありて正殿の外悉く倒壊、庄屋木村半三郎、灘波仁左衛門等中殿、拜殿、下拜殿を改築す。明治初年東濱神社と改稱せり。(名勝圖會 高松市史)

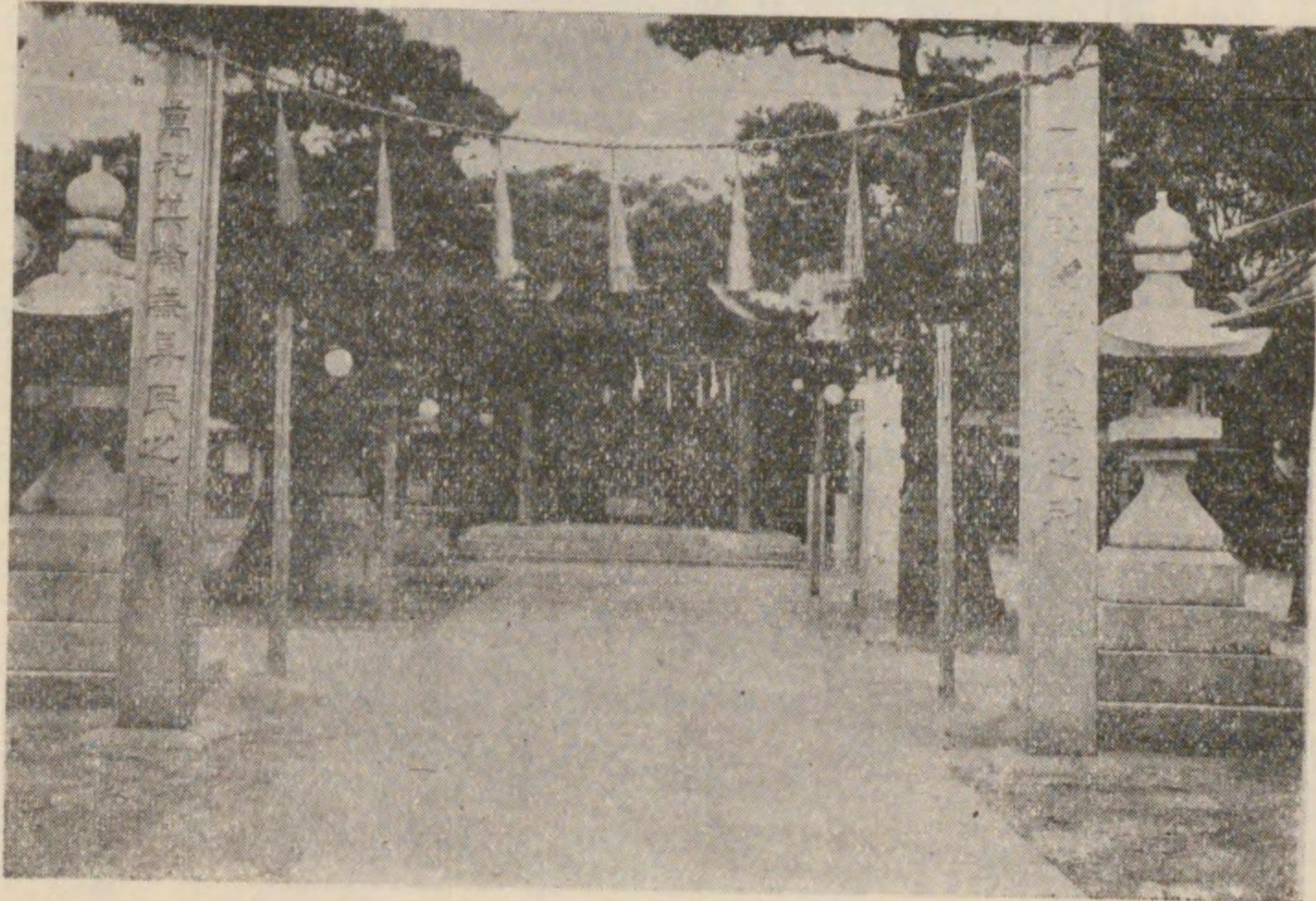
祭日 陰曆六月九日十日 特殊神事 十日戎 陰曆正月

九日十日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 下拜殿 社務所 御手洗
境内坪數 四百四十八坪六合二勺
崇敬者人員 約四千五百人

境内神社 住吉神社(少童命) 金刀比羅神社(大物主命) 崇徳天皇 天兒屋根命 猿田彦命 廣田神社(天照大御神荒魂) 和靈神社(山家公頼命靈)

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。鎮座の年曆詳ならず。古くは篁原庄北の海濱にありて浦の鎮守たりしが、生駒近規高松城を築くに當り東濱の地(現今の井口町法輪寺の所)に遷座し、當町東濱の南方(今の新搦屋町)入海の中の小丘にありし辯才天を合祀せり。寛文六年正月東濱に大火ありて類焼し、天和二年庄屋木村又三郎等氏子と共に再興す。此の時松平頼重自作の木像二軀を奉納す。現今の御神



東濱神社

(三〇) 藤木稻荷神社 高松市東濱町新地

祭神 稚産靈神 (二に曰 稚産靈神 倉稻魂神)

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。創祀詳ならず。昭和四年三月楠上町七百八番地より移轉し、從來の社號藤木神社を藤木稻荷神社と改稱す。一説に、明治十三年の創祀にして八重垣神社と稱せしが、昭和四年楠上町楠川神社境内鎮座の倉稻魂神を遷座配祀し、以て社號を改稱せりといふ。

祭日 八月二日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 三十八坪二合五勺 崇敬者人員 約三百十五人

(三一) 鹽竈神社 高松市福岡町下福岡

祭神 大穴牟遲命 少毘古名命 綿津見命 搦椎命

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。元治元年(紀元二五二四)の創祀と傳へらる。
祭日 十月二十一日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
境内坪數 五十四坪 崇敬者人員 約七百五十人

(三三) 鹽竈神社 高松市福岡町沖松島

祭神 鹽椎神 稚産靈神

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社 創祀詳ならずと雖も、生駒高俊の頃春日新田・福岡・木太の埋立あり、松平氏第五代の頃に至り鹽田業次第に盛大となり業者の來住する者多く、陸前より鹽竈神を迎へて奉祀せりと云ふ。

祭日 十月二十一日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 境内坪數 百三十二坪 崇敬者人員 約千二百人

(三三) 松島神社 高松市松島町

祭神 稚産靈神 市寸島姫命

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。創祀詳ならず。生駒氏時代の鎮座と傳ふ。松平頼重及同夫人の崇敬厚かりしといふ。明治四十三年現社地より南西三町許りの處より現社地に移轉せり。

祭日 七月二十七日二十八日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 社務所 寶物 鎌倉時代の念持佛二軀

(三五) 荒神社 高松市花園町

祭神 火産靈神 稚産靈神

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。創祀詳ならず。一に生駒神社と稱せられ、或は生駒高俊の創祀と云ふ。當地は生駒家の別墅にして御花畑なりしが、後松平頼重こゝに靜觀莊を建つといふ。

祭日 八月二十七日二十八日 主なる建造物 本殿 拜殿 社務所 境内坪數 四十六坪 崇敬者人員 約四千人

(三六) 多賀神社 高松市花園町

祭神 伊邪那岐命

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。社記によれば仙石權兵衛秀久當國に在りし頃創祀すと云ひ、香川縣史は秀久の勸請なりといふ。社記に『昔千石氏領之比江州多賀社大順坊旅宿之節奉御鎮座候御神體也依之使僧代々取持之神旅宿之念持佛に無紛候中興再建之節引受人と相談示萬一後世講中と不和に相成候得ば社法之通本坊へ可持歸答を以再興いたし候左有時は故障申人之子々孫々迄重き可蒙神罰候仍

境内坪數 三百七十八坪 崇敬者人員 約二千五百人 境内神社 琴平神社(大物主神 崇徳天皇)

(三四) 向良神社 高松市松島町

祭神 向山周慶命

由緒 明治十八年創祀す。祭神向山周慶命は大内郡湊村(大川郡白鳥村)の人、讃岐に於ける砂糖製法を創始せし人にして文政二年歿す。周慶始め醫を池田玄丈に學ぶ、時に高松藩玄丈に命じて製糖の法を探らしむ。十數年得る能はず。周慶京師に遊學し薩州醫生某を救ふことあり。某遂に國禁を犯して砂糖の製法を周慶に傳ふ。藩周慶を召して砂糖を製せしむ。時に薩人良助なる者あり、周慶に恩を蒙ることありて密に蔗苗數本を携へ來り白鳥村に植う。茲に於て讃岐の製糖大いに興れり。國民糖神として之を崇む。明治十八年五月十九日官許を得て周慶を祀り、同十九年三月社殿落成す。一説には薩人良助をも配祀すといへり。

祭日 六月十四日十五日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 廻廊 社務所 境内坪數 三百十八坪 崇敬者人員 約三千五百人

而別誓紙爲替取記畢』とあり。古くは現社地より南一町許りの所にありしが、火災に罹り遷座せらる。

祭日 七月二十三日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 神庫 神門 社務所 境内坪數 二百十六坪一合二勺 崇敬者人員 約四千人

(三七) 八坂神社 高松市鹽上町出晴

祭神 素戔鳴尊

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。創祀詳ならず。傳ふる所によれば、往昔阿野郡南條村瀧宮の牛頭天王社(綾歌郡瀧宮村村瀧宮神社)より勸請し、祈禱札を配付せしといふ。約六十年以前までは社殿東向なりしを、其の後北向に變更せり。名勝圖繪に『祇園牛頭天皇社 鹽や町にあり、祭禮六月七日より十四日迄』と見ゆ。

祭日 七月二十三日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 境内坪數 二百七十六坪 崇敬者人員 約二千五百人 境内神社 琴平神社(大物主命 崇徳天皇 綿津見命 菅原道真公)

(三八) 金刀比羅神社

高松市新材木町

祭神 大物主命 崇徳天皇

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。創祀詳ならず。古く當所の者等金刀比羅宮の神璽を迎へて奉祀せしものと傳ふ。

祭日 十月九日十日

主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 三十七坪二合三勺

崇敬者人員 約七十五人

(三九) 水神社

高松市南新町

祭神 水波能賣神

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。正保元年(紀元二

三〇四)四月高松藩祖松平頼重の奉祀する所たり。頼重高松城下住民の飲料水乏しきを憂へ、水源七ヶ處を選び樋管を埋め水道を作る。當樋井戸は其の大なるものにして東西九間、南北二倍、土人呼んで新井戸と稱し、主として市内東北部に配水せり。當社は水源の鎮守として頼重の祭りしものにして、爾來三百年其の恩澤に浴する者二十街なりといふ。(龜井靈泉碑文 名勝圖會)

祭日 七月六日七日 特殊神事 水源掘鑿記念祭 五月

六日七日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神庫 社務所 境内坪數 五十一坪 崇敬者人員 約千五百人

(四〇) 戸隱神社

高松市古馬場町

祭神 手力雄命

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。創祀詳ならず。天正年間には玉藻城内櫻馬場附近にありて九頭龍權現と稱せられしが、松平頼重讃岐守となるに及び、信州戸隱神社の分靈を合祀し、爾來松平家の崇敬厚かりき。天明年間城内大修理に際し、當時當所に住める生駒家の舊臣某之を拜領し、町内の鎮守神として奉齋せりと傳へらる。

祭日 六月七日

主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 九坪二合八勺 崇敬者人員 約七百八十五人

境内神社 木里神社(久々能智神 鹿屋野比賣神)

(四一) 水神社

高松市西瓦町

祭神 水波能賣神

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。寛永年間生駒高俊

の奉齋せし所と傳ふ。天正十五年生駒親正(はら原庄なる八輪島(笑原の古名)に築城の時、香東川が城下の中央を流れ居たる爲め屢水害ありしを以て、これを坂田郷より分流せしめたり。然るに四代高俊に至るも猶水害を免るゝ能はずりしかば、城下の水流を絶ちて弦打村に流下せり。茲に於て水害は全く絶えしも飲料水の缺乏を來すに至れり。依つて此地に井戸を穿ち栗林公園の泉水と横井の流水を併せて溜水となして附近に給水をなす(松平頼重に至り樋管を)。此の時井の傍に守護神として當社を奉祀せしものにして、土人此の井を呼んで大井戸と稱せり。(讃州府志)

祭日 六月七日 主なる建造物 本殿 拜殿 社務所

境内坪數 八十二坪二合二勺

崇敬者人員 約千七百五十人

(四二) 稻荷神社

高松市新瓦町

祭神 保食命 大己貴命 猿田彦命

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。創祀詳ならず。元新瓦町小學校内に鎮座ありしを、明治四十二年二月現在の

地に移轉せり。

祭日 五月二十五日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 社務所

境内坪數 二十四坪五合七勺 崇敬者人員 約二百五十人

(四三) 琴平神社

高松市田町

祭神 大物主命 崇徳天皇

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。創祀詳ならず。小田裏金比羅大權現と稱へられしを後琴平神社と改稱し、明治四十三年十二月田町百四十番地より現在の地に移轉せり。

祭日 六月十日 特殊神事 花會祭 四月十日 櫻花を

奉り、祭主以下櫻花を挿して神事に奉仕す。

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 社務所 神庫

境内坪數 百五十四坪二合二勺 崇敬者人員 約二千人

(四四) 琴平神社

高松市東田町

祭神 大内之命(一に曰大物主命 大内之命は蓋大己貴命か) 崇徳天皇

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。嘉永五年(紀元二

五〇八) 十月一日高松藩士三村嘉次郎の創祀といふ。

祭日 六月五日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 十坪 崇敬者人員 約七百人

(四五) 琴平神社 高松市鹽上町

祭神 大物主命 崇徳天皇

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社。社地は生駒氏時代に於ける刑場なりしが後千日庵を建て念佛修行所とす。松平頼重に至り、延寶元年西濱新町に西方寺を建立して常念佛を行はしめ、千日庵には千日社を建てて大物主神、崇徳

天皇を奉齋せり。後千日社を改めて琴平神社と稱す。

祭日 陰曆七月十日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 六坪 崇敬者人員 約七百五十人

(四六) 荒神社 高松市鹽上町

祭神 稚産靈神

由緒 縣社石清尾八幡神社境外末社

主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 十九坪五合

崇敬者人員 約五十人

第二章 丸龜

市

第一節 丸龜市概説

丸龜市は西讃の一都會で東は綾歌郡土器村、南は仲多度郡南村、西は同郡豊原村に接し、北は瀬戸内海に面してゐる。東部土居の地は古く鶴足郡津野郷に屬し、其の他は那珂郡梓

原郷及び金倉郷に屬してゐた。慶長七年(或は慶長二年とも云ふ)生駒一正が西讃鎮撫の爲め龜山に築城の以前は海濱の一寒村に過ぎなかつたが、築城以後漸次發達し、生駒氏没落の後寛永十八年山崎甲斐守家治西讃を領し、同二十年山崎氏が治府を此處に定めてよりいよいよ發展し、更に萬治元年京

第二節 丸龜市内神社

(一) 社 天満天神社 丸龜市鹽屋字本村

祭神 菅原道真公

合祀祭神 保食神 綿津海神 奥津彦神 奥津姫神 武甕槌命 經津主命 天都兒屋根命 萬幡姫命

由緒 創祀詳ならず。鹽屋の産土神にして、神社考に『天満宮村社在鹽屋村』とあり。西讃府志に『天満宮 祭

祀九月廿五日 社地東西十九間南北三十二間 社僧福壽院 祠官秋山上總介』と見ゆ。道隆寺温故記に『明曆二丙申年

秋八月吉日 鹽屋濱天神遷宮 導師瓊令三執行一畢』とあり

て、社傳にも明曆二年八月再營すといへり。寛政十年九月社殿を改築せしが、明治三十三年四月八日炎上、同三十六

年假本殿を營み、其の他の建物を新築、大正七年本殿を建築す。昭和九年五月二日神饌幣帛料供進神社に指定せら

る。(西讃府志 仲多度郡史)

大正二年^{字本}村 保食神社、^{字新}鹽屋 鹽竈神社を合祀、大正三年^{字天}春日神社を合祀す。

例祭日 十月十五日十六日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神輿庫

極高和が山崎氏の後を襲いでより明治初年に至るまで西讃の治府として、將又西讃の良港として殷盛を極めた。

傳ふる所によれば龜山は往古船山又は波越山と稱され、此の地に於て造船並に船舶の修理を爲し國史現在社船山神(三代實錄に『元慶五年十一月十四日戊午授讃岐國正六位上船山神從五位下』)は此の地に鎮座せしものと云はれ、仲多度郡南

村郷社八幡神社は龜山の北に鎮座ありしを、生駒氏築城の節現今の地に遷座せられたもので山北八幡宮と奉稱せられ、船

山神であつたと傳へられ、今も丸龜市の總産土神として崇敬せられてゐる。又津森鎮座の村社天神社は往古加治須天神と

唱へられ、鎮座の森を加治須森と云ひ、三代實錄に『貞觀六年冬十月十五日戊辰授讃岐國正六位上梶州神從五位下』と

あるは此の社であると云ふ。中府の村社會下天満神社は菅原道真公の遺蹟にあり、舊丸龜城下の神社で歴代藩主の崇敬厚

かつた社である。

明治二十三年市町村制實施の際中府・地方・土居・津森の一部を以て丸龜町を置き、同三十二年市制を實施して丸龜市

と稱し、大正六年仲多度郡六郷村(鹽屋・今津・津森・新田

上金倉・下金倉)を合併して今日に至つてゐる。(仲多度郡史 丸龜)

境内坪數 七百五十三坪
氏子區域及戸數 鹽屋 七百戸

(二) 村 八十主神社

丸龜市上金倉字道上

祭 神 大國主大神

合祀祭神 大己貴命 大物主命

由 緒 創建年月詳ならず。古來上金倉一村の産土神にして、全讃史に『八十主大明神在上金倉村二村之所社也蓋以八十萬神爲主矣』。神社考に『八十主大明神村社在二金倉村一所祭大物主命按二神代紀二大物主神及事代主命乃合二八十萬神於天高市一帥以昇二天陳二其誠歎之至二云々名義蓋取二此二』とあり。初め字道下の地に鎮座ありしを、寛文四年九月、道隆寺朝瓊導師となりて現在の地に遷座し、舊地には古宮として小祠を祀れり。西讃府志に『八十主大明神祭神大己貴命 祭祀九月十日、昔池ノ下ニアリシヲ寛文四年九月今ノ地ニ移ス』と見ゆ。明治四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(全讃史 神社考 西讃府志 仲多度郡史)

大正二年^{字道}下 古宮神社・荒魂神社、^{字川}西 荒魂神社を合祀す。

合祀神社古宮神社は八十主神社の舊地に奉齋せし神社にし

神社、^{字大}道上荒神社を合祀、大正四年^{字地}免 荒魂神社を合祀す。

例祭日 十月十四日十五日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 隨神門 神宮遙拜所

境内坪數 千五百九十二坪

氏子區域及戸數 下金倉 二百戸

(四) 村 天 神 社

丸龜市津森字宮浦

祭 神 天穗日命 正哉吾勝々速日天忍穗根命 天津彦根命

活津根命 熊野樟日命 菅原道眞公

合祀祭神 久那斗神 八衢比古神 八衢比賣神 大物主神

素盞鳴尊 猿田彦大神 高竈神 闇竈神 天照皇大

神 埴山比女命 保食神 大己貴命 少彦名命 水

波女命 天兒屋根命

由 緒 創祀の年月詳ならず。世俗津森天神と奉稱す。古くは加治須天神とも稱へられしと云ひ、仲多度郡史に『近年岡崎祇隆、内陣の御靈屋の破損を修繕せんとして其の御扉を開きしに、神體の傍に銅製鳳凰形の金屬あり……其の腹部の識に「保元二年九月七日奉加治須神」とあり』と見え、是を以て三代實録に『貞觀六年冬十月十五日戊辰授二讚

て西讃府志に『古宮祠池ノ下ニアリ八十主社舊趾』と見ゆ。
例祭日 十月十六日十七日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神門 炊舎 琴平宮遙拜所
境内坪數 五百九十七坪九合五勺

氏子區域及戸數 上金倉 三百五十戸

(三) 村 八 幡 神 社

丸龜市下金倉字九重田

祭 神 品陀和氣命

合祀祭神 塞神 大物主命 武内宿禰大臣 事代主命

由 緒 創建詳ならず。道隆寺温故記によれば、延久五年(紀元一七七七)八月道隆寺法印祐善勅を奉じて當社及び山北・三井・葛原・堀江の八幡宮を勸請せりと云ひ、慶長四年八月同寺法印良田遷宮導師となりて修營せりと云ふ。西讃府志には『相傳フ慶長四年遠山甚太夫、阿州榑田村ヨリ此地ニ來リ住リ、因テ此祠ヲ立』と見ゆ。寛永八年、慶安四年兩度の修理あり。

昭和四年六月二十一日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。

(西讃府志 仲多度郡史)

大正二年^{字地}免 塞神社、^{字久}荒魂神社、^{字大}高良神社・惠比須

岐國正六位上梶州神從五位下』とある梶州神は當社なるべしといふ。傳ふる所によれば、古くは今の社地より東北二町餘隔りたる中府村加治須森に鎮座し加治須神と奉稱せられ、仁和三年春菅公封内巡視の折吾が遠祖の神なりとて參拜ありしを以て後人相殿に公を配祀せりといふ。天正九年長曾我部氏の兵火に罹り社殿烏有に歸す。時に神主岡崎祇豐神像を抱き波越山(龜山の古名)西方山腹に假殿を建て祭祀せりと。西讃府志には『相傳フ村内ニ八日市ト云地アリ、天德三年此處ニ堂宇ヲ造立シテ祭りシニ、天文十三年大風ニ破ラレ山地正實田中忠春位實信等岡崎祇親ト相謀リ波越山ニ移シ祭レリ』と見ゆ。慶長七年生駒一正龜山に城を築くに當り、少彦名宮の境内(現社地)を撰び茲に生駒氏自ら社殿を營み同年八月十五日遷座す。現在の本殿は當時の建築なり。後元和三年、寛永十八年、明曆二年、寛文十三年に社殿修築あり、弘化三年現在の幣殿及拜殿を改築す。昭和四年六月二十一日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。

(西讃府志 仲多度郡史 丸龜)

大正二年^{字經}今津田 塞神社、^{字天}荒魂神社・荒神社、^{字浦}荒魂神社を合祀、翌三年津森^{字道}祖神社、^{字菰}貴船神社を合祀、大正四年新田^{字橋}地神社及び境内神社たりし春日神社を合祀す。

例祭日 十月十六日十七日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 隨神門 社番所

境内坪數 九百五十五坪

氏子區域及戸數 津森 今津 二百五十戸

境内神社 少彦名神社 (少彦名命)

昌泰二年(紀元一五五九)の鎮座といふ。古

來松上宮と稱せられ此地の地主神にして、慶長七年本社天神社此處に遷座以來其の境内神社となりたり。藩主京極家の崇敬厚く、本殿拜殿は文政二年、神門は慶應三年の再建にして何れも京極家の寄附せし所といふ。(西讃府志 仲多度郡史)

稻荷神社(保食神) 荒魂神社(大物主神 素盞鳴命)

靈神社(大龍神)

(五) 村會下天滿神社

丸龜市中府字景川

祭神 菅原道真公 (一に曰 大物主神 天穗日命 菅原道真公)

由緒 傳ふる所によれば、菅公須森庄中府の里に那珂、多度、三野、豊田四郡管轄の支廳を置く。公支廳に臨まるゝに際し、龜山の麓より海面を望み、好き景色なりと嘆賞あらせられしより後人この地を景川と稱すと云へり。會下廟碑によれば、仁和年間菅公郡邑を按行して會下郷に

到り顯正院に憩ふ。此の地景勝に富むを以て別業を營み屢々來遊せらる。公任滿ちて歸らるゝに及び、吏氏路に遮り號哭して之を止む。公即ち自ら眞像を刻し家臣吉子某に賜ふ。吉子某は杵原郷の長者なり後公の薨去を聞くや小祠を別業の地に造營し賜ふ所の木像を祀る。其の後顯正院廢れて祠



會下天滿神社

も亦荒廢せしが、大永二年藤原祇真深く之を嘆きて郷人と謀り大廟を其の跡に立て結構壯麗を極む。即ち今の廟な

し、大正五年更に改築せり。

明治五年村社に列せられ、同四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(全讃史 西讃府志 神社考)

丸龜 香川縣史)

例祭日 十月十六日十七日

特殊神事 梅花祭 二月二十五日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 隨神門 神輿庫 繪馬殿 社務所 器具庫

境内坪數 五百七十坪

氏子區域及戸數 中府及び地方 八百八十七戸

(六) 荒魂神社

丸龜市中府字景川

祭神 大物主命

由緒 村社會下天滿神社境外末社

祭日 陰曆六月二十七日二十八日

主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 七十五坪

(七) 荒魂神社

丸龜市中府字大道下

祭神 大物主命

り。慶長年間生駒近規金若干を献じて廟の用に充つ。其の後享保年間郷人黨を結びて鬭争すること久しく祭祀廢絶せしが、元文四年六月朔日桃實の如き大雹降りて此の地の稻不多く損傷せり。然るに他村には其の被害無かりしかば、これ菅公の警むる所なりと畏敬す。爾來水旱疾疫祈れば必ず靈驗を得云々とあり。

一説に天正九年社殿兵火に罹り、慶長七年生駒一正丸龜城を築くに際し、麓に奉齋せし梶州神を津森の少彦名の社に移すと共に、當社を景川の地に再興し神田一石二斗を寄進すと云へり。生駒分限帳に「一石二斗 中府宮」とあり。

神社考に『天滿宮村社に會下村(中府屬)之按中府古爲此郡之府則蓋有村吏會集之舍也此村在其下則名義本于此或是爲會下會上之義恐無其理』と見ゆ。

當社は丸龜城下に鎮座し、代々の藩主の崇敬厚く、山崎甲斐守家治城主となりて再營し、寛文九年藩主京極備中守高豊再興、享保十年藩士福田爲清内陣の寄進あり。安永七年上茸、天明四年上茸、天保三年造營等皆藩主京極家の寄進するところにして、嘉永六年に至り佐渡守朗徹修營せりと傳ふ。明治二十七年本殿再建、大正五年本殿再建、幣殿・拜殿等を造營す。隨神門は天保十二年京極長門守高朗再建

合祀祭神 金山彦命

由緒 村社會下天滿神社境外末社。社傳によれば弘安元年甲斐國の人秋山光季なる者、子泰忠と共に此の地に移住す。正應二年泰忠柞原郷田村に久遠院を建立し同寺北部鬼門の鎮守として一祠を奉祀す、これ當社なりといふ。正中二年(一説明應三年)寺院は三野郡下高瀬村に移轉し、當社は遂に衰頽せしが、後年土井山城主矢野丹後守の裔當地に來住しこれを再興せりといふ。大正十五年本殿拜殿の改築、幣殿の新築を行ふ。

明治四十三年中府多具理神社を合祀す。

祭日 陰曆七月二十七日二十八日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 五十坪 崇敬者人員 約五百人

(八) 荒魂神社 丸龜市中府字渦池

祭神 大物主命

由緒 村社會下天滿神社境外末社。俗に子安荒魂の稱あり。社傳によれば正應二年(紀元一九四九)秋山泰忠久遠院西方の鎮守神として創祀せりといふ。後久遠院三野郡下

高瀬村に移轉せられ、當社は傍なる觀音堂と共に此處に残りしが、天正九年兵火に罹り廢頽せしを、正徳二年大喜多某之を再建せりといふ。昭和十年社殿を改築す。

祭日 陰曆七月二十七日二十八日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 四十坪 崇敬者人員 約六百八十人

(九) 清水神社 丸龜市土居字清水

祭神 不詳

由緒 文政元年(紀元二四七八)の創祀といふ。傳ふる所によれば、初め田心姫命・湍津姫命・市杵島姫命の三神を祀りて清水明神と稱へしが、洪水の節流れてあとかたもなくなりしに、文政元年三月土居村の里正高木久太夫に靈夢あり、乃ち夢告の地を掘りしに異石出でしを以て改めて其の石を御靈代として祀り清水大明神と奉稱すといふ。全讃史に『清水大明神在土居村近年里正感夢穿土中得之此地有岡大夫別莊大夫開之下令建祠』と見ゆ。社地近傍に土居美清水あり。神功皇后緣由の地と稱し丸龜十景の一たり。(全讃史 西讃府志 丸龜)

祭日 十一月二十一日二十二日 主なる建造物 本殿

拜殿 境内坪數 百五十坪 崇敬者人員 八十人

(10) 高木神社 丸龜市土居字引田町

祭神 鷲住王

合祀祭神 荒魂神 事代主神

由緒 詳ならず。西讃府志に『高木祠 高木ニアリ祭神鷲住王、相傳フ昔土器川ニ白布ニ包ミタルモノ流レ來レリ村人之ヲ取リシカバ忽チ祟リアリ、因テ神子ヲ招キテ是ヲ問フニ木船神ナリト云、即チ此社ニ納メテ合セ祭レリ、瘡ヲ患フル者履ヲ奉リテ祈レバ忽驗アリト云』と見ゆ。明治二十八年字高木より現在の地に遷座し、大正二年^{字濱}荒魂社、^{字引}蛭子神社を合祀す。

祭日 六月二十一日二十二日

主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 百十二坪 崇敬者人員 四百五十人

境内神社 木船神社(不詳) 高木神社由緒中西讃府志に「木船神」とあるは當社なるべし。

地神社 (天照皇大神 倉稻魂神 大己貴神 少彦名神 埴安姫神)

(11) 龍神社 丸龜市土居字上眞島

祭神 龍神

由緒 詳ならず。西讃府志に『龍王祠 上眞島ニアリ』と見えたり。

主なる建造物 本殿 境内坪數 八坪

崇敬者人員 二百人

境内神社 嚴島神社(嚴島神)

(12) 蛭子神社 丸龜市土居字上眞島

祭神 事代主命

由緒 詳ならず。西讃府志に『惠比須祠 上眞島ニアリ』と見ゆ。

祭日 六月九日十日 主なる建造物 本殿

境内坪數 九坪 崇敬者人員 二百人

(13) 産巢日神社 丸龜市瓦町

祭神 高皇産靈神 神皇産靈神

合祀祭神 保食神

由緒 南村郷社八幡神社境外末社。由緒詳ならず。俗に妙見社と稱せらる。(西讃府志)

昭和四年境内神社たりし稻生神社を合祀す。

祭日 十一月一日二日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神輿庫 神馬庫 事平宮 遙拜所 八幡宮遙拜所

境内坪數 三百七十坪一合 崇敬者人員 約二千二百五十人

境内神社 熊野神社(熊野大神) 明治二十一年風袋町より境内に遷座す。

(一四) 恵比須神社

丸龜市西平山町

祭神 事代主神

由緒 南村郷社八幡神社境外末社。由緒詳ならず。西讃府志に『蛭子祠 新堀ニアリ』と見ゆ。

祭日 六月九日十日 主なる建造物 本殿

境内坪數 九坪四合二勺 崇敬者人員 約二百五十人

(一五) 恵比須神社

丸龜市北平山町

祭神 事代主神

合祀祭神 豊受神 火々出見尊

由緒 南村郷社八幡神社境外末社。慶長年間の創祀といふ。

明治四十二年^{北平山町}大神宮社・龜山神社を合祀す。

合祀神社龜山神社は初め丸龜城の鎮守として祀られたりといふ。(丸龜)

祭日 六月九日十日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 百四十五坪 崇敬者人員 約八百人

(一六) 海神社

丸龜市御供所町

祭神 綿津見神

由緒 南村郷社八幡神社境外末社

祭日 六月十四日十五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 七坪六合 崇敬者人員 約二百五十人

(一七) 恵比須神社

丸龜市御供所町

祭神 事代主神

由緒 南村郷社八幡神社境外末社。由緒詳ならず。西讃府志に『恵美酒祠 浪手ニアリ』と見ゆ。

祭日 六月九日十日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 百十六坪六合 崇敬者人員 約四百五十人

(一八) 稻生神社

丸龜市御供所町

祭神 保食神

由緒 南村郷社八幡神社境外末社

祭日 九月二十一日二十二日 主なる建造物 本殿

境内坪數 三十九坪四合 崇敬者人員 約百五十人

(一九) 天神社

丸龜市御供所町

祭神 菅原道真公

由緒 南村郷社八幡神社境外末社

祭日 九月二十四日二十五日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 十三坪一合 崇敬者人員 百七十五人

(二〇) 玉積神社

丸龜市西平山町

祭神 天照大神 品陀皇大神 大國主大神 少彦名神 豊受大神 天兒屋根神 中筒之男神 市杵島姫神 綿津見神

由緒 南村郷社八幡神社境外末社。由緒詳ならず。

「丸龜」によれば、天保年間新堀堤浦築造の際剩土を盛りたる所に丸龜藩大阪藏屋敷に祀りありし神社を奉遷したるなりといふ。(丸龜)

祭日 陰曆六月十四日十五日

主なる建造物 本殿 渡殿 前拜殿 拜殿

境内坪數 三百五十坪 崇敬者人員 約千五百人

境内神社 金神社(金山彦神) 稻生神社(保食神)

(二一) 市寸島神社

丸龜市福島町

祭神 市寸島媛命 菅原道真公

由緒 南村郷社八幡神社境外末社。創祀詳ならず。初め

二社にして一を辯才天と稱し市寸島媛命を祀り、一を天満宮と呼び菅原道真公を祀れり。西讃府志によれば、辯才天は丸龜藩士大塚八郎左衛門尊崇し其の邸に奉祀しありしを元祿元年此地に移し、又天満宮は浦人吹屋甚兵衛なる者崇敬祭祀しむたりしを貞享三年此處に移せしものにして、後寛保元年これを一社に合せ祀りしといふ。神社考に「辨財天村社在三福島町天満宮與三辨財天相殿」と見ゆ。

(西讃府志 丸龜)

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 六百五十三坪四合五勺 崇敬者人員 約三千人

(三三) 稻生神社

丸龜市富屋町

祭神 保食神

由緒 南村郷社八幡神社境外末社。創祀詳ならねど西讃府志に「稻荷大明神 祭神保食神 猿田彦大神 祭祀二月

初午九月二十三日 昔田村ニ鎮座シ玉ヒシヲ慶長四年九月此地ニ移シ祭レリ」と見ゆ。

祭日 九月二十一日二十二日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神門
境内坪數 五十九坪三合五勺 崇敬者人員 約六百人

第三章 大川郡

第一節 大川郡概説

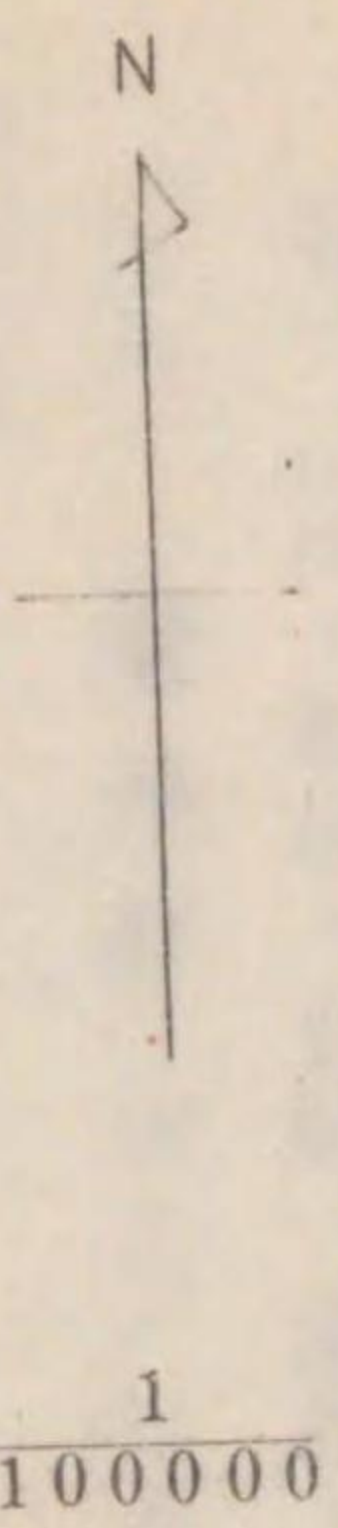
大川郡は香川縣の最東部に位し、明治三十二年の郡制實施以前は大内・寒川の二郡に分れてゐた。

大内郡は倭名鈔に大内知布とあつて、郡名の起源は孝靈天皇の皇女倭迹々日百襲姫命が本郡に謫居せられ、その宮居を

大内と云つたのに起因すると云ひ、又日本武尊の神廟を白鳥郷に營み土人之を大内と稱へたのに因るとも云ふ。西讃府志には大内は大市であると云つてある。所屬の郷は倭名鈔に、引田比介・白鳥之呂・入野爾布・與泰音如(日は田の左半が缺けたものであらうと云ふ)の四郷で、後世入野は丹生野、與泰は與田と書かれた。所屬の村は



大川郡



| | |
|-----------------------------|--------------------------------|
| (Red line with cross-ticks) | 電車軌道 (Tramway) |
| (Red line) | 鐵道 (Railway) |
| (Black line) | 主ナル町村道 (Main Village Road) |
| (Blue line) | 國縣道 (National Route) |
| (Dashed line) | 村界 (Village Boundary) |
| (Dotted line) | 郡界 (County Boundary) |
| (Dotted line) | 國縣界 (National/County Boundary) |
| (Circle with dot) | 學校 (School) |
| (Circle with cross) | 町村役場 (Municipal Office) |
| (Circle with cross) | 神社 (Shrine) |

大川郡は、徳島県南西部に位置し、北は高松市と接し、南は高松市と接する。地形は、北西部が山地で、南東部が平野である。主要な産業は農業であり、特に稲作が盛んである。また、工業も発達しており、特に製紙業が有名である。交通は、鉄道と道路が整備されており、高松市と東京を結ぶ東海道新幹線が通過している。



引田郷 引田・坂本・馬宿・南野・黒羽・川股・吉田・

小海・糠屋。

白鳥郷 白鳥・歸來・松原・伊座・三本松・東山・西山・

湊。

丹生野郷 入野山(丹生山と書く)・大谷・三殿・町田・松崎・落

合・小磯・馬篠・小砂・土居・中山。

與田郷 與田(與田山と書く)・水主・川東・中筋・西村・横内。

で、明治二十三年左の如く町村を置かれた。

引田町 引田・糠屋。相生村 坂本・馬宿・南野・

黒羽・川股・吉田。小海村 小海。白鳥本町 歸來・

松原・伊座。白鳥村 白鳥湊。三本松町 三本松。

福榮村 東山・西山・入野山・與田山。丹生村 大

谷・三殿・町田・松崎・落合・小磯・馬篠・小砂・土居・

中山。譽水村 水主・川東・中筋・西村・横内。

である。

寒川郡は倭名鈔に寒川佐無とあつて大内郡の西に隣る。郡名の起原は富田村に相模國寒川神社の御分靈を迎へて一郡の總鎮守とせしより起ると云ひ、又全讃史には石田村の東原に清泉ありて寒川と云ひ郡名是より出づとも云ふ。所屬の郷は倭名鈔に難波上音・石田伊之・長尾奈賀・造田爽・鴨部加無・神崎佐木。

大川郡

多知の七郷で、後世難波は富田、神崎は神前と書かれた。多知は多和の誤である。後に鶴羽郷が分れて八郷となつた。多和郷は後の志度郷であると云ひ、全讃史は志度村を造田郷に付け、前山及び奥山を以て多和郷としてゐる。官社考證による各郷所屬の村名は

富田郷 富田東・富田西・富田中・田面・南川・五名。

石田郷 石田東・石田西。

長尾郷 長尾東・長尾西・長尾名・前山・奥山。

造田郷 宮西・是弘・乙井・野間田。

神前郷 神前。

鶴羽郷 津田・鶴羽。

志度郷 志度・東末・西末。

鴨部郷 東山・中筋・下庄・小田。

である。明治二十三年左の通り町村を置かれた。

松尾村 富田東・田面。富田村 富田中・富田西・南川。

五名村 五名。石田村 石田東・石田西。神前村 神

前。造田村 宮西・是弘・乙井・野間田。長尾町 長尾

東・長尾西・長尾名・前山。多和村 奥山。志度町 志

度・末。鴨部村 鴨部東山・鴨部中筋。小田村 小田。

鴨庄村 鴨部下庄。津田町 津田。鶴羽村 鶴羽。

である。

延喜式内神社は舊大内郡内に縣社水主神社があり、倭迹々日百襲姫命を祭り、郡内に百襲姫命の遺蹟と稱する神社、舊蹟が多くあつて傳説に富んでゐる。寒川郡内には鴨部村村社志太張神社、石田村布勢神社、大藁彦神社、神前村神前神社、志度町郷社多和神社がある。多和神社には異説があつて、長尾町前山の多和神社を以て式内とする説もある。

其の他本郡内の古社と思はれるものとして官社考證追録に擧げられてゐる神社は

相生村地主神社、二宮神社。小海村村社成松神社。引田町郷社譽田神社、鹽竈神社。白鳥本町縣社白鳥神社、鹽越神社。福榮村村社石清水八幡神社。譽水村石清水神社。丹生村中山神社、櫛掛神社。松尾村豊田神社、鹿庭神社、八劍神社。五名村鈴竹神社。富田村郷社富田神社、荒襲神社。神前村新川神社。石田村郷社石田神社。長尾町多和神社。造田村諏訪神社。鶴羽村鶴羽神社。小田村天満神社。鴨部村飯神社。鴨庄村室木神社。志度町岡田神社、久那登神社。

等である。五名村日下神社は日本紀略に延喜六年從五位下を授くとある國榮神ではあるまいかと云ふ。

縣社白鳥神社は白鳥本町に鎮座ありて日本武尊の靈蹤として名高く、高松藩主松平頼重、社領二百石を寄進し幕府に請うて朱印地とした。又鶴を以て神鳥となし往古より國禁を以て之が捕獲を禁じ犯す者は嚴科に處した。白鳥松原、津田松原及び志度の浦は東讃に於ける勝地として有名である。

福榮村村社譽田神社は護良親王の遺蹟と傳へられ、親王の手寫し給ひし大般若經は赤松顯則によつて播州法華山に遷され、今尙同所に現存してゐると云ふ。

地方的特殊神事としては特に記載するものはないが、舊寒川郡内の神社では庭燎祭(おみかんやき)が行はれてゐる。

(全讃史 官社考證 西讃府志 大川郡誌 和名類聚鈔)

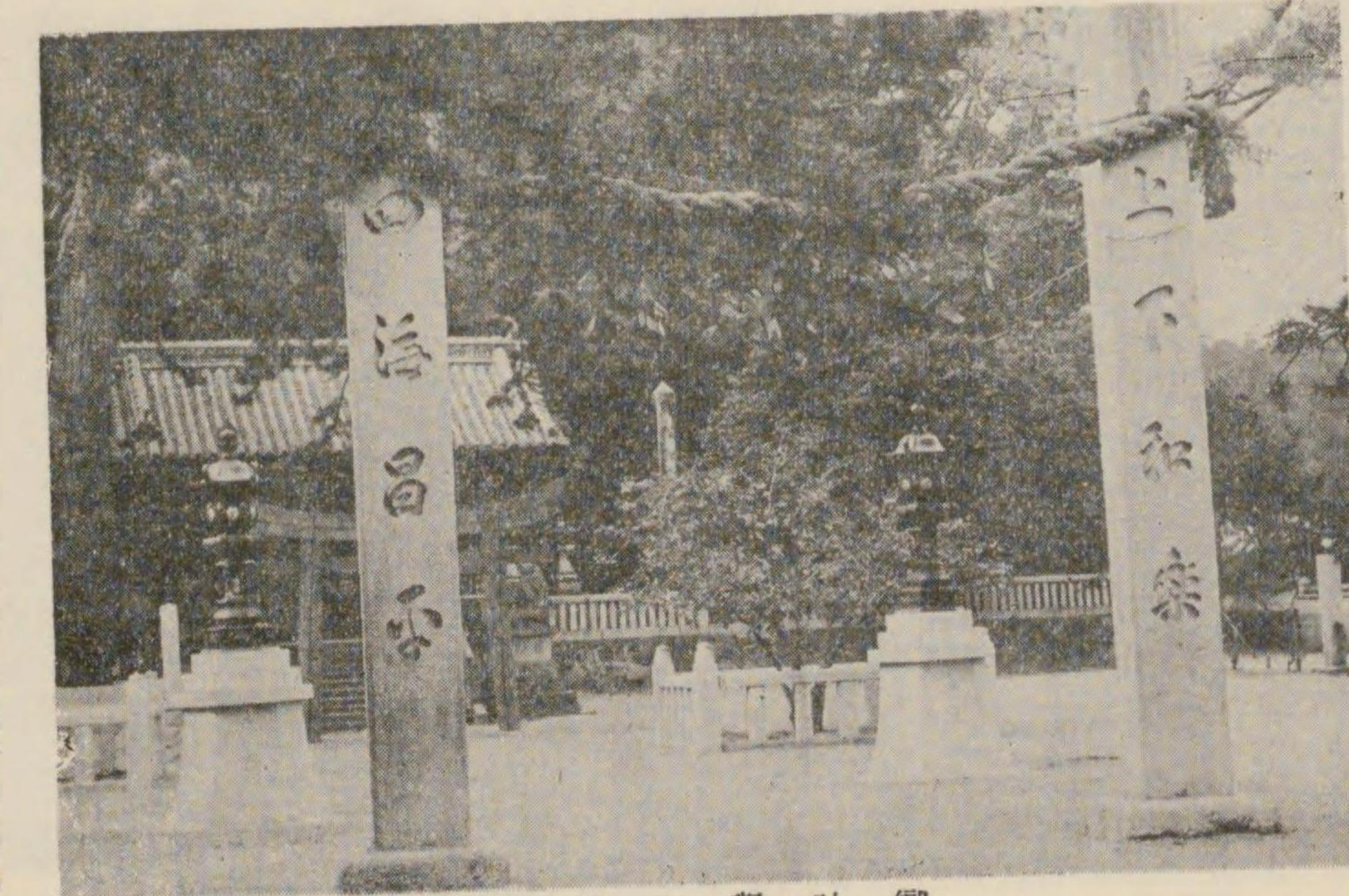
第二節 大川郡内神社

一 引田町

(一) 郷社 譽田神社 引田町字川向

祭神 品陀和氣尊 氣長足姬尊 皇后仲姬尊

合祀祭神 底筒男命 中筒男命 上筒男命
由緒 承和八年(紀元一五〇二)三月の創祀と傳へらる。



郷社譽田神社

社傳によれば、手置帆負命二十五世の孫忌部宿禰正國大内郡の領主となり、貢を奉じて帝都に行き、その歸途河内國譽田八幡宮に參籠せしに靈夢あり、神寶二品を得て歸り一を郷内中山に祀り一を忌部家の後園に祀る。延久元年中山の祠を引田龜山の巔に遷して郷の鎮守となせりと云ふ。天正年

中兵火に罹りしが、同十七年生駒一正之を再營し、社領三十石を寄進す。松平頼顯與治山に狩獵の節參拜し神號を自書奉納して武運長久を祈りしといふ。明治五年郷社に列せられ、同四十年九月二十一日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(玉藻集 三代物語 全讃史 名勝圖會 大川郡誌 生駒分限帳)

明治四十一年^{字大}大川神社を合祀す。

例祭日 十月十五日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 隨神門 繪額殿 社務所

御馬殿 被殿 御船庫 手水屋

寶物 扁額^{松平頼顯筆} 外四點

境内坪數 六千八百六十坪

氏子區域及戸數 引田町 相生村 小海村 二千二百四十戸

境内神社 若宮神社(仁徳天皇^{合大日靈尊}祀) 譽田神社(中山遷座せし時共に奉祀せしものにして、全讃史に「中央譽田天皇所言八幡宮也左則仁徳帝所言若宮也」と見ゆ。明治四十二年境内神社なりし大内神社を合祀す。

高良神社(武内宿禰^{合大己貴命}祀) 若宮神社に同じ。全讃史

明神也」とあり。明治四十二年境

内神社金刀比羅神社を合祀す。

菅原神社(菅原道真公) 稻荷神社(大氣都姫神)

菅原神社(菅原道真公) 稻荷神社(大氣都姫神)

(二) 塩竈神社

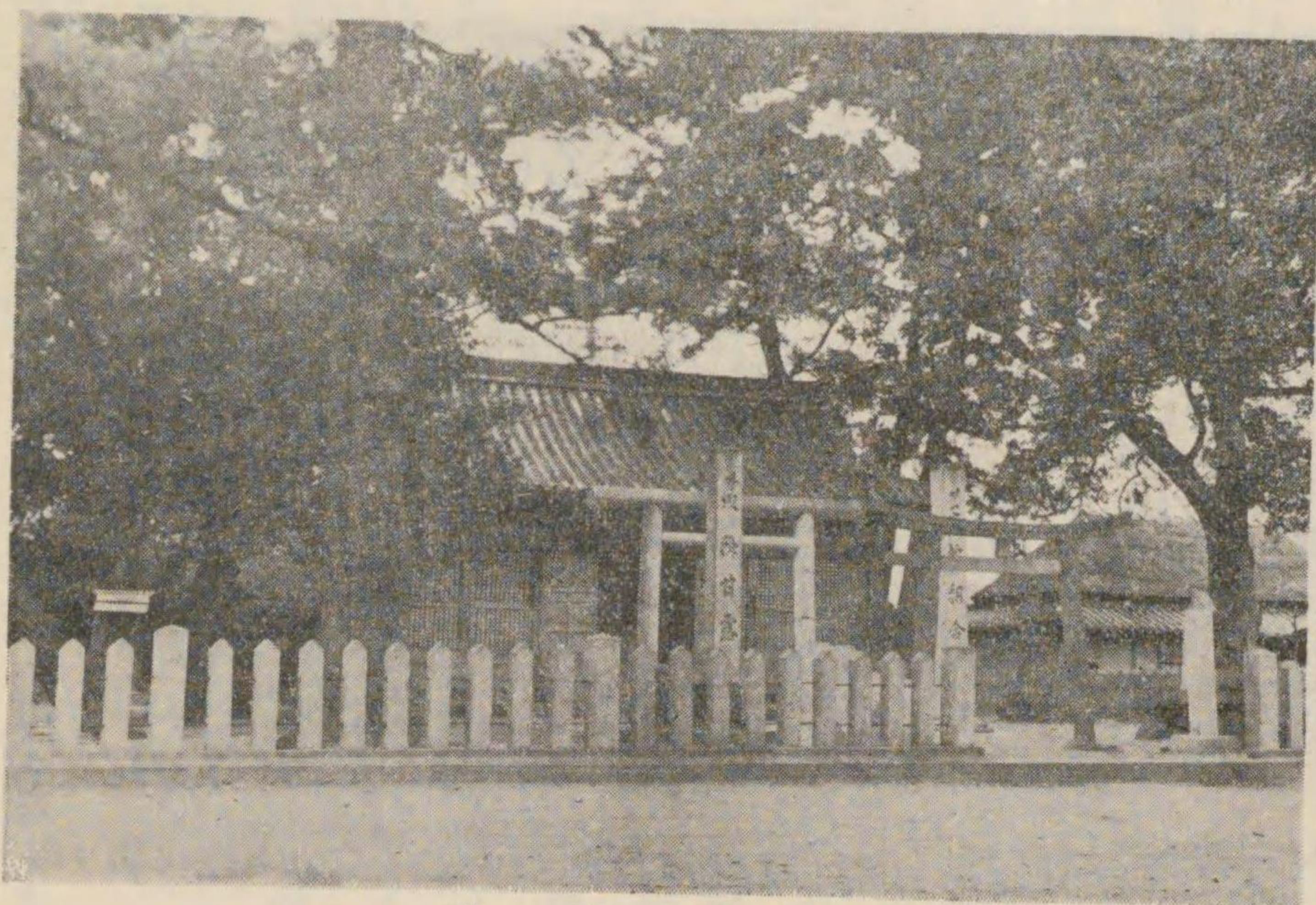
引田町字安戸

祭神 不詳(一に曰 鹽土男神 武甕槌神 經津主神)

合祀祭神

- 奥津彦命
- 軻遇突智命
- 大氣命
- 都姫命
- 事代主命
- 大山祇神
- 中筒男神

由緒 引田



鹽竈神社

町郷社譽田神社境外攝社。由緒詳ならざるも官社考證追録に『安堵神社引田村に在、今鹽竈といふ』とあり。名勝圖會に『鹽竈明神安堵濱にあり……當社肇禮未詳天正二年間島伴左衛門再營せり。安戸明神同所にあり祭神百襲姫命』と見ゆ。全讃史には『安堵大明神 在安戸村社也 與水主神一體也……中古以來配祭鹽竈大明神』と載せたり。全讃史大水大明神の條に『孝靈天皇第一皇女百襲媛命謫於此邦皇舟初着大内郡馬篠浦掛其船之地立祠奉之謂之船掛大明神而皇女求居東行至安堵心即安矣立祠奉之謂之安堵大明神』とあり。(全讃史 名勝圖會 讚州府志)

明治四十一年^{字中}向^{字川}火産靈神社・秋葉神社・稻荷神社、^{字安}事代主神社を合祀、明治四十二年^{字中}山祇神社を合祀、大正四年^{字川}向^{字山}中山神社を合祀す。

祭日 十月二十七日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 二百九十四坪 崇敬者人員 約一千人

(三) 八坂神社

引田町字逃田

祭神 應神天皇(一に曰 應神天皇 素盞鳴命)

合祀祭神 天兒屋根命

由緒 引田町郷社譽田神社境外末社。

明治四十一年^{字逃}春日神社を合祀す。

祭日 十二月二十五日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 百坪 崇敬者人員 約二百五十人

(四) 石神社

引田町字中山

祭神 布都

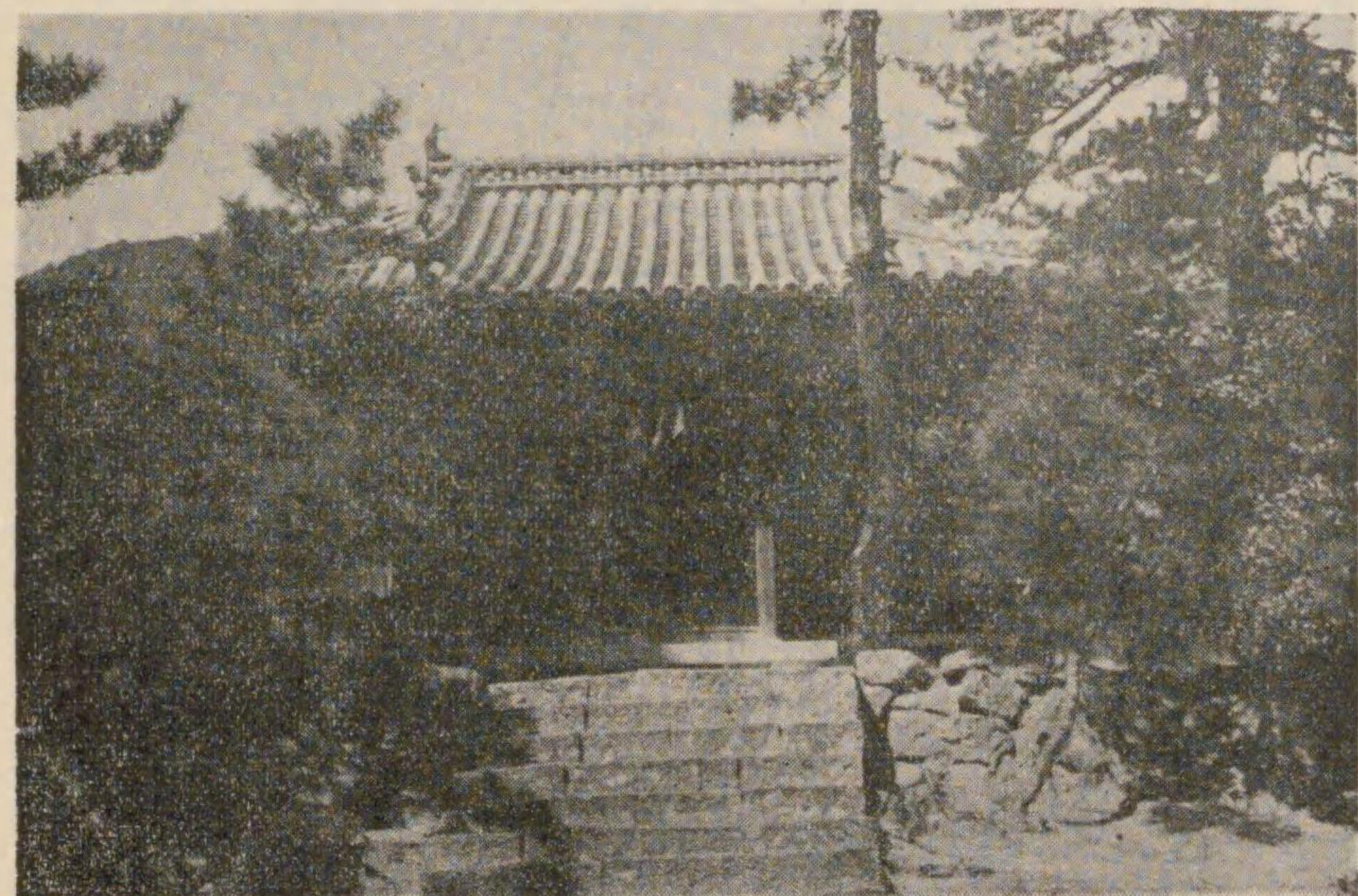
御魂神

合祀祭神

- 應神天皇
- 金山彦命
- 大物主神
- 伊邪那岐命
- 伊邪命
- 那美命

由緒 引田

町郷社譽田神社境外攝社。創祀詳ならずと雖も古來石上明神と稱



石神社

せらる。天正年間兵火に罹り、明曆年中再興すと傳ふ。

(名勝圖會)

明治四十一年^{字中}八坂神社を、同四十二年^{字真}金峰神社・

二柱神社・金刀比羅神社を合祀す。

祭日 十月八日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 千五百七十九坪 崇敬者人員 約二百五十人

(五) 蛭子神社

引田町字畑方

祭神 事代主神 御饌都神 市杵島姫神(一に曰 事代主命 船戸神 豊受大神)

由緒 引田町郷社譽田神社境外末社。明治四十四年^{字畑}方

事代主神社三社(何れも事代主神)を合祀す。

祭日 三月十日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 八十九坪 崇敬者人員 約一千人

二 白鳥本町

(六) 縣社 白鳥神社 白鳥本町大字松原字新町

祭神 日本武尊

相殿 兩道入姫命 弟橘姫命

由緒 日本武尊東國御平定の後伊勢國能褒野に薨じ給ひ、其の靈白鳥に化し飛んで大和國琴彈原に止り、更に飛んで河内國舊市邑に止り給ひ、更に飛んで天に上ると。當社傳ふる所によれば、尊の靈白鶴と化し舊市邑より飛んで讃岐國三里松原に留り給ふ。依て其の所に神廟を營みて之を奉祀す。尊の神と現じて直に跡を垂れ給ふ所なれば此所を王城に準へ東宮に比す。依て郡の名を大内と云ひ、里の名を鶴内と云ふ。白鶴と化して留り給ふにより白鳥大明神と號し奉り、郷名白鳥(倭名鈔白鳥之呂^{止利})は神の御名によつて起れりと云ふ。成務天皇の御宇尊の御子武彥王を讃岐に封じ以て神廟を鑑せしめ給ひ、仲哀天皇勅して塙垣^{たながき}を築かしめ封戸をも寄せられたり。今の神社は即ちその跡なりと。中古に至り八幡神は即ち尊の御孫に當らせ給ふを以て弓矢の

神域は海濱松原の中において老松數千株白砂に連りて曲浦に望み風光甚だ佳く社殿亦宏麗なり。(源平盛衰記 三代物語 全讚史 名勝圖會 讚州府志 高松藩記 玉藻集) 例祭日 十月四日

特殊神事 太々神樂 舊正月五日より八日まで氏子各町村別に參列し、神子二人内陣の御鈴を受けて神樂奉奏、其の間御鈴引の神事あり。これト部神道より出でたる特殊神事なり。

主なる建造物

本殿 幣殿 拜殿 神樂殿 御供所 御廄 鶴御門 廻廊^{二棟} 表御門 巽門 坤門 裏御門廻廊 土藏

御船藏 御旅所 奏樂殿 神庫 參集所

寶物 國寶系卷太刀^{青江正恒作 松平賴重寄附} (大正十一年國寶指定)

三十六歌仙扇額^{松平賴重寄附} 甲冑^{松平賴重寄附} 同 聰寄附 太刀^{松平賴重寄附}

神號 道見法親王御筆 其他武具、樂器等百三十餘點

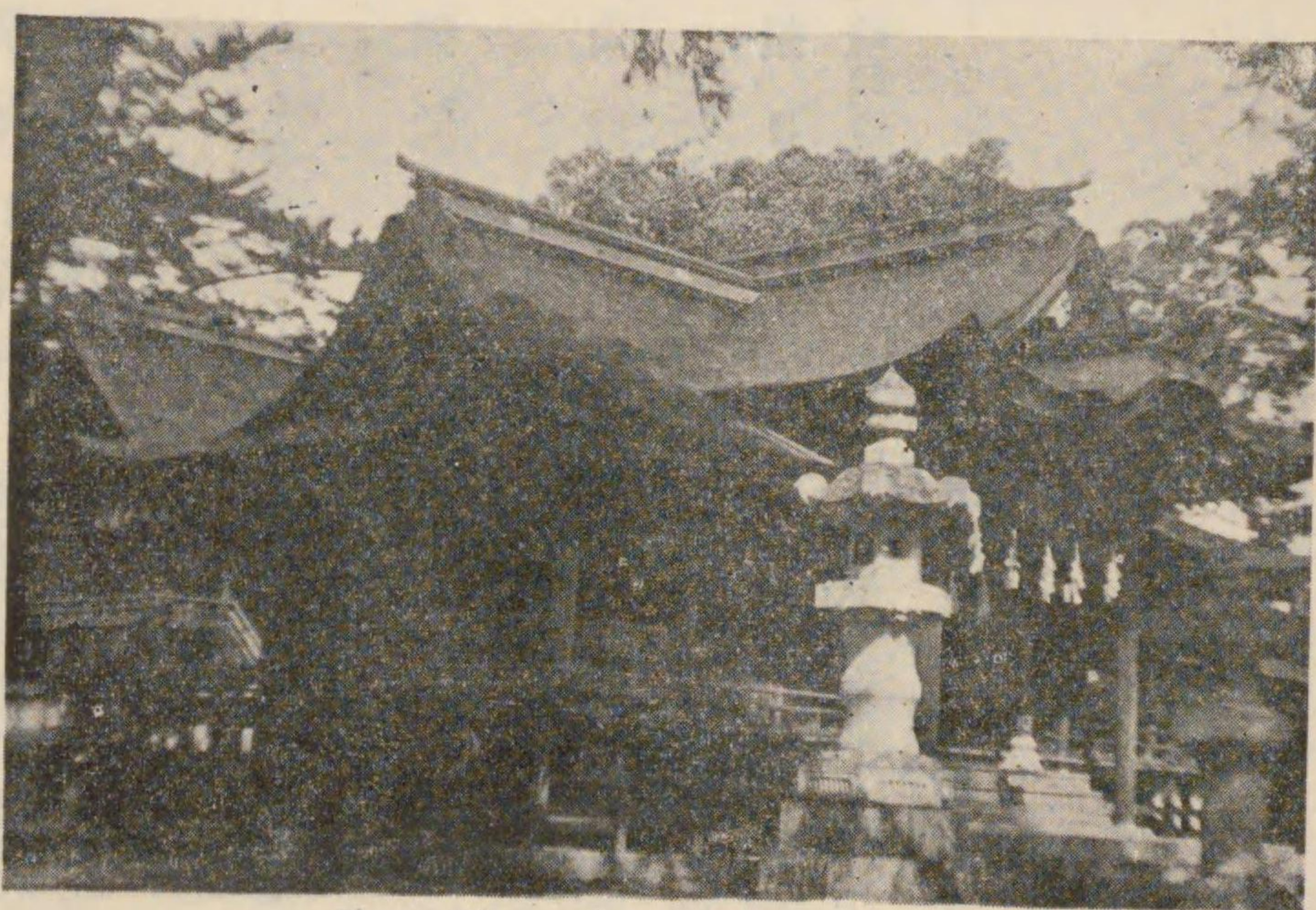
境内坪數 四萬八千九百九十四坪一合五勺

氏子區域及戸數 白鳥本町 白鳥村 三本松町 譽水村原間

福榮村東山 同西山 二千六百十戸

境内神社 五宮神社(稻依別王 仲哀天皇 神功皇后 應

天神皇 武彥王) 日本武尊の王子王孫を奉祀したるものにして一宮、若宮、中宮、今宮、綾宮なり。一宮は稻依別王、若宮は仲哀天皇、中宮は神功皇后、今宮は應神天皇、綾宮は武彥王なり。



縣社 白鳥神社

神として武家の崇敬亦厚かりき。寛文五年藩主松平頼重大に社殿を修し、神領二百石を寄進して幕府に乞ひ之を朱印地となす。古へより當國は當社の故を以て鶴を神鳥となし、固く之が捕獲を禁じ、若し犯すものは嚴科に處せられ以て明治に及びたり。明治五年縣社に列せられ、同十三年本殿の改築あり。明治四十年三月二十二日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。

三社神社 (吉備武彦 大伴武日 武内宿禰) 日本武尊東征して吉備社、伴社、高良社なり。吉備社は吉備武彦、伴社は大伴武日、高良社は武内宿禰とす。

青山稻荷神社 (倉稻魂命 一に曰 受持神) 往古歸來村に奉祀せしが約二百年以前神主に靈夢ありて境内に遷座せりと云ふ。

戎神社 (事代主命)

(七) 市杵島神社 白鳥本町大字松原字辨天山

祭神 市杵島姫命

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 七百九十三坪

崇敬者人員 八十人

(八) 塩越神社 白鳥本町大字松原字鹽越

祭神 少童神

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社。寛文年間の創祀にして、此の地海潮溢れ越えて田畑を損ぜしかば里人之を憂へて創立すと云ふ。(名勝圖會 大川郡誌)

主なる建造物 本殿 境内坪數 未定

崇敬者人員 三十五人

(九) 鶴内神社 白鳥本町大字松原字水入

祭神 日本武尊

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社。元白鳥神社舊地に鎮座ありしを、享保十六年現今の地に遷座す。

主なる建造物 本殿 境内坪數 七十八坪

崇敬者人員 八十人

(一〇) 八坂神社 白鳥本町大字松原字松西

祭神 素戔鳴尊

合祀祭神 菅原道真公

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社。創祀の由來詳ならず。明治四十年^{字松}天神神社を合祀す。

主なる建造物 本殿 境内坪數 百九十八坪

崇敬者人員 十八人

(一一) 戎神社 白鳥本町大字松原字松東

祭神 事代主命

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 三十一坪

崇敬者人員 十人

(一二) 戎神社 白鳥本町大字松原字川東

祭神 事代主命

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 二十四坪

崇敬者人員 二十人

(一三) 與治山神社 白鳥本町大字松原字與治山

祭神 大山祇命

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社。由緒詳ならず。世俗當社を清少納言社と云ふ。傳説によれば藤原忠光の女

惡病の爲め流されて引田郷安戸に漂着す。里人荊木宗左衛門に救れしが五日を経て死せり。里人之を安戸姫と稱し與治山の頂に葬る。永享九年九月一日荊木卯左衛門なる者祠を立て、之を祀り、姫が生前少納言に昇りたりと云へるを以て清少宮と呼べりと。

合祀祭神 大物主神 大山祇神

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社。明治四十一年

^{字鳥}山神社を、明治四十二年^{字中}金刀比羅神社、^{字垣田中}神社を、大正二年^{字竹}山神社を合祀す。

主なる建造物 本殿 境内坪數 千百七坪一合五勺

崇敬者人員 十七人

(一七) 大原神社 白鳥本町大字歸來字大原

祭神 不詳

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 五十四坪

崇敬者人員 二十人

(一八) 八坂神社 白鳥本町大字歸來字法付

祭神 素戔鳴尊

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 五十五坪

祭神 不詳

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 五十五坪

改稱す。(大川郡誌)

祭日 陰曆九月一日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 五百七十二坪

(一四) 山神社 白鳥本町大字松原字大谷

祭神 大山祇神

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 官有地未定

崇敬者人員 十人

(一五) 山神社 白鳥本町大字松原字小磯

祭神 大山祇神

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 官有地未定

(一六) 伊坐神社 白鳥本町大字伊座字古屋

祭神 不詳

(一九) 龍神社 白鳥本町大字歸來字僧洲

祭神 素戔鳴尊

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 九十六坪

崇敬者人員 七十人

三三本松町

(二〇) 天神神社 三本松町字芦尾

祭神 菅原道真公

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社

主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 二千九十一坪

崇敬者人員 七百四十八人

(二一) 嚴島神社 三本松町字上所

祭神 市杵島姫命

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社。創祀詳ならず。

昭和六年同所三十一番地より現地三十八番地に移轉す。

主なる建造物 本殿 境内坪數 二百六十五坪

崇敬者人員 七百八十五人

(三三) 金刀比羅神社 三本松町字古川

祭神 大物主神

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 百十六坪

崇敬者人員 百二十五人

(三三) 蛭子神社 三本松町字上所

祭神 事代主神

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社

主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 三十四坪

崇敬者人員 百人

(三四) 蛭子神社 三本松町字上所

祭神 事代主神

(二七) 郷宇佐神社 長尾町大字長尾名字龜鶴山

祭神 應神天皇 仲哀天皇 神功皇后

由緒 承平六年(紀元一五九六)豊前國宇佐神宮の御分靈を勸請して長

尾郷の總鎮守

となせりと傳

ふ。或は永徳

二年の創祀と

も云へり。極

樂寺代々因由

記には天曆四

年九月長尾八

幡宮勸請、其

の後萬壽元年

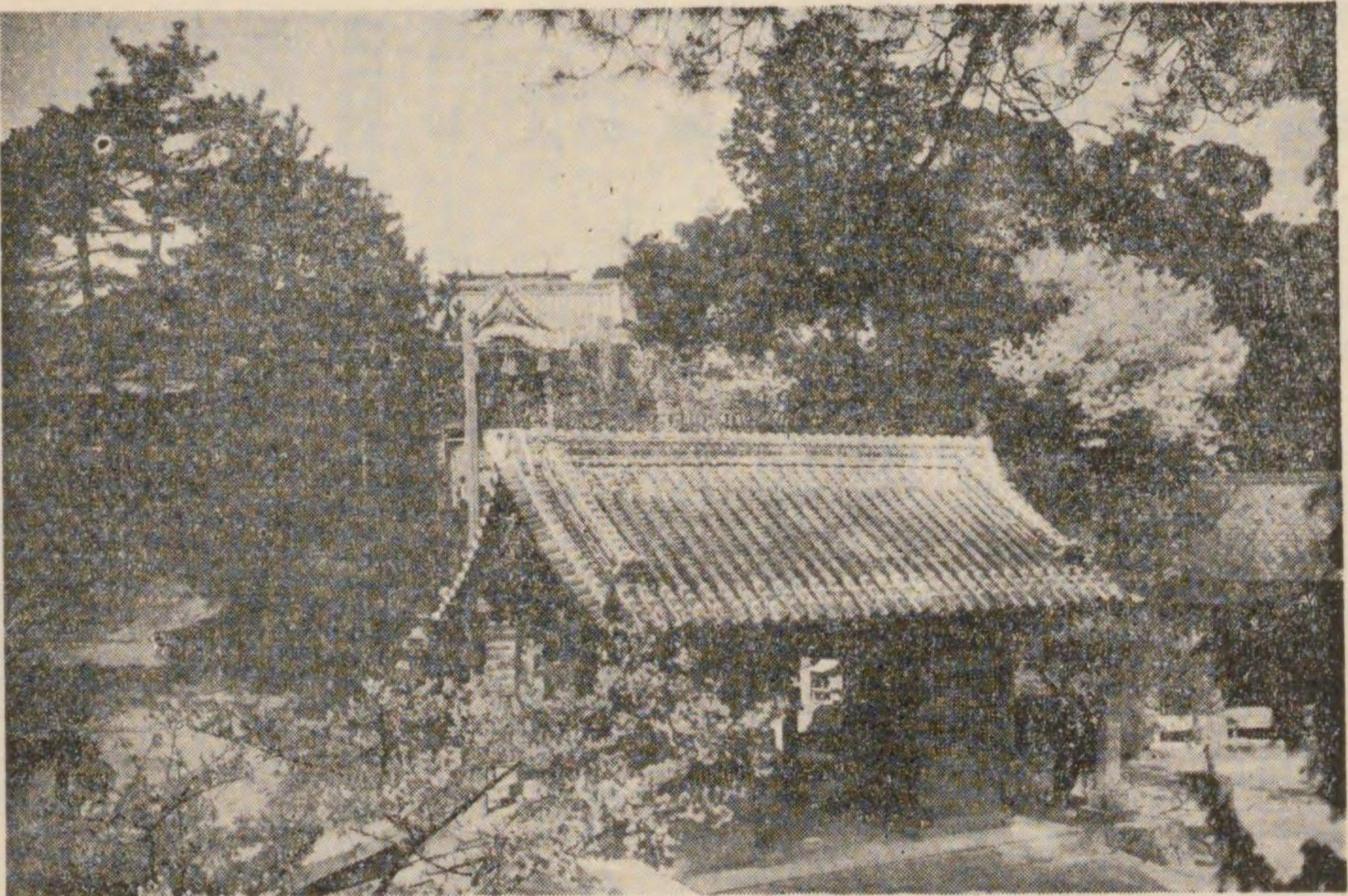
二月、寛治四

年九月、建仁

二年八月、文

永六年九月、

永仁六年十一



郷宇佐神社

四長尾町

(三六) 八坂神社 三本松町字上所

祭神 素戔鳴尊

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 十五坪

崇敬者人員 二百人

月、永享八年二月等遷宮ありし旨を記されたり。正平六年細川繁氏之を再營せり。貞治三年細川頼之東讃六郡の人夫を以て神域内に大池を築造せり。八幡池これなり。應永十六年大に社殿を修造し、寛永十二年改修あり。永徳二年僧空遍神正院を創立し別當となし法輪寺といふ。爾來祭祀は専ら社僧に依て支配されしが慶應元年神正院火災ありて舊記等悉く烏有に歸せり。社實に寒川元隣奉納の太刀あり。元祿年間神正院に宣政なる者あり。勇力人に絶し藩主松平家の寵を受く、一日神前に奉幣せしに大蛇來りて社殿を巻く、宣政即ち元隣が奉納する所の太刀を執て之を斬る。爾來蛇切丸と稱し世に名あり。この事高松藩の老臣寛政典の記にあり。而して當社恒例の神幸祭には早曉より夕刻に至るまで御旅所に於て數百發の射砲を行ひしが、これ大蛇の害を除かむが爲なりと云ふ。明治に到りて禁止せられたるが爲め此行事は絶えたり。

明治四年郷社に列せられ、同四十年九月二十一日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(三代物語 全讃史 名勝圖會 玉藻集 香川縣史)

例祭日 十月十三日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神饌所 神門 厩 休息

(三〇) 松本神社 長尾町大字長尾名字松本

祭神 大日靈命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。慶安二年(紀元二三〇九)九月十三日創祀。

祭日 九月十三日 主なる建造物 本殿

境内坪數 十三坪七合 崇敬者人員 十六人

(三一) 荒神社 長尾町大字長尾名字中村

祭神 素戔男命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。慶安二年(紀元二三〇九)九月十五日創祀。

祭日 九月十五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 六十六坪

(三二) 豊姫神社 長尾町大字長尾名字龜鶴山

祭神 豊姫命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。享保十年(紀元二

大川郡

所 手水舎

寶物 刀一口蛇切丸

境内坪數 六千四百四十九坪

氏子區域及戸數 長尾町 多和村 千五百三十七戸

境内神社 八坂神社(素戔男命)慶長十八年八月創立。

(二八) 石上神社 長尾町大字長尾名字塞ノ神

祭神 石凝姥命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。延寶元年(紀元二

三三三)九月二日創祀。

祭日 九月二日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 三百六十四坪 崇敬者人員 三十二人

(二九) 金刀比羅神社 長尾町大字長尾名字臺ヶ山

祭神 金山彦命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。文化十一年(紀元

二四七四)十月十日創祀。

祭日 十月十日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 三十六坪 崇敬者人員 約四百三十人

三八五)八月二十三日創祀。

祭日 九月十三日 主なる建造物 本殿

境内坪數 二百五十二坪 崇敬者人員 五十八人

(三三) 土居神社 長尾町大字長尾名字土居

祭神 保食神

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。天和元年(紀元二

三四一)十月二日創祀。

祭日 九月八日 主なる建造物 本殿

境内坪數 十一坪

(三四) 荒神社 長尾町大字長尾名字辻

祭神 素戔男命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。慶安二年(紀元二

三〇九)九月十五日創祀なり。昭和四年(字)荒神社を合祀

す。合祀神社荒神社も亦慶安二年九月十三日の創祀とい

ふ。

祭日 九月十五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 六十七坪 崇敬者人員 約二百十人

(三五) 荒神社 長尾町大字長尾名字土居

祭神 素戔男命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。慶安二年(紀元二
三〇九)九月十日創祀。

祭日 九月十八日 主なる建造物 本殿

境内坪數 二十三坪 崇敬者人員 二十人

(三六) 山神社 長尾町大字長尾名字水呑場

祭神 大山積命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。延寶二年(紀元二

三三四)九月七日創祀。

祭日 九月七日 主なる建造物 本殿

境内坪數 九十坪 崇敬者人員 十五人

(三七) 菅原神社 長尾町大字長尾名字水呑場

祭神 菅原道真公

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。延寶元年(紀元二
三三三)九月二十五日創祀。

祭日 九月二十五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 百十一坪 崇敬者人員 十五人

(三八) 地神社 長尾町大字長尾名字石上

祭神 天照大神 埴安姬命 倉稻魂命 大己貴命

少名彥命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。天保十四年(紀元
二五〇三)三月二日創祀。

祭日 春秋社日 主なる建造物 本殿

境内坪數 四坪 崇敬者人員 十人

(三九) 山神社 長尾町大字長尾名字土居

祭神 大山積命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。延寶元年(紀元二

三三三)九月一日創祀。

祭日 九月一日 主なる建造物 本殿

境内坪數 百十九坪

(四〇) 鹿島神社 長尾町大字長尾名字市

祭神 武甕雷命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社

主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 十四坪

崇敬者人員 五十二人

(四一) 稻荷神社 長尾町大字長尾西字打越

祭神 倉稻魂命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。文久二年(紀元二

五二二)長尾西村富次郎なる者創祀せり。當時の記録に『正

一位稻荷大明神安鎮之事 右於本宮一雖爲奧秘一依三

望一小祠式令行奉勸遷大明神於其清地讚岐國寒川郡長尾

西村一願主富次郎志願鎮守也……文久二年初冬吉辰 城

紀伊郡稻荷本宮 從四位上行陸奥秦宿禰忠勝』とあり。

(名勝圖會)

祭日 陰曆九月五日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 四百四十坪 崇敬者人員 二百九十六人

境内神社 金刀比羅神社(金山彦命)

(四二) 龍王神社 長尾町大字長尾西字千原

祭神 豊玉姫命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。寛政七年(紀元二

四五五)六月十日長尾西村岡田庄松、細川團造兩名の創祀

に係る。

主なる建造物 本殿 境内坪數 十坪

崇敬者人員 三百人

(四三) 荒神社 長尾町大字長尾西字仲

祭神 素盞男命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 七十三坪

崇敬者人員 八十八人



(四四) 毘沙門神社 長尾町大字長尾西字筒井

祭神 不詳

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社

祭日 九月二日 主なる建造物 本殿

境内坪數 三十三坪 崇敬者人員 六十八人

(四五) 荒神社 長尾町大字長尾西字筒井

祭神 素盞男命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。文化二年(紀元二

四六五)長尾西村和平なる人創祀せしといふ。

祭日 十月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 二十四坪 崇敬者人員 八十八人

(四六) 大地神社 長尾町大字長尾西字川北

祭神 大己貴命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社

祭日 九月六日 主なる建造物 本殿

境内坪數 三十三坪 崇敬者人員 百三十六人

(四七) 住吉神社 長尾町大字長尾西字住吉

祭神 天兒屋根命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。創祀詳ならず。安

永二年(紀元二四三三)六月長尾西村宇井手西より現在地

に移轉再建せしといふ。

祭日 九月十八日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 七十四坪 崇敬者人員 百三十六人

境内神社 地神社(天照大神 大己貴命 少彦名命 埴安

媛命 倉稻魂命) 天保十二年(紀元二五〇

一)二月の創祀といふ。

(四八) 大黒神社 長尾町大字長尾西字上森貞

祭神 大己貴命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。創祀詳ならず。明

治十年九月出雲國出雲大社支社となりたり。

祭日 九月二十二日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 五十六坪 崇敬者人員 百六十人

境内神社 地神社(天照大神 大己貴命 少彦名命 埴安

媛命 倉稻魂命) 天保六年(紀元二

四九五)創立。

(四九) 布那斗神社 長尾町大字長尾西字山ノ神

祭神 岐神

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。天保十五年(紀元

二五〇四)十二月杉山本三郎なる人の創祀に係る。後嘉永

五年二月十五日野崎清太夫遷座すといふ。

祭日 九月一日 主なる建造物 本殿

境内坪數 二坪 崇敬者人員 百三十六人

(五〇) 山神社 長尾町大字長尾西字山ノ神

祭神 大山祇命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。創祀年月詳ならず

天明四年(紀元二四四四)九月再建す。

祭日 九月六日 主なる建造物 本殿

境内坪數 九坪 崇敬者人員 百三十六人

境内坪數 三十三坪

崇敬者人員 百三十六人

(五一) 巖島神社 長尾町大字長尾西字上安松

祭神 市杵島姫命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社

祭日 九月二日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 四十二坪 崇敬者人員 二十人

(五二) 布那斗神社 長尾町大字長尾西字上安松

祭神 岐神

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社

祭日 九月一日 主なる建造物 本殿

境内坪數 二坪 崇敬者人員 五十六人

(五三) 荒神社 長尾町大字長尾西字上安松

祭神 火産靈命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社

祭日 九月六日 主なる建造物 本殿

境内坪數 三十七坪 崇敬者人員 百二十八人

(五四) 荒神社 長尾町大字長尾西字辛立

祭神 素盞男命
由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 五十坪
崇敬者人員 七十六人

(五五) 金刀比羅神社 長尾町大字長尾西字大地山

祭神 金山彦命
由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。 文政年中(紀元二四八〇頃)長尾西村佐助なる人創祀すと云ふ。
祭日 九月十日 主なる建造物 本殿

境内坪數 十二坪 崇敬者人員 七十六人
境内神社 筒井神社(太田神)

(五六) 柳木神社 長尾町大字長尾西字辛立

祭神 素盞男命
由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。 創祀詳ならず。天

(五九) 八坂神社 長尾町大字長尾西字市

祭神 素盞男命
由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社
祭日 九月九日 主なる建造物 本殿
境内坪數 三十六坪 崇敬者人員 八十人

(六〇) 瘡神社 長尾町大字長尾西字塚原

祭神 少彦名命
由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 九坪
崇敬者人員 二百八十人

(六一) 山ノ神社 長尾町大字長尾西字打越

祭神 大山積命
由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 百七十九坪
崇敬者人員 二百八十人

明五年(紀元二四四五)九月再建せしと云ふ。
祭日 九月十日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 二十六坪 崇敬者人員 百十二人

(五七) 山王神社 長尾町大字長尾西字大地山

祭神 大山積命
由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。 安永三年(紀元二四三四)長尾西村坂東治惣右衛門なる人創祀せりといふ。
主なる建造物 本殿 境内坪數 五十坪
崇敬者人員 六十四人

(五八) 大宮神社 長尾町大字長尾西字大地山

祭神 經津主命
由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。 創祀詳ならず。明治二十六年拜殿を新築す。

祭日 九月九日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 二百四十三坪 崇敬者人員 五十二人

(六二) 金刀比羅神社 長尾町大字長尾西字千原

祭神 金山彦命
由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 三十六坪
崇敬者人員 六十人

(六三) 八幡神社 長尾町大字長尾東字菜園

祭神 譽田天皇
由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 百坪
崇敬者人員 三十人

(六四) 金刀比羅神社 長尾町大字長尾東字將基

祭神 金山彦命
由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社
祭日 九月一日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 三十坪 崇敬者人員 二百六十人

(六五) 八坂神社 長尾町大字長尾東字將基

祭神 素盞鳴命
由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社
祭日 九月五日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 十三坪 崇敬者人員 二十四人

(六六) 荒神社 長尾町大字長尾東字本村

祭神 國常立尊
由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社
祭日 九月二十八日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 二十一坪 崇敬者人員 二十一人

(六七) 荒神社 長尾町大字長尾東字川西

祭神 素盞鳴命
由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社
祭日 九月十三日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 八十八坪 崇敬者人員 三十二人

(七一) 伊勢神社 長尾町大字長尾東字谷吉

祭神 大日靈命
由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社
祭日 九月十一日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 七十坪 崇敬者人員 三十七人

(七二) 女體神社 長尾町大字長尾東字楳ヶ上

祭神 豊玉姫命
由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 二十六坪
崇敬者人員 三十五人

(七三) 谷吉神社 長尾町大字長尾東字谷吉

祭神 大山祇命
由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社
祭日 九月十一日 主なる建造物 本殿
境内坪數 七十坪

(六八) 蛭子神社 長尾町大字長尾東字尾崎

祭神 大物主命(一に曰 事代主命)
由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社
祭日 九月一日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 二十坪 崇敬者人員 十三人

(六九) 八坂神社 長尾町大字長尾東字玉田

祭神 稻田姫命
由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社
祭日 八月七日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 二百九十五坪 崇敬者人員 四十八人

(七〇) 山神社 長尾町大字長尾東字谷吉

祭神 大山祇命
由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社
祭日 九月十一日 主なる建造物 本殿
境内坪數 二十四坪

(七四) 多和神社 長尾町大字前山字道 (大多和)

祭神 大己貴命(一に曰 多和神 大己貴命)
由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。創祀の年月詳ならず。世俗大田尾明神と稱す。全讚史、生駒記等は當社を以て延喜式内讚岐國寒川郡多和神社なりとす。祭神多和神は讚岐忌部氏の祖神手置帆負命にして、



多和神社

往古前山村及奥山村

(現今の多和村)を稱して多和郷と稱し、地名を以て神名となせしものにして、此の例何れにも多しといへり。社記に『大和國大三輪大神ヲ淳仁天皇ノ御宇天長元年(紀元一四八四)六月讃岐國寒川郡多和郷ニ眞言宗祖空海並ニ藤原左太夫政富奉勸請則多和大明神奉號』とあり。又『醍醐天皇御宇延喜年中本朝神社御改之時祠官藤原政明以地名一奉神號多和一式内神云々』ともあり。全讚史に『多和神社在二前山村大多和一極樂寺記云 延喜八月夏四月多和社箕野彦社立是蓋謂列二官社也今只礎石存而内有二小祠』と見ゆ。永承元年後冷泉天皇勅して佛舍利を賜ひしことありといふ。中古盛んにして永承四年六月、治曆四年二月、治承二年九月、乾元元年四月、永徳二年、永正二年、文録二年、寛永十二年、萬治元年夫々社殿再建ありしも、延寶、天和の頃より衰微して其の所在すら世に忘らるゝに至れり。文政二年高松藩主松平頼恕社地二畝餘歩の寄進あり。大正十四年十月現社殿を改築せり。(三代物語 生駒記 全讚史 名勝圖會 讃州府志 式社考 官社考證)

祭日 九月九日 主なる建造物 本殿 釣屋 拜殿
境内坪數 百四坪 崇敬者人員 約八百三十人

(七五) 青木神社 長尾町大字前山字青木

祭神 高淤賀美神

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社。創祀詳ならず。夏季旱魃の時社前に於て大焚火をなし、参拜者裸踊をなせば慈雨直ちにありとて夏季は参拜者頗る多し。

祭日 九月十日 主なる建造物 本殿
境内坪數 六十七坪 崇敬者人員 百五十人

(七六) 伊勢神社 長尾町大字前山字山田

祭神 大日靈命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社

祭日 九月十六日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 四十六坪 崇敬者人員 四百人

(七七) 大石神社 長尾町大字前山字中石

祭神 天忍穗耳命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社

祭日 九月七日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 二十坪 崇敬者人員 二百四十人

(七八) 來栖神社 長尾町大字前山字來栖

祭神 思兼命

由緒 長尾町郷社宇佐神社境外末社

祭日 九月十五日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 七十八坪 崇敬者人員 百二十人

五 志 度 町

(七九) 郷多和神社 志度町大字志度字越窓

祭神 速秋津姫命 相殿 大軻和氣命 帶仲津彦命
天照大日靈尊 息長帶姫命 大雀尊 倭武尊

由緒 延喜式内讃岐國二十四座の一にして延喜神名式に『讃岐國寒川郡小多和神社』とありて鎮座の年代は遠く神代に屬すと云ふ。社記によれば、神代の昔速秋津姫命多和の渚に來りまして、この水門は潮いと深くして我が心須美戸

と宣ひ此處に止まり給ふ。去るに及びて土人大久支古に眞澄鏡を授け給ひて、こを我が御魂と取託て多和の水門を祓戸と定め、國人此處に集ひて祓せば犯せる罪も自ら失せなむ。又沖行く五百船千船を守らむと宣たまひき。こゝに其の御鏡を御魂實として多和大神と鎮めましきと云ふ。志度の地古くは多和と稱し、玉の浦は多和の浦の轉訛にして、讚留靈記の附録にも多和神社志度村多和志度舊名なりとあり。讚岐新撰風土記に、古事記垂仁天皇の條に自山多和引越御船云々とあるを引きて多和の名は地形より起れるものなるべしと云ひ、又郡郷疏證に志度浦一名玉浦玉多和一聲相近互志度東末西末三邑稱志度郷是古郷域也とあるを引きて一郷の鎮守は多和神社なりと云へり。三代實録に『元慶元年三月四日乙巳授讚岐國從五位下多和神從五位上』とあり。延長元年祝從七位岡田吉守記する所の社記には、仁壽元年始めて正六位上を授けられ、延喜八年に國司の請によつて從三位に叙せられ同二十一年明神の列に預らせ給ふとあり。寛平六年大祝讚岐朝臣春雄が神託によりて相殿六柱の神を奉齋してより多和八幡宮と稱せらる。當社は當國三の宮にして土人今尙三の宮と呼ぶ。古くは志度寺の傍に鎮座せしが文明十一年兵火に罹り、元和九年志

度寺住職園養これを現今の地に遷座し、百姓彦太夫をして奉仕せしめたること志度寺文書八幡宮由來之事、志度寺縁起閣推記等に見ゆ。又寛永二十一年國主松平頼重志度寺造營のせつの遷座とも云へり。志度大宮とも稱せられ、生駒家分限帳に社領十石志度之宮とあり。慶長年中生駒近規の社殿造營あり、松平頼重の神輿寄進等あり。高松藩家老大久保家の崇敬殊に厚かりき。

明治四年郷社に列せられ、同四十年九月二十一日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(延長社記 三代物語 全讚史 名勝圖會 讚岐新撰風土記 官社考證 讚州府志)

例祭日 十月三日

主なる建造物 本殿 拜殿 中門 炊殿 連子塀 神馬舎

隨神門 寶藏 手水舎

寶物 緣起書岡田吉守撰 采配加藤清正寄附 畫菅原道真筆 外三點

境内坪數 六千三百四十三坪

氏子區域及戸數 志度町 千三百九十五戸

境内神社

連岳神社(大山咋神)日本紀略に「延喜六年二月七日授讚岐國連岳神從五位下」とあるは當社ならむかと云ふ。又大日本史神祇志に「連岳神社今在寒川郡一在多和神社域内一稱山王權現一舊號連岳明神蓋是」とあり。

高良神社(武内宿禰命)

合上筒男命 中筒男命 底筒男命

明治四十四年境内神社なりし住吉神社を合祀す。

高田神社(不詳)

春日神社(天照大神)

松尾神社(大山咋命)

中野神社(天御中主神)

祓戸神社(祓戸四柱神)

嚴島神社(市伎島姫神)

合官神社(不詳)

明治四十年頃村内小祠を合祀せしものなり。

山田神社(大山積命)

事平神社(大物主神 崇徳天皇)

(八〇) 久那斗神社

志度町大字志度字越窓

祭神 都岐多都久那登乃神

由緒 志度町郷社多和神社境外末社。讚州府志に岐神社とあり。

祭日 九月四日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 六十二坪 崇敬者人員 三百八十人

(八一) 濱神社

志度町大字志度宅珠橋

祭神 少彦名神

由緒 志度町郷社多和神社境外末社

祭日 九月十日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 九十一坪 崇敬者人員 百八十人

(八二) 蛭子神社

志度町大字志度字珠橋

祭神 事代主神

由緒 志度町郷社多和神社境外末社

祭日 九月十日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 十七坪五合 崇敬者人員 三十五人

(八三) 八坂神社

志度町大字志度字御所

祭神 素戔鳴命

由緒 志度町郷社多和神社境外末社

祭日 六月七日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 百三十一坪 崇敬者人員 三十五人

(八四) 稻荷神社

志度町大字志度字稻荷越

祭神 倉稻魂命

由緒 志度町郷社多和神社境外末社。名勝圖會に「稻荷

社」とあり。明治三十九年拜殿を改築す。

祭日 九月十四日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 十九坪 崇敬者人員 二百五十人

(八五) 天野神社

志度町大字志度字八ッ池

祭神 天之御中主神

由緒 志度町郷社多和神社境外末社

祭日 八月二十日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 二十五坪 崇敬者人員 二百五十人

(八六) 若宮神社

志度町大字志度字田中

祭神 若宮賣神

由緒 志度町郷社多和神社境外末社

祭日 九月七日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 百三坪 崇敬者人員 百二十人

境内神社 蛭子神社(事代主神)初め同字六百一番地に鎮座ありしを大正十四年境内に移す。

(八七) 事平神社 志度町大字志度字越窓

祭神 大物主神 崇徳天皇
由緒 志度町郷社多和神社境外末社
祭日 九月十日 主なる建造物 本殿
境内坪数 二十一坪 崇敬者人員 三十五人

(八八) 神藪神社 志度町大字志度字寺町

祭神 火産靈神
由緒 志度町郷社多和神社境外末社
祭日 八月二十八日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪数 三十七坪 崇敬者人員 三百四十五人

(八九) 事平神社 志度町大字志度字石立

祭神 大物主神 崇徳天皇
由緒 志度町郷社多和神社境外末社
祭日 九月九日 主なる建造物 本殿
境内坪数 五坪 崇敬者人員 四百八十人

(九三) 石槌神社 志度町大字志度字八ッ池

祭神 不詳(一に曰 石槌彦命 石槌姫命)
由緒 志度町郷社多和神社境外末社
祭日 八月十五日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪数 三十三坪 崇敬者人員 六十五人

(九四) 大將軍神社 志度町大字志度字大將軍

祭神 不詳(一に曰 素盞鳴命)
由緒 志度町郷社多和神社境外末社
祭日 九月十一日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪数 百三十三坪 崇敬者人員 七十八人

(九五) 金峰神社 志度町大字志度字小坂

祭神 不詳(一に曰 天之御中主命 高皇産靈神 神皇産靈神)
由緒 志度町郷社多和神社境外末社
祭日 九月一日 主なる建造物 本殿

(九〇) 吉田神社 志度町大字志度字正面

祭神 天照大神
由緒 志度町郷社多和神社境外末社
祭日 九月十五日 主なる建造物 本殿
境内坪数 八坪 崇敬者人員 七十五人

(九一) 石槌神社 志度町大字志度字雨乞山

祭神 不詳(一に曰 石槌彦命 石槌姫命)
由緒 志度町郷社多和神社境外末社
祭日 八月十四日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪数 三十五坪 崇敬者人員 七十八人

(九二) 藤井荒神 志度町大字志度字鬼山

祭神 火産靈神
由緒 志度町郷社多和神社境外末社
祭日 九月九日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪数 二百四十坪 崇敬者人員 百十八人

境内坪数 四十二坪 崇敬者人員 二百八十人

(九六) 梅ノ宮神社 志度町大字志度字雨乞山

祭神 菅原道真公
由緒 志度町郷社多和神社境外末社。名勝圖會に「祭神木花咲姫命」とあり。
祭日 八月十八日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪数 五十五坪 崇敬者人員 八十六人

(九七) 塩竈神社 志度町大字志度字鹽屋

祭神 鹽土翁
由緒 志度町郷社多和神社境外末社。名勝圖會に「塩竈大明神……祭禮九月六日」と見ゆ。
祭日 九月五日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪数 二百二十八坪 崇敬者人員 三百十六人

(九八) 菅原神社 志度町大字末字西内間

祭神 菅原道真公

由緒 志度町郷社多和神社境外攝社。末天神と稱され末村の總鎮守として里人の崇敬厚く、寶曆神社帳に『志度郷末西村鎮守天満宮』とあり。境内老松大樑鬱蒼として樹齡何れも數百年を経たるものなり。(名勝圖會 大川郡誌)
祭日 八月二十五日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 四百六十六坪 崇敬者人員 約三百人

(九九) 高峰神社 志度町大字末字西内間

祭神 霽神 水分神

由緒 志度町郷社多和神社境外末社

祭日 九月五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 五坪 崇敬者人員 六十人

(100) 岡田神社 志度町大字末字東内間

祭神 岡田長祖

由緒 志度町郷社多和神社境外末社。岡田臣牛養の創祀

と傳へられ岡田一族の氏神たりしが、後舊末村の鎮守神となれり。牛養は續日本紀に『延暦十年十二月丙申讚岐國寒

川郡人外從五位上佐婆部牛養等云、牛養先祖出自紀田島宿禰。田島宿禰孫米多臣難波高津宮御宇天皇御世從周芳遷讚岐國。然後遂爲佐婆部首……牛養等居處在寒川郡岡田村。臣望賜岡田臣之姓。於是牛養等戶二十畑依請賜之」とありて後大學博士となり僧空海の師たりし人なり末村は古くは岡田村と云ひしなり。(讚州府志 今名勝圖繪)
祭日 八月二十三日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 三十九坪 崇敬者人員 七十人

(101) 山上神社 志度町大字末字東内間

祭神 大山祇命

由緒 志度町郷社多和神社境外末社

祭日 八月二十三日 主なる建造物 本殿

境内坪數 三十坪 崇敬者人員 六十人

(101) 若宮神社 志度町大字末字東内間

祭神 仁徳天皇

由緒 志度町郷社多和神社境外末社。由緒詳ならず。名

勝圖會に『若宮八幡宮 東末村にあり祭禮九月二十四日』と見ゆ。

祭日 八月二十四日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 百四十九坪 崇敬者人員 六十人

(101) 荒神社 志度町大字末字東内間

祭神 素戔鳴命

由緒 志度町郷社多和神社境外末社

祭日 八月二十八日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 三十六坪 崇敬者人員 五十人

(101) 荒神社 志度町大字末字東内間

祭神 素戔鳴命

由緒 志度町郷社多和神社境外末社

祭日 八月二十八日 主なる建造物 本殿

境内坪數 三十一坪 崇敬者人員 六十人

(105) 丸尾神社 志度町大字末字山田

祭神 速秋津姫命

由緒 志度町郷社多和神社境外末社。由緒詳ならず。本

社多和神社の舊地なりとの口碑あり。名勝圖會に『丸尾八幡宮西末村にあり祭禮九月十三日』と見ゆ。

祭日 九月十三日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 三十坪 崇敬者人員 百五十人

(106) 琴平神社 志度町大字末字山田

祭神 大國主神

由緒 志度町郷社多和神社境外末社

祭日 九月十日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 十四坪 崇敬者人員 八十人

六津田町

(108) 郷社 石清水神社 津田町字琴林

祭神 譽田別尊 息長足姬尊 玉姬命

由緒 天曆四年(紀元一六一〇)三月山城國石清水八幡宮の分靈を鶴羽郷津田村神野の地に奉祀して一郷の産土神となすといふ。一説に宇佐八幡宮より奉遷すとも云ひ、或は承和年中の創祀なりともいへり。全讃史に『往昔安富肥前守盛方爲三城鬼門守護、從三豐洲宇佐、迎之立祠焉』とあり。名勝圖會に『當社は承和年中勸請なり』と見ゆ。天正十一年兵火に罹り社殿殆ど焼失せしが、文祿元年八月再建す。津田の地上古は入海にして東瀛の要津なりしが、漸次陸地となり開拓して田畑となる。津田の名はこれによりて起れり。其の後耕地漸く増加するに及び灌溉水に乏しく、慶長に至りて早魃打續き里人愈水に窮し遂に國守生駒雅樂頭に溜池の新設を請願す。かくて當社の鎮座地其の選に當り附近の社有地十四石を合せてこれを溜池となす。これ現今の御座田池なりとす。是に於てその代地として海岸一帯の地

を附與せられ、氏子等相謀り松樹數萬本を植栽して神域を造り慶長五年三月遷座す。即ち現今の鎮座地にして、氏子等の植栽に係る松樹は大成して津田の松原の名を得るに至れり。因て社號を松原八幡宮とも稱せり。これより前生駒氏社領三石六斗の寄進あり、松平氏亦崇敬厚く先規に依り社領を寄進せり。元祿五年二月藩主松平頼常國內巡檢の砌津田沖にて難風に遭遇せしが當社の恩頼により難を免ると傳ふ。

明治四年五月郷社に列せられ、同四十年九月二十一日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。

大正四年境内外社有地四萬八千坪は公園地となり香川縣の保管となる。これ琴林公園にして縣下第一の松原なり。老松何れも奇趣百態根脚躍るが如く白砂の上に盤屈し、松籟潮聲と和して正に天女の琴を奏するに似たり。これによりて琴林と號す。白鳥の松原と共に其の名甚だ高し。(三代物語 全讃史 名勝圖會 讚州府志 琴林碑)

例祭日 十月六日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神門 神輿庫 社務所 通夜殿 手洗舎

寶物 三十六歌仙額 木造高麗犬 外五點

境内坪數 二千〇三十五坪

氏子區域及戸數 津田町 鶴羽村 千八百戸

境内神社 琴林神社(保食命 倉稻魂命 猿田彦命)

琴林神社(天兒屋根命 菅原道眞公 仁徳天皇)

(109) 加茂神社 津田町字琴林

祭神 別雷神

由緒 津田町郷社石清水神社境外攝社。當社は元長町家の鎮守神として代々その邸内に奉祀せらる。長町家は世々津田に居り郷正たり。元祿初年長町與左衛門(七代)の時、八幡宮(郷社石清水神社)境内に遷座せり。今は境外となれるも現今の鎮座地即ちこれなり。名勝圖會に『加茂大明神 同所(津田松原)にあり 社僧常樂坊 祭禮五月五日』と見ゆ。祭日 十月八日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 境内坪數 四百六十一坪 崇敬者人員 二千五百人

(110) 金刀比羅神社 津田町字琴林

祭神 金山彦命

を附與せられ、氏子等相謀り松樹數萬本を植栽して神域を造り慶長五年三月遷座す。即ち現今の鎮座地にして、氏子等の植栽に係る松樹は大成して津田の松原の名を得るに至れり。因て社號を松原八幡宮とも稱せり。これより前生駒氏社領三石六斗の寄進あり、松平氏亦崇敬厚く先規に依り社領を寄進せり。元祿五年二月藩主松平頼常國內巡檢の砌津田沖にて難風に遭遇せしが當社の恩頼により難を免ると傳ふ。

明治四年五月郷社に列せられ、同四十年九月二十一日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。

大正四年境内外社有地四萬八千坪は公園地となり香川縣の保管となる。これ琴林公園にして縣下第一の松原なり。老松何れも奇趣百態根脚躍るが如く白砂の上に盤屈し、松籟潮聲と和して正に天女の琴を奏するに似たり。これによりて琴林と號す。白鳥の松原と共に其の名甚だ高し。(三代物語 全讃史 名勝圖會 讚州府志 琴林碑)

例祭日 十月六日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神門 神輿庫 社務所 通夜殿 手洗舎

寶物 三十六歌仙額 木造高麗犬 外五點

由緒 津田町郷社石清水神社境外末社

祭日 陰曆九月九日 主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 十八坪 崇敬者人員 百六十人

(110) 惠美須神社 津田町字蟹甲

祭神 事代主命

由緒 津田町郷社石清水神社境外末社

祭日 陰曆十月九日 主なる建造物 本殿 巢屋 拜殿 境内坪數 三十一坪五合 崇敬者人員 七百人

(111) 稻荷神社 津田町字蟹甲

祭神 倉稻魂命

由緒 津田町郷社石清水神社境外末社

祭日 陰曆六月十二日 主なる建造物 本殿 境内坪數 二十六坪 崇敬者人員 三百人

(112) 惠美須神社 津田町字蟹甲

祭神 事代主命

由緒 津田町郷社石清水神社境外末社
祭日 陰曆六月三日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十一坪 崇敬者人員 千三百人

(二三) 猿田彦神社 津田町字蟹甲

祭神 猿田彦命
由緒 津田町郷社石清水神社境外末社
祭日 陰曆六月八日 主なる建造物 本殿
境内坪數 二十六坪 崇敬者人員 千百人

(二四) 八坂神社 津田町字蟹甲

祭神 素戔鳴命
由緒 津田町郷社石清水神社境外末社
祭日 陰曆六月十三日 主なる建造物 本殿 巢屋 拜殿
境内坪數 五十八坪 崇敬者人員 三百五十人
境内神社 惠美須神社(事代主命)

(二五) 金刀比羅神社 津田町字蟹甲

祭神 大物主命

由緒 津田町郷社石清水神社境外末社
祭日 陰曆九月九日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 十九坪 崇敬者人員 七百人

(二六) 愛宕神社 津田町字蟹甲

祭神 火結命
由緒 津田町郷社石清水神社境外末社
祭日 陰曆六月十一日 主なる建造物 本殿
境内坪數 九十四坪 崇敬者人員 五百人

(二七) 金刀比羅神社 津田町字蟹甲

祭神 大物主命
由緒 津田町郷社石清水神社境外末社
祭日 陰曆九月九日 主なる建造物 本殿 巢屋 拜殿
境内坪數 八十六坪 崇敬者人員 七百人

(二八) 皇帝神社 津田町字蟹甲

祭神 孝明天皇

(二九) 惠美須神社 津田町字北上所

祭神 事代主命
由緒 津田町郷社石清水神社境外末社
祭日 陰曆六月廿二日 主なる建造物 本殿
境内坪數 六十五坪 崇敬者人員 七百人
境内神社 吉田神社(天神地祇)

(三〇) 荒魂神社 津田町字北上所

祭神 軻遇突智命
由緒 津田町郷社石清水神社境外末社
祭日 十月七日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 二十八坪 崇敬者人員 三十五人

(三一) 野神社 津田町字雨瀧

祭神 埴安命
由緒 津田町郷社石清水神社境外末社
主なる建造物 本殿 拜殿

祭日 陰曆九月十日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 社務所
境内坪數 四百七十七坪 崇敬者人員 千三百人

(二九) 北峰神社 津田町字平畑

祭神 金山彦命(一に曰 金山彦命 金山姫命)
由緒 津田町郷社石清水神社境外攝社。弘仁年間空海此の地に巡錫し北峰山上に一字を建立して峰寺と號し、當社を以て其の守護神となすといふ。世俗北峯權現、或は上野權現とも稱ふ。全讚史に『上野大權現在津田北山上土人云昔北山上有峯寺大伽藍也是則爲其鎮守』と見ゆ。天正十一年長曾我部元親雨瀧城を攻む。峰寺其の兵火に罹り堂宇灰燼に歸せしが、獨り當社は其の難を免れたり。元祿二年山上より現今の地に遷座せり。(讚州府志)

境内坪數 四十五坪 崇敬者人員 八十人

(三三) 金刀比羅神社 津田町字雨瀧

祭神 大物主命

由緒 津田町郷社石清水神社境外末社

祭日 陰曆九月九日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 三十五坪 崇敬者人員 三百人

(三四) 山神社 津田町字御座田

祭神 大山祇命

由緒 津田町郷社石清水神社境外末社

祭日 陰曆九月七日 主なる建造物 本殿

境内坪數 八十六坪 崇敬者人員 八十五人

(三五) 鬼仙神社 津田町字御座田

祭神 醜女神

由緒 津田町郷社石清水神社境外末社

由緒 津田町郷社石清水神社境外末社

祭日 陰曆九月十二日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 八十一坪 崇敬者人員 三百人

(三六) 菅原神社 津田町字上川北

祭神 菅原道真公

由緒 津田町郷社石清水神社境外末社。名勝圖會に「天

滿宮川北にあり、社僧實相寺」と見えたり。大正十二年炎

上、大正十五年本殿・幣殿・拜殿を新築す。

祭日 十月十五日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 八十坪 崇敬者人員 五百人

(三七) 惠美須神社 津田町字會根

祭神 事代主命

由緒 津田町郷社石清水神社境外末社

祭日 陰曆正月十日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 十坪 崇敬者人員 二百五十人

祭日 陰曆九月九日 主なる建造物 本殿
境内坪數 六十七坪 崇敬者人員 五十人

(三八) 吳羽神社 津田町字御座田

祭神 栲機千々姫命

由緒 津田町郷社石清水神社境外末社

祭日 陰曆九月十三日 主なる建造物 本殿

境内坪數 二十五坪 崇敬者人員 三十人

(三九) 金刀比羅神社 津田町字流田

祭神 大物主命

由緒 津田町郷社石清水神社境外末社

祭日 陰曆九月九日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 百四十四坪 崇敬者人員 二百人

境内神社 蛭子神社(事代主命)

(四〇) 松尾神社 津田町字北山前坂

祭神 大山咋命

七相生村

(四一) 小坂神社 相生村大字坂元字小坂

祭神 不詳(一に曰 猿田彦神)

合祀祭神 大山祇神

由緒 引田町郷社譽田神社境外末社。明治四十一年字小坂

山祇神社を合祀す。

祭日 十月十二日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 二千五百十七坪 崇敬者人員 約五百人

(四二) 地主神社 相生村大字坂元字本村

祭神 速玉男神 伊弉諾尊 事解男神

合祀祭神 大山祇神 少名毘古那命

由緒 引田町郷社譽田神社境外末社。名勝圖會に「地主

大明神 同所(中山)にあり」と見え。又官社考證附録國榮神

社の條に「日本紀略云延喜六年二月七日授讚岐國國榮神從

五位……或人大内郡坂元村に地主神と云がある

を國榮神ならむと云へどいかにあらむ」と見えたり。

明治四十一年
字大山祇
谷山祇
神社、字小
坂
隨神社を合
祀す。合祀
神社隨神社
は名勝圖會
に「隨神大
明神 同所
(中山)にあ
り、祭神少
彦名命」と
見ゆ。

祭日

十月十二日

主なる建造物

本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 三十三坪

崇敬者人員 約六百人



地主神社

(二三) 杉尾神社

相生村大字南野字庄原

祭神 大己貴命

合祀祭神 軻遇突智命 大山祇神

由緒 引田

町郷社譽田

神社境外末

社。明治四

十一年字畑

愛ノ谷神社

字宗山祇神

極社を合祀す

祭日

十月十九日

主なる建造物

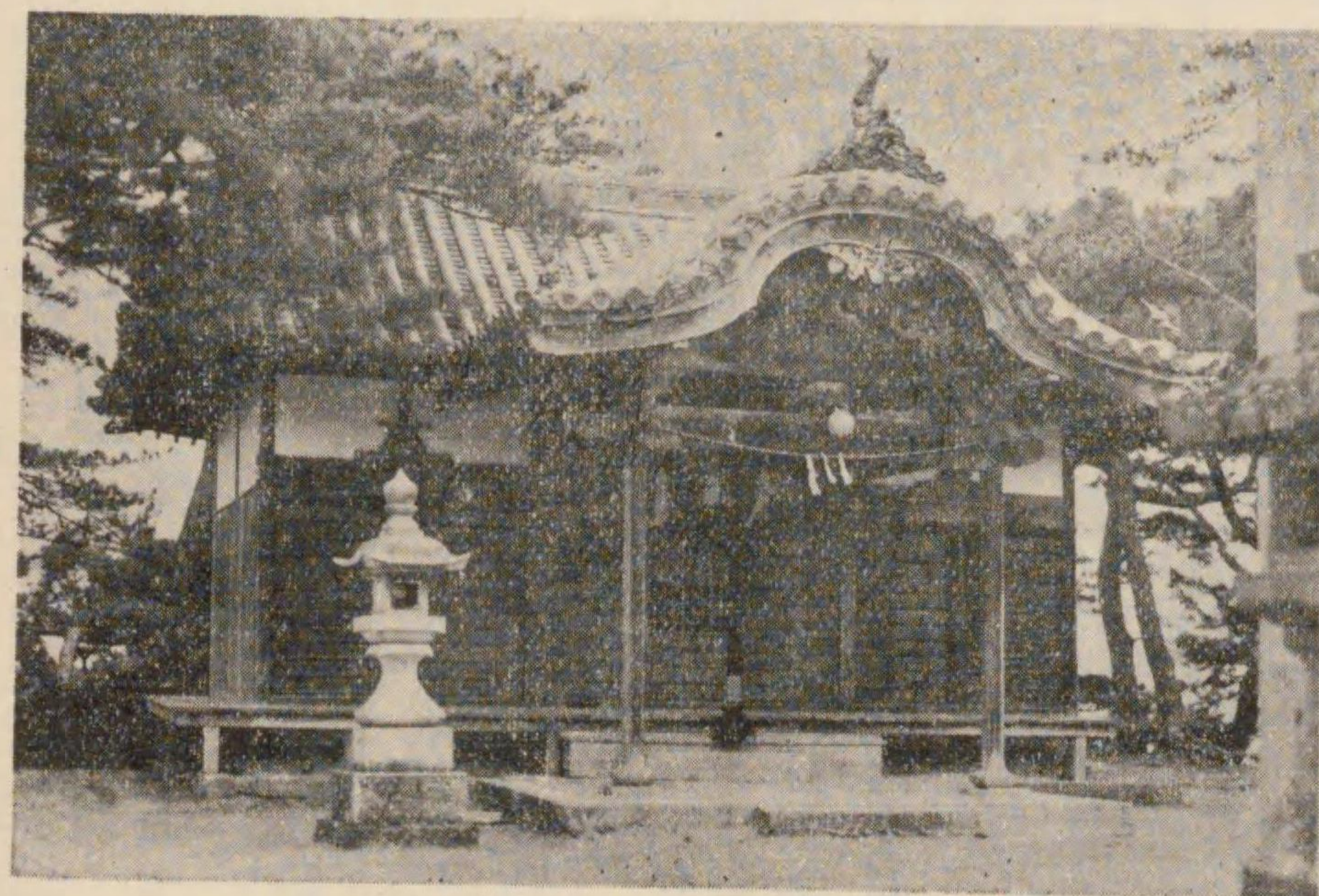
本殿 上幣

殿 下幣殿

拜殿 御馬

舍 社務所

神輿庫



杉尾神社

境内坪數 千五百十五坪

崇敬者人員 約五百人

(二四) 黒羽神社

相生村大字黒羽字下内

祭神

天御中主命

合祀祭神

素戔鳴命

菅原道眞

公

天鈿女命

開嚙神

大山祇命

大己貴命

奥津彦命

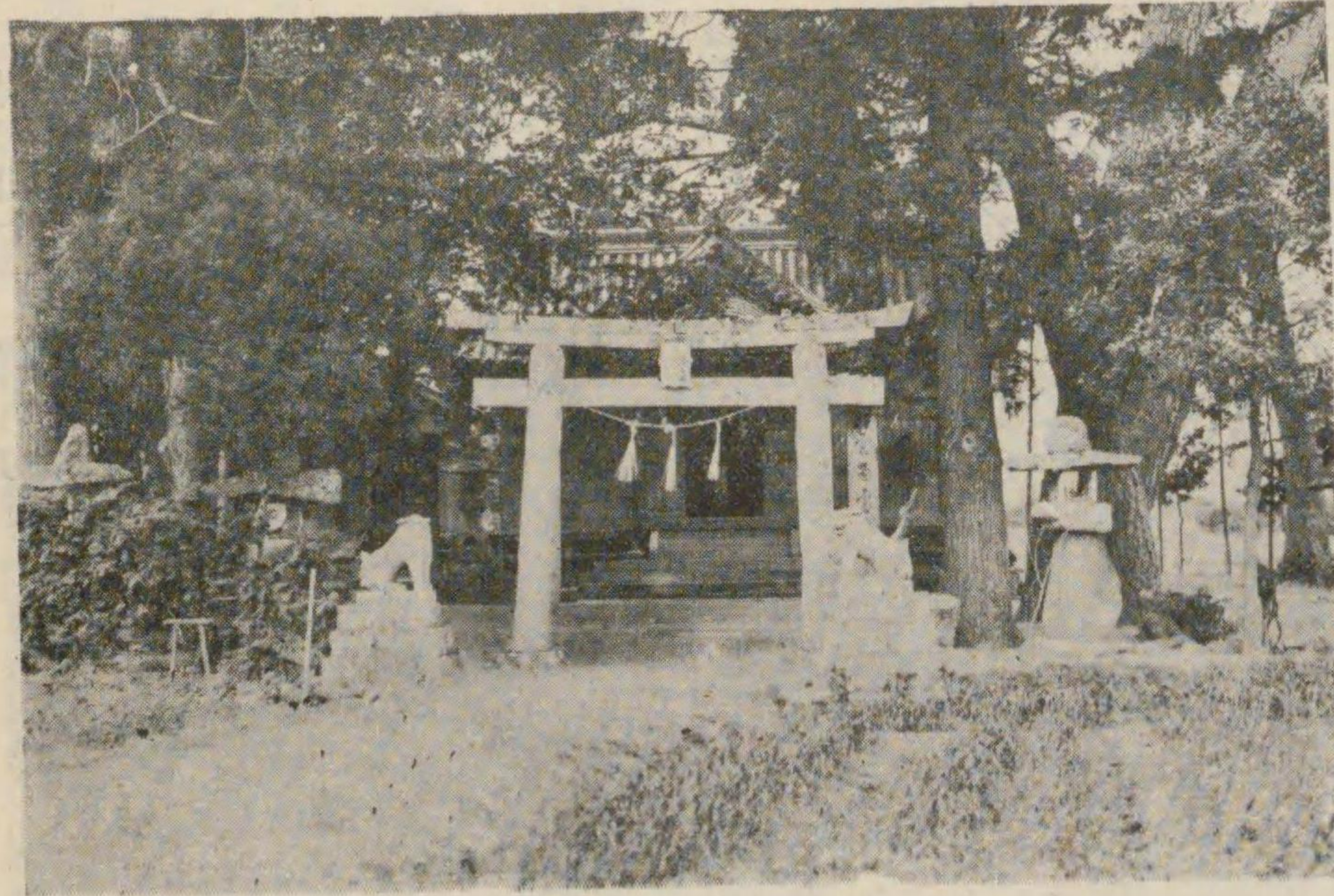
由緒 引田

町郷社譽田

神社境外末

社。古老

の傳ふる所



黒羽神社

(二五) 住吉神社

相生村大字馬宿字下所

祭神 底筒男命 中筒男命 上筒男命

合祀祭神 事代主命 譽田別命(一に曰 大山祇神をも合祀す)

由緒 引田町郷社譽田神社境外末社。

明治四十一年
字下事代
主神社、假
屋敷神社を
合祀す。

祭日

七月二十日

主なる建造物

本殿

幣殿

拜殿

境内坪數

五百八十九

坪

崇敬者人員

約六百人



住吉神社

(二五) 川股神社

相生村大字川股字上所

祭神 菅原道真公 住吉大神 大山祇神

合祀祭神 仁徳天皇

由緒 引田町郷社譽田神社境外攝社。 承保三年(紀元一七三六)四月の創祀と傳ふ。

明治四十一年^{字川}山神社を、昭和三年^{字上}山祇神社。若

宮神社を合祀す。

祭日

十月十一日

主なる建造物

本殿

幣殿

拜殿

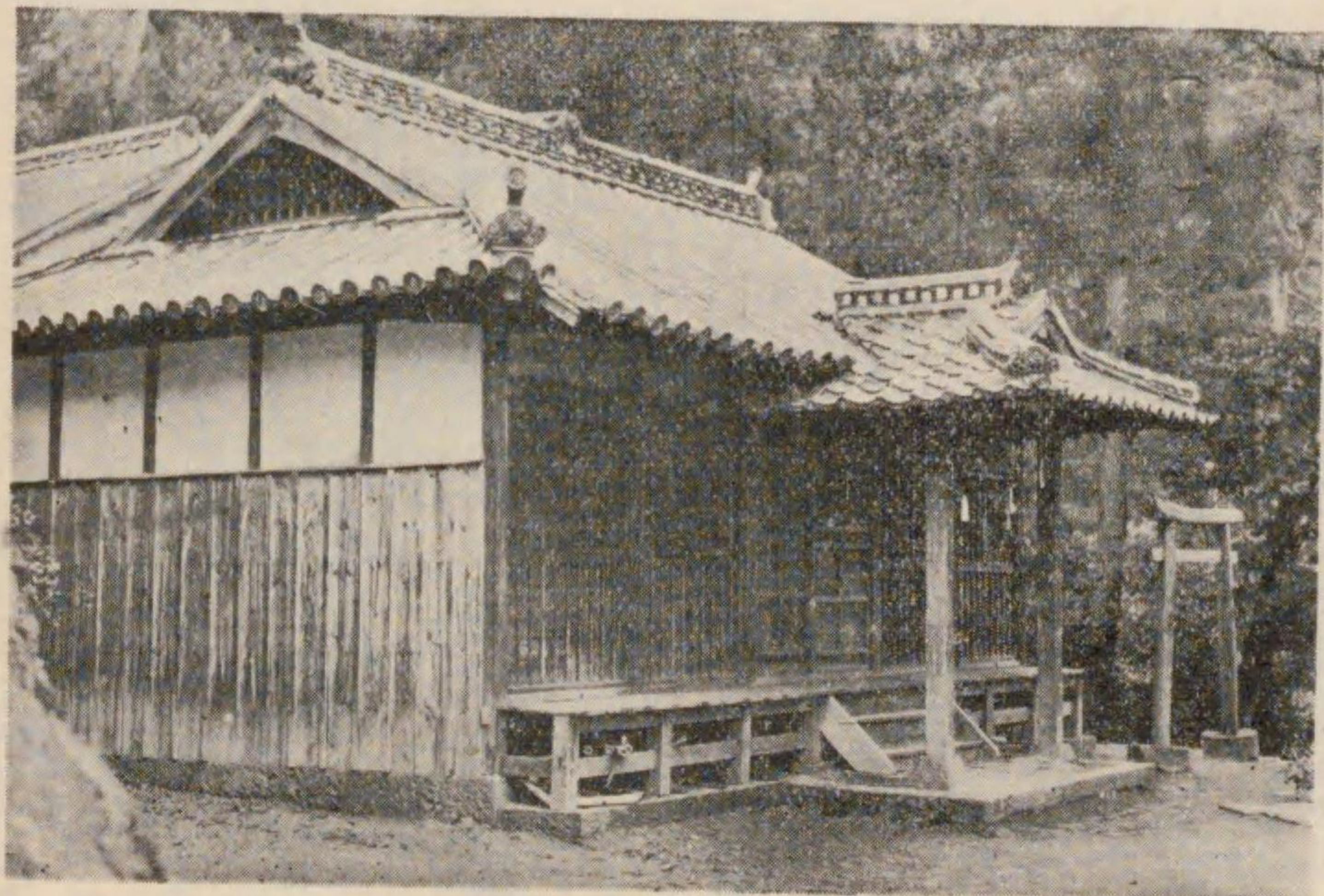
境内坪數

七百六十四

坪

崇敬者人員

約五百人



川股神社

(二六) 二宮神社

相生村大字吉田字苅畑

祭神 菟道稚郎子命

合祀祭神 素戔鳴尊 大山祇神

由緒

引田町

郷社譽

田神社

境外攝

社。

承保二年

(紀元一七三五)三月

の創祀なり

といひ、或

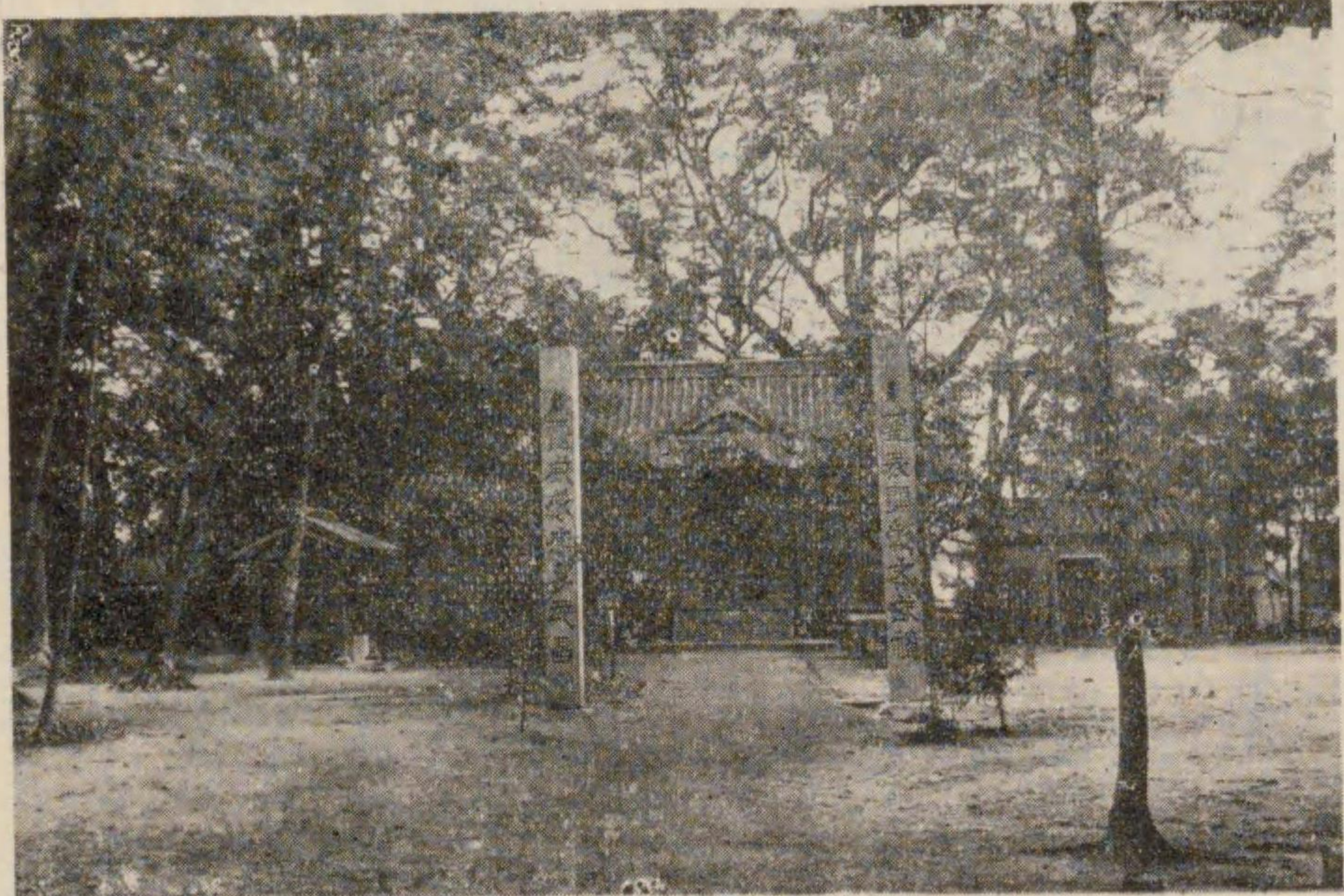
は是は再營

の訛傳なる

べしといふ

古來王子權

現、二宮明



二宮神社

(二七) 石神社

相生村大字川股字川西

祭神 不詳(一曰 布都御魂神)

合祀祭神 大山祇神

由緒 引田町郷社譽田神社境外末社。

明治四十一年^{字下}山祇神社、^{字千}山神社・山神神社を合祀、

翌四十二年^{字千}石神社・石神神社を合祀す。

祭日 十月十一日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 四百三十三坪 崇敬者人員 約三百五十人

大川郡

神或は吉田神社の稱ありて吉田村の鎮守神たりき。譽田神社舊記によれば、八幡宮御鎮座地を引田と唱へ、賑田に第一別宮若宮を祀り、吉田には第二別宮若郎子御社を建つとあり、第二の別宮は即ち當社にして二宮の稱ここに起るといへり。又縣社水主神社々傳には吉田社は水主神御巡遊の靈跡にして同社の別宮たるを以て二宮と稱すと云ふ。境内櫻樹多く吉田花見とて春季には參拜者頗る多かりきと。

(名勝圖會 官社考證追録 大川郡誌)

明治四十一年^{宇鹿}庭山祇神社、^{字刈}八坂神社を合祀せり。

祭日 十月九日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 御供舎 火舎
境内坪數 千六百〇六坪 崇敬者人員 約四百人

八小海村

(三三) 村 成松神社 小海村字荒井

祭神 大己貴命

合祀祭神 素戔鳴命 大物主命

稱シ今尙小祠ノ存スト云ヘリ。抑此傳説タル者ハ板野郡北部小鳴戸海峽ノ口ニ當ル堂ノ浦ヨリ明神村附近ハ讚岐大内郡ニ屬セリ。然ルヲ阿波ノ國守漫リニ法ヲ破リ神木ヲ伐採セシカバ村民怒テ神體ヲ擁シテ小海村ニ來住セシモノナラシ」とあり。名勝圖會又この事を載せたり。

大正五年五月十九日村社に列せられ、同年十一月神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(名勝圖會 大川郡誌)

明治四十一年^{宇鹿}庭山祇神社を合祀す。

例祭日 十月十六日

主なる建造物 本殿 上幣殿 幣殿 拜殿 神輿庫 社務所
手水舎

寶物 小刀 ^{松平賴重寄附。傳相模正宗。本間彌十郎左衛門親佐折紙付} 槍 ^{引田城主生} 駒 ^{氏寄附} 外七點

境内坪數 七百四十八坪

崇敬者戸數 二百三十戸

(四〇) 菅原神社 小海村字近守

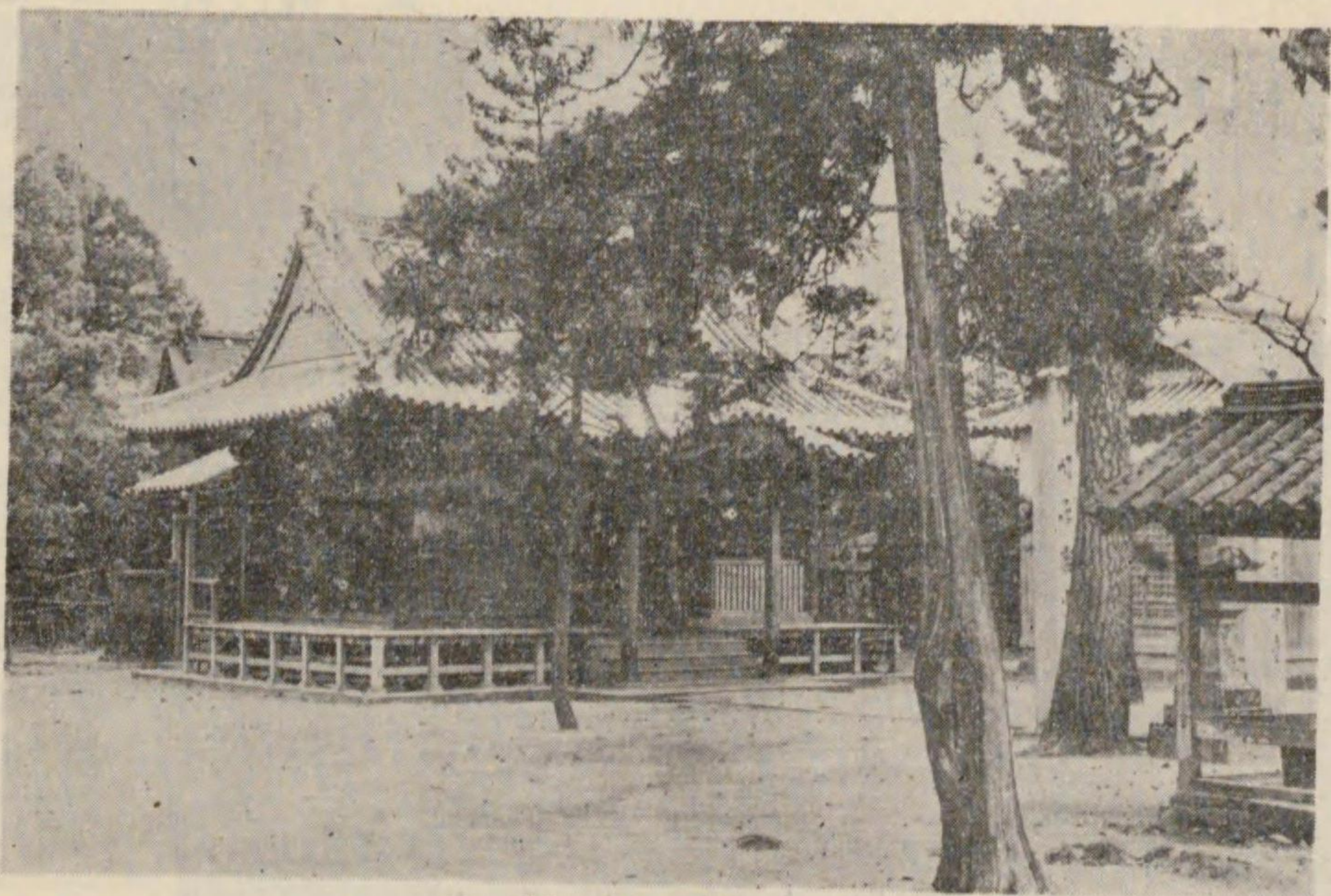
祭神 菅原道眞公(一に曰 菅原道眞公 大山祇神)

由緒 引田町郷社譽田神社境外末社

祭日 九月二十五日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 十四坪 崇敬者人員 約百五十人

由緒 創祀の年月詳ならざるも、應永年間の水主神社舊圖繪中に當社の記あればそれ以前なるべしといふ。天正年中



止ル依テ村民社殿ヲ造營シ鳴松大明神ト奉祭ス瀬戸村ニ在テハ神社ノ空殿ト成シ以來明ノ宮ト唱ヘ村名亦明神村ト改

村 往古阿波國板野郡瀬戸村ニ

成 鎮座アリシ

松 ガ、或時國守

神 ノ命ニテ境内

社 ノ神木ヲ伐採

ス。神明憤怒

神體虚空ニ飛

去シ讚州引田

郷小海村ニ來

リ松樹ノ梢ニ

九福榮村

(四二) 村 別宮八幡神社 福榮村大字西山字道下

祭神 應神天皇

由緒 古くより西山村仙峨山北嶺に北向に鎮座ありしが、永正二年十一月火災に罹り社殿舊記悉く焼失せり。依て村民等山下の地を墾き社殿を造營し同年十二月十六日を以て奉遷せりと云ふ。一説に西山村は往古白鳥神社の氏子たりしが、其の地氏神に遠隔なる上に或年湊川に洪水ありて祭禮に參詣し能はざりし事あり。故に別に一祠を建て、西山村、東山村兩村の産土神として別宮八幡宮と稱すと云へり。寛文五年高松藩主松平頼重白鳥神社を再興し、その境内攝社たりし鶴内八幡宮を西山村に移し當社に合祀せり。爾來別宮八幡宮と稱し、世俗又北向八幡宮と稱す。鶴内八幡宮は慶長年間國主生駒一正より社領二十石の寄進ありたる社なりと云ふ。尙三代物語に『別宮八幡^在山^{在西} 白鳥再興時移ニ鶴内八幡神體此ニ而奉^之號曰別宮八幡^{別宮寺主^之之}』とあり。全讚史には『昔白鳥大明神在^三白鳥郷^一香西羽床^之徒以^ニ

其祖神ニ奉以爲ニ弓矢神ニ後人遂謬爲ニ八幡神ニ以失ニ其本ニ矣是以英公營ニ白鳥神祠ニ別營ニ八幡祠於西山ニ以爲ニ別宮八幡也』と云へり。大川郡誌に『往古ハ白鳥八幡宮又鶴内八幡宮ト稱シ白鳥一郷ノ産土神タリシ也或年湊川洪水ニテ西山東山兩村ノ氏子大祭ニ參詣ナン能ハザリシコト有シヨリ村民相協リ新ニ一祠ヲ西山ニ建テ別宮八幡ト稱シ兩村ノ鎮守社トセリ……寛文五年松平頼重公ノ白鳥ヲ再興セラル、ニ至リ當社ノ神靈及棟札ヲ別宮八幡宮ニ合併ナン遂ニ白鳥八幡宮ノ名ヲ絶ス、故ニ當社神殿ハ今猶北ニ向ヒテ白鳥宮ト相對セリ』と載せたり。

明治十年四月十八日村社に列せられ、同四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(三代物語 全讃史 名勝圖會 大川郡誌)

例祭日 十月十四日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 隨神門
寶物 獅子頭從三位藤原全秀作 棟札、鏡、武器等三十點
境内坪數 千三百三十九坪
氏子區域及戸數 大字東山 大字西山 二百七十九戸
境内神社 瀛津島大神社(市杵島姬命)
菅原神社(菅原道真公)

萬神社(八百萬神) 寛文年間村内小祠を合祀せるもの。

(一四) 山 神 社 福榮村大字東山字薄木

祭神 大山祇命
由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 五十坪
崇敬者人員 二十五人

(一五) 尾崎神社 福榮村大字東山字森兼

祭神 大國主命
由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 三坪
崇敬者人員 三百三十五人

(一六) 八坂神社 福榮村大字東山字東園坊

祭神 素戔嗚尊
由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社

主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 三十一坪
崇敬者人員 二百十人

(一七) 山 神 社 福榮村大字東山字狩居川

祭神 大山祇命
由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 七百七十四坪
崇敬者人員 九十人

(一八) 狩居明神社 福榮村大字東山字狩居川

祭神 瓊々杵命
由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 二十坪
崇敬者人員 八十八人

(一九) 金刀毘羅神社 福榮村大字東山字森兼

祭神 金山彦命 大川郡

(二〇) 山 神 社 福榮村大字東山字友國

祭神 大山祇命
由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 六十坪
崇敬者人員 百十八人

(二一) 春日神社 福榮村大字東山字友村

祭神 天兒屋根命

由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 三十坪
崇敬者人員 百三十人

(二二) 山 神 社 福榮村大字東山字森兼

祭神 大山祇命
由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 八坪
崇敬者人員 百三十人

(二三) 山 神 社 福榮村大字東山字友國

祭神 大山祇命
由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 六十坪
崇敬者人員 百十八人

(二四) 春日神社 福榮村大字東山字友村

祭神 天兒屋根命

由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 百八十坪
崇敬者人員 百十二人

(一五) 龍神社 福榮村大字東山字狩居川

祭神 豊玉姫命
由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外攝社。名勝圖會に「龍王權現境内(東山村)つゞきの山にあり此山を龍王山といふ。雨請祈願所なり」と見ゆ。

祭日 六月十四日 主なる建造物 本殿
境内坪數 百五十坪 崇敬者人員 百五十二人

(一五) 祝神社 福榮村大字東山字東圓坊

祭神 大國主命
由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 十六坪
崇敬者人員 百二十人

(一五) 山神社 福榮村大字西山字道下

祭神 大山祇神
由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 百二十三坪
崇敬者人員 三十二人

(一五) 八幡神社 福榮村大字西山字山下

祭神 譽田天皇
由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 二百六十八坪
崇敬者人員 二百人

(一五) 中將大神社 福榮村大字西山字中將

祭神 橘姫命
由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 二十三坪
崇敬者人員 八十人

(一五) 若宮八幡神社 福榮村大字東山字東圓坊

祭神 仁徳天皇
由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外攝社。世俗に篠塚伊賀守を祀ると云へり。傳ふる所によれば脇屋義治本村丹生山に來り隠れ、篠塚伊賀守も亦後を追ひて來り此の地に歿せり。勇猛にして里人の畏敬する所たりしが、歿後祠を建て、祀り篠殿明神(篠明神とも)と云ふ。後何時の頃よりか若宮八幡と稱するに至れりと。(名勝圖會 大川郡誌 篠原家過去帳)

祭日 十月十五日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 七百十六坪 崇敬者人員 六百五十二人

(一五) 八坂神社 福榮村大字東山字狩居川

祭神 素戔鳴尊
由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 三十坪
崇敬者人員 八十八人

(一五) 祝神社 福榮村大字西山字道下

祭神 崇神天皇
由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 六十七坪
崇敬者人員 三十二人

(一五) 八坂神社 福榮村大字西山字道下

祭神 大山祇神
由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社。明治十五年社殿炎上せしを以て、本社なる別宮八幡神社の神域に移轉せりといふ。
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 八十一坪
崇敬者人員 八十人

(一五) 龍神社 福榮村大字西山字兼弘

祭神 豊玉姫命
由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社

主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 六百七十九坪
崇敬者人員 四十人

(一六) 八坂神社 福榮村大字西山字兼弘

祭神 素戔鳴尊

由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 二千二百五十三坪
崇敬者人員 四十人

(一七) 山神社 福榮村大字西山字兼弘

祭神 大山祇神

由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 六百九十七坪
崇敬者人員 四十人

(一八) 山神社 福榮村大字西山字山下

祭神 大山祇神

由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 七十七坪
崇敬者人員 八十人

(一九) 地神社 福榮村大字西山字清房

祭神 大國主命

由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 百九坪
崇敬者人員 八十人

(二〇) 尾崎神社 福榮村大字西山字山下

祭神 大國主命

由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 六坪
崇敬者人員 二百人

(二一) 村與田神社 福榮村大字與田山字森兼

祭神 大倭根子日子國玖琉命

由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 五百八十六坪
崇敬者人員 二百人

(二二) 山上神社 福榮村大字西山字山下

祭神 道臣命

由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 三千七百三十二坪
崇敬者人員 二百人

(二三) 山神社 福榮村大字西山字山下

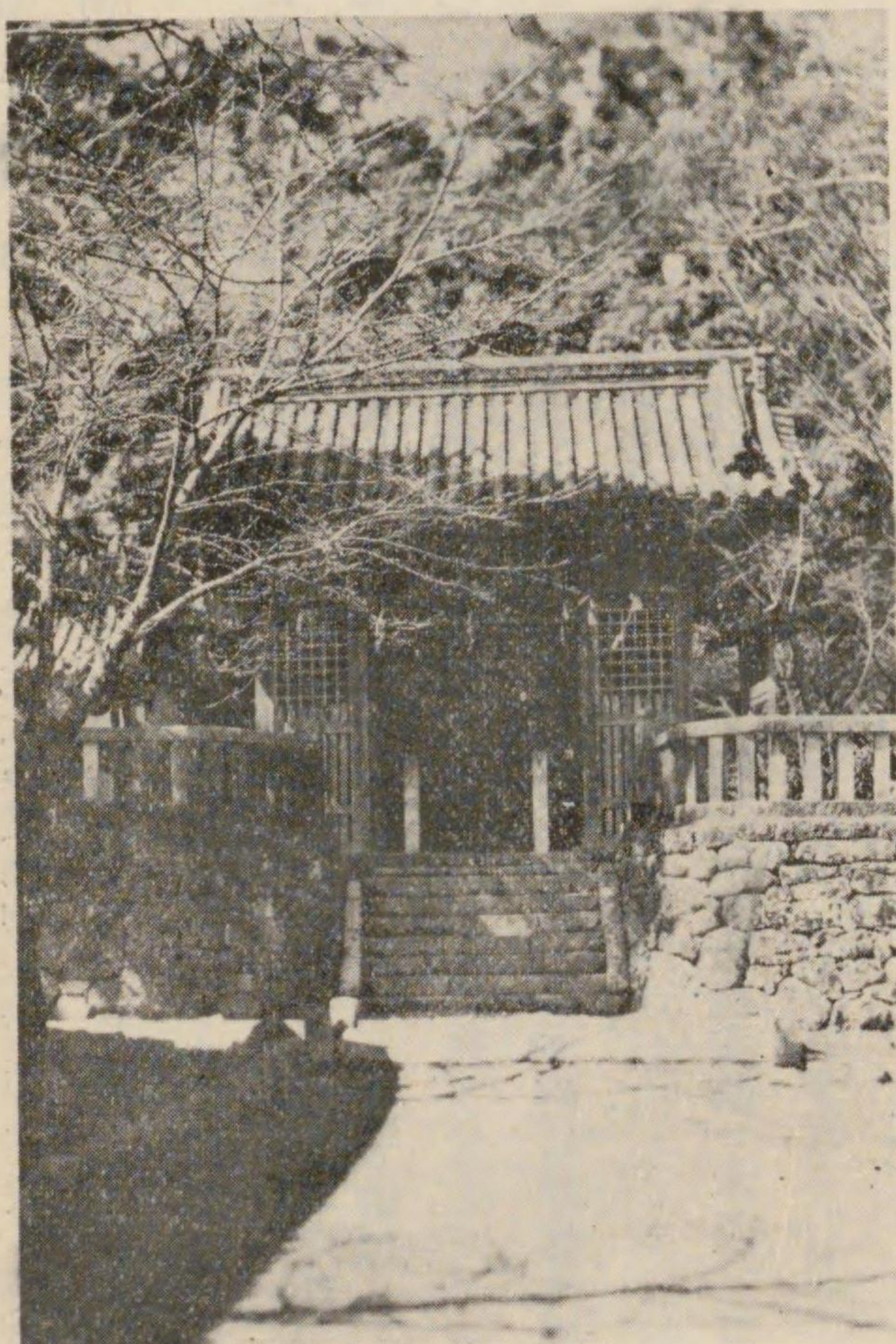
祭神 大山祇神

由緒 福榮村村社別宮八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 六百九十一坪
崇敬者人員 二百人

(二四) 山神社 福榮村大字西山字宮奥

祭神 大山祇神

由緒 明治維新までは王子権現と稱せられ、紀州熊野より
勧請せられしものと云ふ。傳ふる所によれば、元弘の昔大
塔宮護良親王般若寺より難を避けてその臣乗次、近房、近
守、行成、森兼等と共に紀伊國粟島よりひそかに當地に移り
給へり。里人に佐拍季國なる者あり、親王を奉じて當社に
匿し奉り、次で虎丸城を築きて親王を城中に奉ぜり。親王
般若寺にて大般若經の櫃中に匿れ難を免れ給ひしにより、
大般若經を書寫して當社に納め給へり。應永年間赤松顯則
當社に來り之を觀て、虚空藏院の僧増咩等に謀り之を播州



村與田神社

法華山に移し、別に増咩等に囑して大般若經六百卷を書寫して之を當社に納むと云へり。而して親王御筆の經は今尙法華山にありと云ふ。

明治二年郷名により社號を與田神社と改稱、同四年村社に列せられ、大正十一年九月二十三日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(三代物語 名勝圖會 讃州府志 大川郡誌)

例祭日 十月二十二日二十三日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 社務所 神門 神庫

寶物 木太刀外六點

境内坪數 千百七十五坪

氏子區域及戸數 大字與田山 百五十戸

境内神社 天滿神社(菅原道眞公)

大荒神社(猿田彦命) 嚴島神社(市杵島姬命)

(一七〇) 笠峰神社

福榮村大字與田山字森兼

祭神 大倭根子日子國玖琉命

由緒 福榮村村社與田神社境外末社。

傳説によれば護良親王此の地に薨じ給ひしが「京都に向けて葬れ」と御遺命あり。即ちこの地に葬り奉り祠を立て、祀ると云へり。

祭日 六月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 十坪 崇敬者人員 七百五十五人

(一七一) 所主神社

福榮村大字與田山字乘次

祭神 猿田彦命(一に曰 猿田彦命 乘次)

由緒 福榮村村社與田神社境外末社。口碑に護良親王の臣乗次の靈を祀ると云ふ。

祭日 三月五日、九月五日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 五十六坪 崇敬者人員 二百五十人

(一七二) 大藪神社

福榮村大字與田山字森兼

祭神 矢筈神(一に曰 森兼)

由緒 福榮村村社與田神社境外末社。口碑の傳ふる所は護良親王難を當地に避け給ひし時、其の臣森兼親王に従ひ

來り藪の竹を伐りて箒を製し、親王の御座所を清掃せり。森兼歿して後里人其の靈を祀ると云ふ。

祭日 十月十七日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 三百三十四坪 崇敬者人員 二百二十五人

(一七三) 所主神社

福榮村大字與田山字末國

祭神 猿田彦命(一に曰 佐伯季國)

由緒 福榮村村社與田神社境外末社。傳ふる所によれば

護良親王當地に來り隠れますや、土豪佐伯右衛門尉季國、親王を奉じて虎丸城を築き一族を擧げて大に忠勤を勵みたり。季國歿後其の靈を祀りて所主の神と稱すと云ふ。(名勝圖會)

勝圖會)

祭日 十月一日 主なる建造物 本殿

境内坪數 二十四坪 崇敬者人員 百五十人

(一七四) 八坂神社

福榮村大字與田山字天王

祭神 須佐之男命

由緒 福榮村村社與田神社境外末社

祭日 七月二十五日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 四十六坪 崇敬者人員 二百十人

(一七五) 石清水八幡神社

村社 福榮村大字入野山字下山

祭神 譽田別命 足仲彦命 息長足姬命

大川郡

由緒 湊川の上流南谷川、北谷川の落合に鎮座の故を以て川股八幡宮と稱せられ、又丹生郷入野山に鎮座あるを以て丹生山八幡宮と稱せられたり。傳ふる所によれば往昔(天

正年間とも清和天皇御宇とも)山城國石清水八幡宮造營の時諸國より役夫を徴し、稱して京夫と云ふ。入野山村に佐助(或は作助、作佐)なる者あり。正直至孝の者なりしが選ばれてこの役に出づ。或る時佐助期に遅れたる爲め門を出づることを得ず、已むを得ず宮の中に寝たりしに靈夢ありて神像を得たり。大に喜び病と稱して國に歸りひそかにこれをかくしむたりしに數年を経て又神夢あり、依て郷人と相謀り祠を建て、その像を安じ一郷の鎮守となせりと云ふ。國主生駒家の崇敬厚く社領一石五斗四升の寄進あり。三代物語及び全讃史には護良親王和州十津川より赤松則祐と共に來りてこの宮に匿れ、大般若經を書寫して納め給ひしを社僧長福寺之を傳ふとあり。寛永五年に至り氏子中大谷村、水主村笠松、入野山村上山、同村大橋は遠隔なるを以て分離し各御分靈を奉遷せりと云ふ。正徳三年長福寺と共に火災にかかり古文書寶物等焼失せりと。明治十年村社に列せられ、社號を石清水八幡神社と改む。大正十三年社殿を改築す。(三代物語 全讃史 名勝圖會 大川郡誌)

例祭日 十月十五日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 祭器庫 隨神門
境内坪數 四百六十三坪

氏子区域及戸數 大字入野山 二百十戸

境内神社 神明神社(天照大日靈尊)

春日神社(天兒屋根命)

(二六) 山野神社

福榮村大字入野山字定久

祭神 市杵島姫命

由緒 福榮村村社石清水八幡神社境外末社

祭日 陰曆九月十一日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 三十坪

崇敬者人員 二十人

(二七) 與田神社

福榮村大字入野山字寛四

祭神 大倭根日子國玖瓊尊

由緒 福榮村村社石清水八幡神社境外末社

祭日 十月七日

主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 四十四坪

崇敬者人員 二十人

(二八) 大森神社

福榮村大字入野山字正守

祭神 天若比古命

由緒 福榮村村社石清水八幡神社境外末社

祭日 陰曆九月十二日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 七十五坪

崇敬者人員 七十人

(二九) 春日神社

福榮村大字入野山字上末國

祭神 天兒屋根命

由緒 福榮村村社石清水八幡神社境外末社

祭日 陰曆九月十七日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 四十七坪

崇敬者人員 十人

(三〇) 八幡神社

福榮村大字入野山字端

祭神 譽田別尊

由緒 福榮村村社石清水八幡神社境外末社。寛永五年入野山村八幡宮の御分靈を字上山に奉祀せしに始まると云ふ

祭日 十月十二日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 祭器舎 隨神門

境内坪數 二千五百九十七坪 崇敬者人員 四百人

境内神社 春日神社(天兒屋根命)

金刀比羅神社(金山彦命) 神明神社(天照大日靈命)

若宮神社(大雀命)

(三一) 八幡神社

福榮村大字入野山字大楯

祭神 譽田別尊

由緒 福榮村村社石清水八幡神社境外末社。寛永五年

(紀元二二八八)の創祀に係る。當時入野郷下山に丹生八幡

宮(現福榮村村社石清水八幡神社)ありて一郷の總鎮守として崇敬せしが、下山は邊隅の地なるを以て、氏子中遠隔地の者相謀りて其の別靈を凶箇所に勸請奉遷しこれを祀る。

當社は其一なりといふ。

祭日 十月十二日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 九十坪 崇敬者人員 八十人

(三二) 大楯神社

福榮村大字入野山字大楯

祭神 直毘神

大川郡

一〇 白鳥村

(三一) 伊勢神社

白鳥村大字湊字上所

祭神 天照大神

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社。文化年間御師ハ

ツ大夫なる者頒曆の爲め當地に止宿し、其の勸化によりて創祀す。

主なる建造物 本殿 境内坪數 七十八坪

崇敬者人員 百五十人

(三二) 伊勢神社

白鳥村大字湊字上所

祭神 天照大神

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社。文化年間御師松

本太夫なる者頒曆の爲め當地に止宿し、其の勸化に依りて創祀す。

主なる建造物 本殿 樂殿 境内坪數 八十二坪
崇敬者人員 三百人

(一八五) 白山神社 白鳥村大字湊字上所

祭神 伊弉册尊

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社。元祿年間河野平六なる者加賀國より當地に移住し、祠を建て、己が氏神を祀りしものなりと云ふ。

主なる建造物 本殿 境内坪數 四十九坪
崇敬者人員 百五十人

(一八六) 杉尾神社 白鳥村大字湊字岡前

祭神 大己貴命

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社。全讚史に「杉尾大明神 在湊村今廢 今只礎石存而甚大」とあり。後再興せられたるものならむか。

主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 六十坪
崇敬者人員 四百五十人

(一八七) 子守神社 白鳥村大字白鳥字市ヶ原

祭神 不詳

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社。大川郡誌に「當社肇祀ハ詳カナラザレドモ子守明神又籠守宮ト稱シ白鳥中村ノ鎮守タリシ也。…抑モ子守神社ノ祭神ハ天水分神ニ座スサンバ丹後國與謝宮同國一宮ニテ籠神社又籠守宮トモ稱ヘ申シテ天水分神ヲ祀リ現今國幣中社タリ。神名帳考證ニモ籠神社水分神一名籠守トアリ。猶譽水村縣社水主神社所藏正徳二年村鎮守記ノ云フニモ、白鳥村鎮守明神往古自丹後國奉迎祭神水分神祭禮九月七日トアリ。然ラバ當社ノ祭神ハ天水分神ニシテ往年丹後ノ與謝宮ノ御分靈ヲ奉移シテ此地ノ鎮守ト齋シ奉リシナルベシ」とあり。

主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 百六十五坪
崇敬者人員 百二十一人
境内神社 北野神社(菅原道眞公)

(一八八) 梨木神社 白鳥村大字白鳥字中戸

祭神 不詳

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 境内坪數 三十二坪
崇敬者人員 千八百七十人

(一八九) 如體神社 白鳥村大字白鳥字四房

祭神 不詳

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 四百二十四坪
崇敬者人員 百三十人

(一九〇) 田中神社 白鳥村大字白鳥字田中

祭神 不詳(一に曰 日本武尊)

合祀祭神 菅原道眞公
由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社。傳ふる所によれば鎮座地は縣社白鳥神社の舊蹟にして、往昔は白鳥の陵あ

りしも湊川の洪水の爲に流失せりといふ。境内に北野神社(菅原道眞公)ありしが某年本社に合祀せられたり。

主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 百九十坪
崇敬者人員 四百八十三人

(一九一) 秋葉神社 白鳥村大字白鳥字久詰

祭神 不詳

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 十二坪
崇敬者人員 六十三人

(一九二) 金刀比羅神社 白鳥村大字白鳥字久詰

祭神 大物主神

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 境内坪數 二十坪
崇敬者人員 六十三人

(一五三) 秋葉神社 白鳥村大字白鳥字北池

祭神 不詳

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 千二百八十坪 崇敬者人員 三百八十五人

(一五四) 伊保神社 白鳥村大字白鳥字四房

祭神 不詳

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 二千百九十坪

崇敬者人員 百三人

(一五五) 愛宕神社 白鳥村大字白鳥字四房

祭神 火産靈神

由緒 白鳥本町縣社白鳥神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 千〇八十六坪

崇敬者人員 四百五十四人

一一 譽水村

(一五六) 郷譽田神社 譽水村大字横内 字松ノ内

祭神 譽田別尊 氣長帶姫命 仲姫命

由緒 創祀の年曆詳ならず。弘法大師この地に來り譽田八幡宮を勸請して虚空藏院の鎮守となすと云ひ、一説には承和五年(紀元一四九八)河内國の僧仁海來つて虚空藏院の寺主となり己が故郷の氏神譽田八幡を迎へて虚空藏院の鎮守となすと云へり。こゝを以て郷名を譽田と云ひしが後轉訛して與田と云ふに至る。明德三年虚空藏院主僧正増吽に神託ありて院の鬼門の松原に遷座す。これ現今の鎮座地にして譽田八幡宮と稱し、横内・中筋・川東・西村四ヶ村の産土神たり。右四ヶ村内には蝮蛇を生せず。若し他村より入る時は忽ち死す、八幡宮の惡み給ふ故なりといふ傳説あり。西村の地に譽田池(保陀池)と云ふありて往昔の御手洗池なりしと傳へられ、同村の八幡御供と云へる地は御供所跡なり。この地に於て市立ありしを譽田市と云ふ。古くは大社なりしが安永年間火災ありて舊記寶物等多く灰燼に

由緒 譽水村郷社譽田神社境外攝社。安藝盛長の創祀とも、盛長の子盛正の創祀とも云ふ。西村天満宮と稱せらる。安藝氏は蘇我入鹿の裔にして入鹿の子土佐に配流されて佐賀氏と稱す。その裔安藝右近太夫阿波に移り、その玄孫讚岐國吉津の里に移れり。吉野朝の頃安藝盛長(或は盛正)吉津より西村に來り創立する所と云ふ。盛正の女當社に遊びしに靈光その懷を射ることありて姪り一男を生む。これ虚空藏院の僧正増吽なりと云へり。(三代物語 全讚史 名勝圖會 大川郡誌 讚州府志)

祭日 十月二十五日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 境内坪數 千百四坪 崇敬者人員 二百人

境内神社 多尾神社(倭迹々日百襲姫命)

(一五六) 大森神社 譽水村大字川東字大原

祭神 宇受賣命(一に曰 倭迹々日百襲姫命)

由緒 譽水村郷社譽田神社境外末社

祭日 十月二十九日 主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 二百四十八坪 崇敬者人員 七十人

祭神 菅原道真公

(一五七) 天満神社 譽水村大字西村字東道上

歸し衰微せしが、延享年間社殿の再興ありて氏子より社田をも寄進し隆盛となれり。明治初年郷社に列せられ、同四十年九月二十一日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。明治四十三年拜殿、幣殿の改築あり。(横内村譽田八幡宮由來記 三代物語 全讚史 名勝圖會)

例祭日 十月十四日十五日

主なる建造物 本殿 釣殿 幣殿 拜殿 下拜殿 祭具舎

手洗盤須屋 隨神門 神馬舎 神樂所 大麻殿 御幸殿

寶物 狛犬増作呼作一點 木造男神像一點 扁額、太刀、六歌

仙色紙等十七點

境内坪數 二千三百九十四坪

氏子區域及戸數 大字横内 大字中筋 大字川東 大字西村

五百戸

境内神社 金刀比羅神社(大物主命)

若宮神社(仁德天皇)

高良神社(武内宿禰 一に曰 武内宿禰 天兒屋根命)

(一九) 神明神社 譽水村大字川東字中道

祭神 豐受比賣命(一に曰 火明命)

合祀祭神 水分神

由緒 譽水村郷社譽田神社境外末社。

明治四十三年^{字中}道 池ノ神社を合祀す。

祭日 十月十六日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 八十四坪 崇敬者人員 百十人

(二〇〇) 東山神社 譽水村大字川東字中道

祭神 大物主神

由緒 譽水村郷社譽田神社境外攝社。名勝圖會に『東山

權現 川東村にあり社僧松林寺祭禮九月十八日』と見ゆ。

祭日 九月二十八日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 五百四十六坪 崇敬者人員 百五十人

(二〇一) 縣水主神社 譽水村大字水主字宮内

祭神 倭迹々日百襲姫命

由緒 延喜神名式に『讚岐國大内郡小水主神社』とありて
讚岐國式内二十四社の一なり。鎮座の年月詳ならず。寶龜
年間の勸請と云ふも再建の訛傳なるべしと云ふ。傳ふる所
によれば、孝靈天皇の皇女倭迹々日百襲姫命御歳七歳の砌
大和國黒田の盧戸より出でまし、八歳の折當國安堵の浦に
着き給ひ、居を水主に定め給ふ。土人これを大内と云ひ、大
内の郡名はこゝに起ると云ふ。水徳自在の神と稱へられ大
水主大明神と稱し一郡の總鎮守として之を祀れりと傳ふ。
古くより著名の神社にして一に大社と呼ばれ洛陽の坤の方
讚岐國に大明神あり大水主御社と號すなどと云はれ、朝野
の崇敬頗る厚く文武天皇の三年大納言石上麻呂を勅使とし
て奉幣し疫病平癒を祈らせ給ひ、承和三年に従五位下を奉
らる。これ當國に於て神社に位階を奉られしことの初めな
り。續日本後紀に『承和三年十一月壬申讚岐國水主神奉授
從五位下』とあり。貞觀八年四月九日從五位上(三代實錄)
に、延喜の制官社に列せられ、承平五年南海の海賊平定を
祈願せられし故を以て天慶三年二月一日正五位下(長寛勸
文)に、更に累進して正一位に昇り給へり。集古十種に
『正親町天皇勅額正一位大水主大明神、正親町天皇御猶子
龍池院二品尊證親王ノ御筆』とありて勅額現在す。天曆二

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 渡廊下 寶庫 社務所

神輿庫 御幸殿

寶物 國寶 内陣大般若經函六拾個杉白木造、至徳三年十二月沙門亮賢作 狛

犬一點楠彫刻 男神像一軀杉木造座像、丈一尺八寸五分、作者不詳 女神像四軀

二軀杉木造座像、丈一尺六分、二軀(以上明治三十四年國寶に楠木造座像、丈一尺五分、作者不詳)

指定さる) 大般若經二部千二百卷 正親町天皇勅額一面

其他神像、棟札、扁額、獅子頭、狛犬等五十餘點

境内坪數 一萬〇五百六十坪

氏子區域及戸數 大字水主 參百十戸

境内神社 國魂神社(倭國香姫命)應永十二年正月二十四日上棟。

熊野三社(事解男命 伊弉冉尊 早玉男命)上

孝靈天皇社(大倭根子彥太瓊命)

若宮神社(大雀命) 神明神社(天照大神)

隨神社(豐磐間戸命 櫛磐間戸命)

幸殿神社(幸嚴命 命 天兒屋根命 大山津見命 迦具土

命 菅原道眞公 衝立船戸神 須佐之男命 倉稻魂命

市寸島比賣命 金山比古命)祭神幸嚴命といふは洛陽比叡山の頃大水主大明神の内陣大般若經の書寫修理を終つて此の地に寂せしを以て祀る。元境外神社なりしが明治三十五年水主神社境内擴張により自然境内神社となる。合祀祭神は明治四十二年境内神社山神社、愛宕神社、船戸神社、天満神社、八阪神社稻春荷神社、殿島神社、金山神社、日神社の九社を合祀せり。

年文章博士橘直幹勅使として參向あり。應和二年參議藤原朝臣忠助勅を奉じて參向祈雨の事あり。宣旨ありて莊を大水主と云ひ、號を大水主大社と稱し奉る。嘉禎三年、貞和二年、應永元年、同三十一年、文明六年、慶長四年、元和三年等それぞれ社殿の再建修營ありて愈盛大となれり。當社所藏の經箱書付に社員七十五人社坊四十二字とあり。又嘉吉二年の供僧配座、文安元年の神人配座の記録あり。而して元和二年までの再建修造の資は大内郡内の資糧を以てせりと云ふ。其他國司の崇敬にありては、天承元年國司藤原經隆、長承二年目代河内前司盛通、長寛元年國司藤原秀能、仁安二年目代橘公清等の參拜あり。天正十五年生駒近規當國に封ぜらるゝやその崇敬厚く、四代高俊社殿を修し社領三十五石を寄進す。正保元年高松藩主松平頼重の參拜あり、元祿六年松平頼常參拜、社殿を修造し田三十五石の寄進あり。現今の社殿は本殿安政五年八月再建、幣殿慶應元年六月の再建なり。明治維新の際郷社に列せられ、同三十六年一月二十三日縣社に昇格、同四十年三月二十二日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(王藻集 三代物語 生駒記 全叢史 社記 官社考證 名勝圖會 大川郡誌)

例祭日 十月十七日

水神社 (水速女命) 延暦九年最澄法師水主神社に參籠、天台止觀の法門を開演す。後空海來り眞言密教を講演す。その時關伽水を汲みし關伽井泉へ祀りたるものなりと云ひ傳ふ。

(1101) 新宮神社 譽水村大字水主字宮内

祭神 伊邪那美命

由緒 譽水村縣社水主神社境外攝社。鎮座の年月詳ならず。三代物語、全讃史等は明徳年間虚空藏院の増呼の創祀と云へり。水主神社社記に『當所三所權現(當社及宇西那智神社、宇貞本宮神社を合せて三所權現又は水主三山權現と云へり)之事或記に曰明徳年中増呼遷於新宮本宮那知神一以爲三上權現』と云ふ是亦大なる誤なり。當社和贊に云那智新宮を左右に立て本宮證成を玄武とし左青龍の河清く那知の瀧より落來るらん新宮虎丸右にあり四神靈地相應す云々是は孝靈天皇帝の御宇大水主大明神鎮座の地を撰定の詞なり。然れば則三所權現は當社明神鎮座の前より影向あること必せり……其上熊野權現と水主明神重々有深秘傳授不尋其根謂其枝葉者也自往昔雖有影向依中絶増呼被再興と見たり』とあり。(全讃史 三代物語 神社考 讚州府志)

(1105) 石清水神社 譽水村大字水主字南笠松

祭神 譽田別天皇 足仲彦彦命 息長足姬命

由緒 譽水村縣社水主神社境外攝社。鎮座の年曆詳ならず。ざれども寛永九年の棟札ありと云ふ。傳ふ所によれば、往古笠松の地は入野郷に屬したりしが、氏神石清水八幡神社に遠きを憂ひ御分靈を奉遷して社殿を營み以て笠松の産土神とせりと云ふ。笠松八幡宮又は笠松神社と稱せられしが明治三十五年石清水神社と改稱し、福榮村村社八幡神社境外攝社たりしを縣社水主神社攝社とせり。(名勝圖會 讚州府志 大川郡誌)

祭日 十月十日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 御供所 神輿庫 隨神門 境内坪數 七百坪 崇敬者人員 五十人

(1106) 八阪神社 譽水村大字水主字下屋敷

祭神 建速須佐之男命

合祀祭神 岐命 天兒屋根命 大雀命 火産靈命 大山津見命 市杵島姬命 事代主神 迦具土命 金山彦命

祭日 陰曆一月二十三日 主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 二千百三十七坪 崇敬者人員 五十人

(1104) 那知神社 譽水村大字水主字西内

祭神 事解男命

由緒 譽水村縣社水主神社境外攝社。水主三所權現の二なり(宇宮新宮神社の條參照)

祭日 陰曆一月二十三日 主なる建造物 本殿 境内坪數 千七百二十九坪 崇敬者人員 五十人

(1103) 本宮神社 譽水村大字水主字貞任

祭神 早玉男命

由緒 譽水村縣社水主神社境外攝社。水主三所權現の二なり(宇宮新宮神社の條參照)

祭日 陰曆一月二十三日 主なる建造物 本殿 境内坪數 千五百七十二坪 崇敬者人員 七十人

大國主命

由緒 譽水村縣社水主神社境外末社。口碑の傳ふる所は

往古水主の住民瀧宮神社(綾歌郡瀧宮村村社)の御分靈を奉遷して牛馬の守護神とせしなりと云ふ。

明治四十二年境内神社たりし左記十社を合祀す。

船戸神社 春日神社 若宮神社 荒神社 山神社 嚴島神社 蛭子神社 秋葉神社 金刀比羅神社 瘡神社

祭日 陰曆七月二十三日

主なる建造物 本殿 拜殿 社務所 境内坪數 四百九坪 崇敬者人員 三百人

一二 丹生村

(1107) 郷社 石清水神社 丹生村字大谷宮脇

祭神 譽田別尊

相殿 足仲彦天皇 息長足姬命 由緒 初め山城國石清水八幡宮の分靈を、大内郡入野郷下山(現今の福榮村)に勸請して石清水八幡宮と稱し來りし

が、下山の地は入野郷の邊隅なるを以て、寛永五年同郷大谷村中穂山なる現鎮座地に遷座せりと云ふ。世に達生八幡宮と呼ばれ安産の神として妊婦の崇敬頗る厚し。三代物語に『達生八幡宮 在大谷村 一郷社祀之神通寺主其祭相傳昔此地王子降誕因號誕生里孕婦祈此神必生如達』と見ゆ。寛永の遷座以前文祿年間にも再營ありしと。其の後慶應四年本殿を再建、明治八年幣殿拜殿の改築あり。明治三年社號を石清水神社と定め同年五月郷社に列せられ、明治四十年九月二十一日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(全讃史 名勝圖會 讚州府志 神社考)

例祭日 十月十一日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 社務所 隨神門

境内坪數 三千八百九十一坪

氏子區域及戸數 丹生村 九百四十二戸

境内神社 三社神社(大日靈尊 大雀命 大國主命)

春日神社(天兒屋根命)

合併神社(素盞鳴尊 岐神 大國主命 大山祇命 天兒屋根命 菅原道眞公 猿田彦命 表筒男命 中筒男命 底筒男命 市杵島姫命 倉稻魂命 蛭子命 百襲姫命)

祭神 少彦名命

(110) 蛭子神社 丹生村字小磯内間

祭神 少彦名命

由緒 丹生村郷社石清水神社境外末社

祭日 九月二十日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 百八十坪 崇敬者人員 八十人

(111) 鎮守神社 丹生村字落合高垣

祭神 奥玉命

由緒 丹生村郷社石清水神社境外末社

祭日 九月八日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 九十七坪 崇敬者人員 七十人

一三 松尾村

(112) 豊田神社 松尾村大字田面字豊田

祭神 素戔鳴命(一に曰 譽田天皇)

大川郡

(108) 船掛神社

祭神 百襲姫命

由緒 丹生村郷社石清水神社境外攝社。

神と稱せらる。寶曆の明細帳に、入野郷馬篠村船掛大明神とあり。全讃史大水主大明神の條に『孝靈天皇第一皇女百襲姫命謫於此邦皇舟初着大内郡馬篠浦掛其船之地立祠奉之謂船掛大明神』とありて、現今の鎮座地は水主神社の舊宮跡なりと云へり。亦三代物語に『此神恒守護南海旅行者必謁此神俗呼曰首途神社中舊有舟檣今失其所在』と見ゆ。(全讃史 名勝圖會)

祭日 九月九日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 千八百五十四坪 崇敬者人員 百五十人

(109) 中山神社 丹生村字中山坪井

祭神 皇后仲姫命(一に曰 應神天皇 仲姫命)

由緒 丹生村郷社石清水神社境外末社

祭日 十月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 二百四十坪 崇敬者人員 六十人

由緒 富田村郷社富田神社境外攝社。古來田面村一隅の鎮守神にして世に天王の祠といふ。古へは大社にして今猶礎石を存すといふ。(大川郡誌)

祭日 九月七日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 千五百二十二坪 崇敬者人員 約一千人

(113) 笠峰神社 松尾村大字田面字森行

祭神 豊玉姫命

由緒 富田村郷社富田神社境外末社

祭日 陰曆八月二十日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 百九十六坪 崇敬者人員 百八十人

(114) 八幡神社 松尾村大字田面字八幡

祭神 品陀和氣命

由緒 富田村郷社富田神社境外末社

祭日 十月十八日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 九百五十七坪 崇敬者人員 八十人

(三五) 鹿庭神社 松尾村大字田面字鮎蹄

祭神 品陀和氣命
由緒 富田村郷社富田神社境外末社。 官社考證追録に『鹿庭神社 同村(田面村)に在延享の神社記に見ゆ』とあり。

祭日 陰曆九月十二日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 五百七十六坪 崇敬者人員 二百人

(三六) 森行神社 松尾村大字田面字森行

祭神 品陀和氣命
由緒 富田村郷社富田神社境外末社

祭日 九月十二日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 御供所
境内坪數 三百五十二坪 崇敬者人員 百人

(三七) 王子神社 松尾村大字田面字王子

祭神 品陀和氣命

由緒 富田村郷社富田神社境外末社。 名勝圖會に『王子權現 田面村にあり社僧本覺寺祭禮九月八日』と見ゆ。
祭日 九月十三日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 二百三十二坪 崇敬者人員 三百十人

(三八) 八劔神社 松尾村大字富田東字友近

祭神 八千矛神
由緒 富田村郷社富田神社境外末社。 傳ふる所によれば、往古此の地にて劔八口を發掘せり、里人神劔なりとし祠を建て之を御靈代として祀り號して八劔大明神といふ。後五口を尾張熱田神宮に納めたりといふ。寛文六年九月社殿再建の棟札寫あり。古來より富田東村一圓の總鎮守神にして、寛文年間松平頼重一村一社の制を定むるや村内の小祠を當社に合祀せりといふ。(社記 名勝圖會)

祭日 九月九日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 隨神門
境内坪數 九百九十三坪四合 崇敬者人員 約二百五十人

一四五 名村

(三九) 日下神社 五名村字箇橋

祭神 品陀和氣命(一に曰 大鞆別命 足仲彦命 氣長足姫命)

由緒 富田村郷社富田神社境外末社。 世に日下八幡宮と稱せらる。當地は本社富田神社を距ること遠きを以て同社の分靈を迎へしなりと傳ふ。(名勝圖會)

祭日 十月十七日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 參拜者休息所
境内坪數 二百六十二坪 崇敬者人員 約二百人

(四〇) 大楯神社 五名村字西ヶ谷

祭神 倭姫命
由緒 富田村郷社富田神社境外末社。 古來大楯免一圓の鎮守神にして俗に權現の稱あり。名勝圖會に『十二社權現 五名村大楯にあり。社人六車氏、社僧本覺寺』と見ゆ。

(四一) 金刀比羅神社 松尾村大字富田東字友近

祭神 大物主命

由緒 富田村郷社富田神社境外末社。 文政八年(紀元二四八六)四月十八日創祀。

祭日 四月十二日 九月二十日
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 千七百十坪
崇敬者人員 約九百人

境内神社 坂下神社(市杵島姫命 素盞鳴命) 明治四十四年十二月一日

日字坂下内に鎮座せし小祠、荒神社外一社を合祀の上本社境内に移轉、境内神社となし、且つ字名を取りて坂下神社と稱す。

友近神社(倭姫命 素盞鳴命 武甕槌命 天照皇大神 大山祇命 船戸命) 坂下神社と等しく、明治四十四年十二月一日日字友近内に鎮座せし瀧宮神社外六社を合祀、本社境内に移轉し字名をとりて友近神社とす。

白井神社(菅原道眞公 大山祇命 豊玉姫命 素盞鳴命 船戸命 倭姫命) 明治四十四年十二月一日日字白井内に鎮座のし、字名によりて社號を白井神社と稱す。

北地神社(豊玉姫命 武甕槌命 船戸命 事代主命 大山祇命) 坂下、友近、白井の諸社と共に明治四十四年十二月一日日字北地内に鎮座せし柏神社外四社を合祀の上境内に移轉し境内神社となし、字名を取りて北地神社と稱す。

祭日 九月六日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 千四百八十八坪 崇敬者人員 約二百五十人

(三三) 鈴竹神社 五名村字中屋敷

祭神 大山祇命

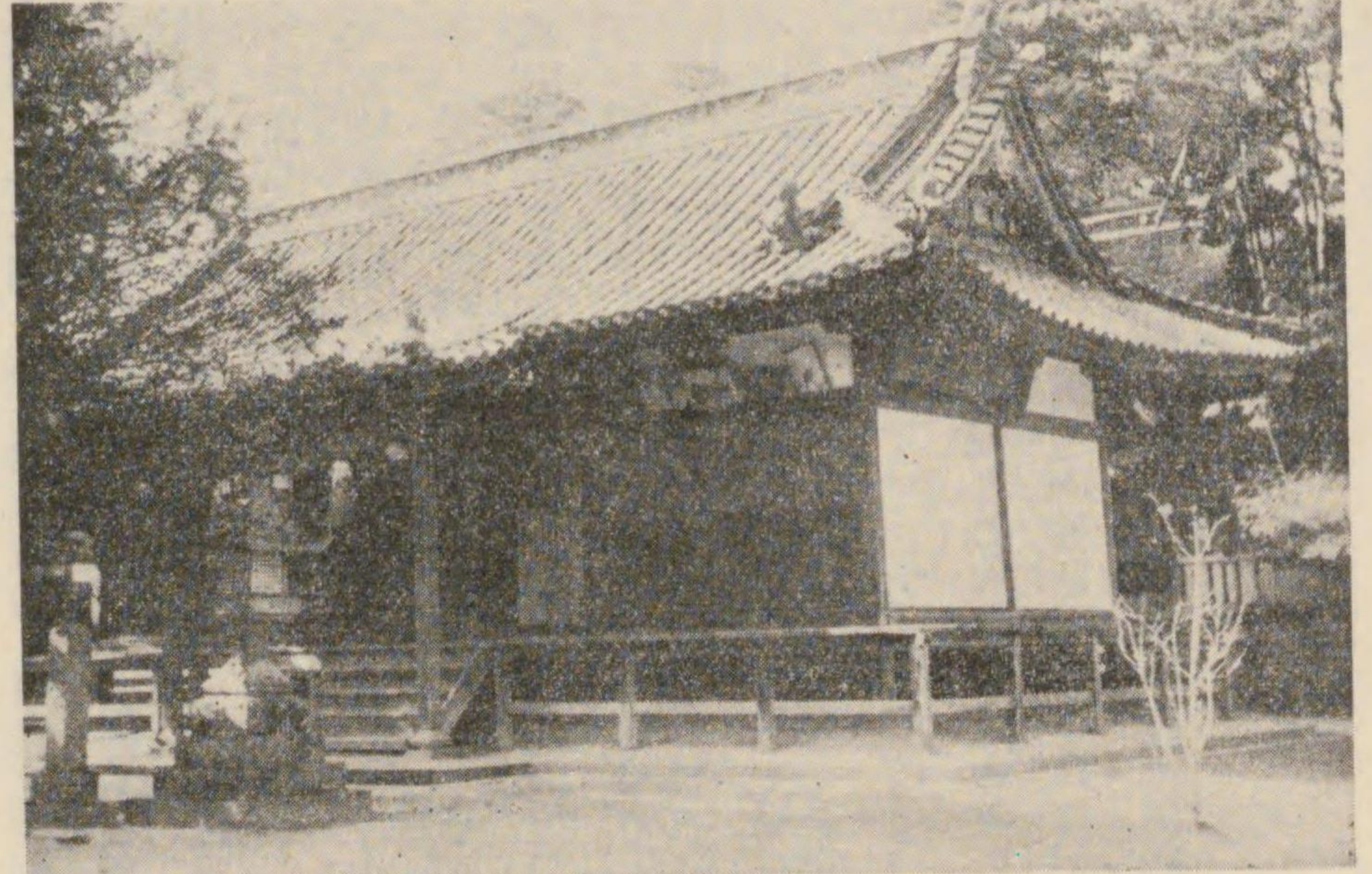
由緒 富田村郷社富田神社境外末社。一に日下神社と稱す。往古は五名村の總鎮守社なりしといふ。大川郡誌に『寶曆神社帳ニモ記載サレタルヲ見レハ舊社ナル事ハ明カナリ』とあり。日本紀略に『延喜六年二月七日授讚岐國榮神從五位下』とある國榮神は今其の所在不明なるも、國榮久佐加と訓むべく或は當社これならむかと云へり。(官社考證附録 西讚府志 大川郡誌)

祭日 九月五日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 千三百〇五坪 崇敬者人員 約二百人

(三三) 長野神社 五名村字大家下

祭神 品陀和氣命 (一に曰 大鞆別命 足仲彦命 氣長足姫命)

當時は百四十五宇の末社ありしが後世悉く廢社となれりと傳ふ。中世以降八幡神の尊崇普く遂に寒川神の名を失ふに至れりと雖も、里人今猶寒川八幡宮と稱し、神社保存の記録にも寒川八幡宮とあり。永祿年間雨瀧城主安富又三郎社殿を再建す。天正年間安富氏没落し其の長臣六車左衛門太夫宗



郷社富田神社

堪當社に奉仕し以後歴代祠官となりて今に至る。元文三年、元祿十一年四月屋根葺替、寛延二年三月幣殿拜殿改築

由緒 富田村郷社富田神社境外末社。此の地古來富田社の氏子たりしも、富田神社を距ること三里餘の地なるを以て其の遠きを憂へ、氏神の分靈を奉遷せしなりと傳ふ。爾來長野免一圓の鎮守神として現今に至れり。(名勝圖會)

祭日 十月二十日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 參拜者休息所
境内坪數 三百九十五坪 崇敬者人員 約四百五十人

一五 富田村

(三四) 郷富田神社 富田村大字富田字宮内

祭神 品陀和氣命 帶仲彦命 息長帶日賣命

由緒 往昔相模國高座郡寒川神社の分靈を勸請し寒川神社と稱し一郡の總鎮守となす。因て郡の名を寒川と云ふといへり。貞觀三年富田彌太郎朝紀州鳩ヶ峯八幡宮の分神を奉じ來り當社に合祀すと。或は鳩ヶ峯八幡宮の分神を迎へて難波(和名鈔に寒川郡難波郷あり)八幡と稱し難波一郷の産土神となし寒川神社を境内末社とせりと云ふ。其の

寛延三年三月隨神門新築、寶曆十二年本殿修理、明和二年春屋根葺替等あり。明治十五年本殿幣殿拜殿を改築、大正十年本殿屋根葺替、大正十三年神輿庫新築、昭和八年社務所を改築せり。

明治五年郷社に列せられ。寒川八幡宮を富田神社と改稱。同四十年九月二十一日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。境内には樹齡千年を超え周圍二丈五尺に垂んとする大樟あり。又老杉檜枝を交へ頗る幽邃にして森嚴なり。(三代物語 全讚史 讚州府志 官社考證 名勝圖會 大川郡誌)

例祭日 十月十五日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神饌所 神輿庫 社務所

寶藏 隨神門 神馬舎 手洗鉢 巢家

寶物 扁額 松平頼格筆 棟札五點 獅子頭其他十二點

境内坪數 二千二百一十一坪

氏子區域及戸數 富田村 松尾村 五名村 千八百戸

境内神社 杉尾神社(大己貴命)

丑寅神社(大鷦鷯天皇 菟道稚郎皇子)

兵主神社(大己貴命)

住吉神社(上筒男神 中筒男神 底筒男神)